

---

# もしも笑っていいともの“テレフォンショッキング”に東方キャラが出演したら？

月見草

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

もしも笑つていいとも“テレフォンショッキング”に東方キャラが出演したら?

### 【コード】

N9799V

### 【作者名】

月見草

### 【あらすじ】

タイトル通りです。全ては想像ですが、楽しんでいただけないと嬉しいです。

次回に出演するゲストにリクエストがあつたらお書きください。出来る限り受けます。

毎日更新…とはいませんが、番組と同じく正午に更新いたします!

## 第一回・魂魄妖夢（前書き）

これは“もしも”の話です。なのでこのキャラならいつ答えるのでは?といった想像のもと書きました。原作と少し離れてるかもしれません。

短編として投稿しましたが、連載してほしいとの声を受け連載することにしました。よつて短編として投稿したもの削除し連載として出しました。

申し訳ありませんがお気に入り登録された方はもう一度登録し直してください。

また、セリフが誰のものかわかりやすくなるため台本みたいに書きました。このため“タモリさん”ではなく“タモリ”と書いた点が多くあります。

テンポよく読んで頂けるためにこのように致しました。“JT承下さい。

またテーマソングが流れる所は“　”マークで表しました。あまりいいともを見ない方には少しあわづらいかもしません。

それではどうぞ!

## 第一回・魂魄妖夢

(

タモリ

「今日も暑いね~」

『そ~ですね~!』

タモリ

「こんな暑い日はいつめん食べたいよな~」

『そ~ですね~!』

タモリ

「でも冷や麦もいいよね~」

『そ~ですね~!』

タモリ

「どうちなんだよ~」

タモリ

「では登場していただきましょ~。初登場、魂魄妖夢ちやんです~。  
ど~づわ~」

(

パチパチパチパチ!!

拍手と共に妖夢登場！

妖夢

「ど、どうせ…よろしくお願ひいたします！」

過剰にペロペロ頭を下げつつ、緊張した面持ちで妖夢が出てくる…

『可愛い～～！』

『顔ちつちぢゅ～い！』

妖夢

「あ、ありがとうございます！」

顔を赤面させつつ、照れ隠しで少しうつむいた顔で妖夢がタモリの横に歩み寄る

緊張で少し動きが硬く、手を体の前でつないでいる…

タモリ

「これは？」

妖夢

「あ、はい。東方シリーズ第13作目、“東方神靈廟”的ポスターです」

タモリ

「へえ～。もう13作か～。初出演だっけ？」

妖夢

「あ、自機としてはそうですね」

タモリ

4

「へえ～、もうすぐ発売だっけ？」

妖夢

「そうですね。もうすぐです」

タモリ

「これ貼つとこ～」

タモリ

「花輪のほうも随分と…」

妖夢

「ありがたい限りで…」

タモリ

「八雲家一同にやひより」

妖夢

「いえ、幽々子様です！」

はにかみつつタモリに突っ込む

タモリ

「あ、靈夢ちゃんに魔理沙ちゃん、早苗ちゃんも…神靈廟つながりですかね」

妖夢

「ええもうありがたい限りで…」

緊張で頭が空回りしてるので何か知らないが花輪にへコペコ頭を下げる

タモリ

「あれ、NUNOさんからも…上海アリス幻樂団ーすじい花輪だね～」

妖夢

「お気づかいありがたいです！」

タモリ

「え～、初の東方キャラですが…」

タモリが席につくのに促され、妖夢も席につく

タモリ

「髪切った？」

妖夢

「あ、はい…。初の自機なんで…」

タモリ

「イメチャーン？前髪辺りがずいぶんふんわりと…」

妖夢

「ええ、早苗さんに現代風の髪型にしてください」と頼んでみたらこうなりました」

照れ笑いを浮かべつつ指摘された前髪をやわらぐ。

タモリ

「前と比べてどう?」

妖夢

「そうですね～、切った時はずいぶん髪が軽くなつて違和感がありましたが、慣れてくるとずいぶん風が通り抜けて気持ちいいですね

！」

タモリ

「あ、そう～～～んと～～と暑～からね～。スタジオにくるまで大変だつたでしょ？」

妖夢

「いやまあ、紫様に送つて頂いたので迷つことはなかつたですが、やはり刀があると人目を引きますね～」

タモリ

「銃刀法とかどうだつたの？」

妖夢

「大変でしたね～。なかなか許可が下りなくて…。最終的に上海アリス幻樂団の方々などに支援していただいて…」

タモリ

「うわ～、大変だつたんだ…」

妖夢

「ええ…役所の方々に相当頭を下げましたよ～ついには紫様や映姫様まで役所に押しかけて…」

タモリ

「これがその…樓觀劍と白樓劍…だっけ？」

妖夢

「あ、はいこちらです」

樓觀劍と白樓劍を腰から抜き、お密さんにも見えるよう少しあげ

る。

タモリ

「ほ～、桜柄の飾り…。斬れる物などあんまりない?」

妖夢

「それじゃ役立たずですよ!斬れ“ぬ”物などあんまりない、ですよ!」

少し緊張が解けたのか、笑いつつタモリに突っ込みを入れる

タモリ

「はっははは…。それじゃ一つ披露してもらひえるかな?」

そういうとアロさんが厚さ3cmほどいの鉄板を持って来た!

妖夢

「うわ、こいつのまに…」

タモリ

「いけそつ?」

妖夢

「ええまあ…。あ、お密さん、すいませんが少し身を引いておいてくださいね」

お密さんが少し下がるのを確認すると、刀を帯刀し直し構えを取る

妖夢

「では…いきます!“断靈剣”成仏得脱斬!!」

スパーン！！

振り下ろされた二刀は鮮やかに鉄板を切断し、桜色の閃光がスタジオにきらめく！

『おおーーー!!』

妖夢

「力、弱めたんですけどね」

タモリ

「…わあ」

あ然とした顔で鉄板を見つめていた…

一曰CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持つていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

妖夢

「わ～、凝ったデザインですね」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

妖夢

「そうですね～。私これでも庭師の端くれなんで…“庭に桜の木がある方”なんてどうでしょう?」

タモリ

「ほお…。やっぱり桜が好きなんだ?」

妖夢

「そうですね。一番好きです」

タモリ

「では“庭に桜の木がある方”スイッチオン!」

（

妖夢

「わ！一人！」

両手で口を覆いつつ、喜びながらモニターを見つめる！

タモリ

「すごい！お、あの人だ！」

照れながら手を上げるお姫さんを指す。

妖夢

「ありがとうございます！」

ADさんからストラップを受け取ると、すぐに立ち上がり深々とお辞儀する。

（

一日CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さー！」

『えへーーー』

妖夢

「あはは…。私、幽々子様に仕えていますが…その従者つながりで八雲藍さんを紹介したいと思います!」

タモリ

「おお～九尾のキツネか～」

妖夢

「実際に会つと相当な迫力ありますよ、あの尻尾!」

ちゅうじゅうのときADさんがつながった電話を妖夢に渡す

妖夢

「あ、もしもし妖夢です」

藍

「あ、もしもし～」

妖夢

「今、何されていたのです?」

藍

「ちゅうじゅうお皿(い)飯中です～見ていましたよー」

妖夢

「わ、ありがとうございますー!それじゃあタモリさんに代わりますねー!」

受話器を丁寧にタモリに渡す

タモリ

「もしもしタモリです」

藍

「もしもし、八雲藍です。こんにちは」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか?」

藍

「あ、はい。大丈夫です!」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな?」

藍

「いいとも~!」

タモリ

「はい、お待ちしてま~す」

パチパチパチ…

音楽と共に鳴り響く拍手で無事に終了した…

## 第一回・魂魄妖夢（後書き）

いや〜、トーク番組を二次創作するのは大変でした。ほんと芸能人って大変ですよね。タモリさんは本当にすごい方だと思います。何の参考もなくやつたので少し違和感があるかも。実際、私はいともをあまり見ないんですよね。時間的に見れないんです。妖夢が髪切ったことをきっかけにひらめいて書いてみましたが…いかがでしたか？

読みありがとうございました！

## 第一回・八雲藍

タモリ

「はい、こんじょうは～」

『こんじょうは～』

タモリ

「お盆はぜひでした？高速は混んでましたか？」

『そ～ですね～！』

タモリ

「やつぱり列車かな～。でも新幹線も混むよね～」

『そ～ですね～！』

タモリ

「となると飛行機？でも混むかな？」

『そ～ですね～！』

タモリ

「どうすりやいいんだよ～」

タモリ

「では今日のゲストに来ていただきましょ～。昨日の魂魄妖夢ちゃんの紹介で、初登場、八雲藍さんです～！ど～ぞ～」

パチパチパチパチ！！  
拍手と共に藍が登場！

『キレイ』

『尻尾かわいい』

藍  
「どうもありがとうございます！」

いつもどおり、両手を式服の袖に入れた中国人のよつな構えで藍が  
登場！だが…

フワッ！

藍

「あ、すいません尻尾が…」

登場と共に藍の尻尾がタモリさんの後頭部をさする…

タモリ

「おおう…びっくりした！」

藍

「す、すいません！」

と、頭を下げるにセットに尻尾がぶつかる…

タモリ

「おおっとと…大丈夫！？」

藍

「すいません…」

藍

タモリ 「その尻尾苦勞しそうだね～。お、それは？」

藍

「あ、はい。栃木県の余笠川ふれあい公園で9／26に行われる第9回那須九尾まつりのポスターです」

タモリ

「へえ～、行つたりしてるので？」

藍

「いや～行きたいんですけどね～。流石に色々と問題が…。影からこつそり見てる程度で…」

タモリ

「そ～なんだ」

藍

「一度作るのに参加したいんですけどね～。日本一長いお稲荷巻き…」

タモリ

「どれぐら～あるの？」

藍

「全長124・9mです！」

タモリ

「うへえ～。そりやす～」

藍

「ぜひ食べたいんですね…」

タモリ

「そうですか～。これ點つとこ～」

藍が席につく

タモリ

「お花も届いてますね～。白玉楼に八雲家…。お、萃香さんからも  
！」

藍

「紫様の式だからですかね～」

タモリ

「あれ、NICOさんからも…上海アリス幻樂団ー」

藍

「ありがとうございます…」

少し照れ笑いしつづつなずく。

タモリ

「これは?マヨヒガ一回つて…」

藍

「あ、それおそらく式の橙の部下からでしょ?一余計な氣を使わせ  
ひやつて…」

タモリ

「あの子ちゃんと猫の管理できてるの?」

藍

「大体は出来てるかと…」

苦笑いしつつ答える。実際のところはそうでもないのかも…

タモリ

「しかし大きいね～。その尻尾…。見た目はいいけど大変でしょ?」

藍

「ええ…家事の際には大変ですね」

タモリ

「たとえば?」

藍

「テーブルに置いといたお茶碗に尻尾が当たつてお茶碗落として割つたとか…」

タモリ

「あ～、そういうのがありますよ?」

藍

「でも冬は役立ちますよ?」

タモリ

「確かにそうだろ?ね～」

藍

「座つて新聞読んでたら橙が尻尾にぐるまつてきたりとか」

タモリ

「上質の天然毛布みたいなもんだからね～」

藍

「触つてみます？」

そつこい、尻尾を軽く振る。

タモリ

「どれどれ…あ、すゞくさめ細かい…。ずいぶん細い毛だね～」

藍

「キツネの式ですからね～」

タモリ

「ぬぬ…」じりや眠れるわ

藍

「ありがと～」おごります！」

タモリ

「主人の紫さんとはどうなの？」

藍

「もう長い付き合いですからね～。大抵のことは察しがつくようになつたのですが…なにぶん自分の本心を表にあまりだしませんからね～」

タモリ

「確かにすこしミステリアスな雰囲気あるからね～」

藍

「ときどき私も「何考えてるのだろう?」って思うことがありますから」

タモリ

「確かにそんなことがあるからね～。藍さんにも…」  
「…」  
「隙のない感じなんだ?」

藍

「いや～、私と一人きつの時は少し『氣』がゆるんだりしますね。橙が寝た後、尻尾にぐるまつたりしてきますから」

『ええ～…!』

タモリ

「あ、そつなんだ～」

藍

「それに冬眠の前後には少し『氣』も緩んでますし」

タモリ

「冬眠中の仕事は全部藍さんが?」

藍

「そうなりますね～。ただあまりにも難しい仕事は冬眠前に紫様がやつてくれるるので問題はありませんが…」

タモリ

「仕事つひじんな?」

藍

「結界の管理とハ雲亭の警固が主ですね」

タモリ

「敵が来たらぐるぐる回つながら戦つんだ?」

藍

「そうですね~。その時尻尾が役立つんですよ」

タモリ

「え、えいわいわい」と?

藍

「尻尾が一つの照準になるんです。飛んでる位置の確認とか」

タモリ

「あ、そんな役割もあるんだ~。橙とはじんな感じで?」

藍

「一言でいふと親子のよいなものですかね~。いやほんと可愛いくて...」

「今まで凛としていた顔がゆるみにやけの藍。

タモリ

「今が一番可愛こ盛りだからね~」

藍

「ええもつ…私が言つのもなんですけど可愛いですよー。」

さらには元が緩む藍。

『あはははは…』

タモリ

「…つと、いつたんCMで～す」

（

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

藍

「おお～」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか？」

藍

「そうですね～。ここはやはりキツネなんで…“昨日おいなりさんを食べた人”なんてどうでしょう？」

タモリ

「では“昨日おいなりさんを食べた人”スイッチオンー！」

（

藍

「あ、ゼロ…」

タモリ

「あ～、お盆の時食べたりしたから今は食べないのかな?」

藍

「あ～、それ考えてなかつたなあ…。残念です」

（

一日CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さー!」

『えへーー!』

藍

「すいませんねえ。では…紫様を通じて何回か面識がある博麗靈夢さんを紹介したいと思います」

タモリ

「ついにきますか、主人公の定番…」

ADさんがつながった電話を藍に渡す

藍

「もしもし、藍です~」

靈夢

「もしもし」

藍

「今なにしてました?」

靈夢

「お茶飲みながら見てたわ…いやびっくりした!」

藍

「はは、すいません…。ではタモリさんに代わりますね  
取扱器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

靈夢

「もしもし、靈夢です。」

タモリ

「どうも」んにちは。明日は大丈夫ですか?」

靈夢

「大丈夫です!」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな?」

靈夢

「いいとも~!」

タモリ

「はい、お待ちしてま～す」

)

## 第一回・八雲藍（後書き）

第一回は藍でしたが…いかがでしたか？

短編で出して高評価を頂けたので連載しましたが…私は星蓮船と地靈殿しかプレイしてないので違和感があるかも…

できるかぎりキャラが言いそうなセリフを考えたいと思います。大きく外れていたらすいません

このテレフォンショッキングは出来る限り毎日正午に投稿したいと思っています。夏休み中にはなんとかなりそうですが…

読了ありがとうございました！明日も見てくれるかな？

第三回・博麗夢

（

タモリ

「こんじょうはー！ー！」

『こんじょうはー！ー』

タモリ

「今日は何と、私の誕生日なんですよねー」

『そーですねー！ー』

タモリ

「同じく8月22日が誕生日の人に、みのもんたさんがいらっしゃるんですよ」

『そーですねー！ー』

タモリ

「そしてこの作者の田見草さんも8月22日生まれなんですよー！」

『そーですねー！ー』

タモリ

「知らなかつただろー！ー！」

タモリ

「それでは今日のゲストに登場していただきましょう、昨日の八雲藍さんからの紹介で初登場、博麗靈夢ちゃんですー・どつぞー」

（

パチパチパチパチ！！

拍手と共に靈夢が登場！

『かわいい～』

『巫女服似合つてゐ～』

靈夢

「ど、どいつも…」

普段見た目を褒められることがないからか、少し照れつつ靈夢がタモリさんに近づく。

タモリ

「ん、それは？」

靈夢

「東京ビックサイトで9月1~11日に開かれる博麗神社例大祭SP2のポスターです」

タモリ

「ああ～。そろそろ例大祭か…。同人誌の発売が主だっけ？」

靈夢

「他にもコスプレや痛車の展示、ゲームやステージイベントなんか

があります

タモリ

「規模大きいね～。貼つとこでちょうどいい！」

靈夢が席に着席

タモリ

「お花もこっぽい風こてますね～」

靈夢

「うわ…」こんなにいっぱい…。持つて帰れるかしら？」

タモリ

「持つて帰る気！？」

靈夢「流石にもつたいないし…」

タモリ

「かなり多いから無理だと思つよ～。ニコニさんには上海アリス幻樂団、ハ雲家に紅魔館、霧雨魔法店に妖怪の山一同…。アリスさんに守矢神社からも…」

靈夢

「うわあ…」

タモリ

「スタジオに入りきれず玄関まで続いてますね～。おや、霧之助さんからも…」

靈夢

「紫に頼まないと無理やつね…」

タモリ

「ほんとに持つてく気なんだねえ~」

靈夢

「そりや当然!」

緊張が少し解けたせいか、いつもの口調に戻つていく

靈夢

「はははは…。なんか巫女らしくない巫女だねえ…」

靈夢

「やうかしらね?」

タモリ

「けつじつ言いたい」とズバズバ言つタイプ?

靈夢

「確かにやうかもね~」

タモリ

“素敵なお賽銭箱はそこ”なんて誘導する巫女はなかなかいない  
と思つよ~。

靈夢

いや、さうでもしないと賽銭入れないのよーみんなしてー

タモリ

「はははは…切実だねえ」

靈夢

「ただでさえお賽錢少ないのに、守矢神社や命蓮寺が出来てより一層厳しくなつてねえ…」

タモリ

「あ～、確かにやうつかもね～」

靈夢

「それで博麗神社で夏祭りとかやうつとこむるんだけね～」

タモリ

「お、そんなイベントを?」

靈夢

「ただ予算がね～。紅魔館や八雲亭に協力を頼んでみたけど花火がね～」

タモリ

「あ、花火やるんだ?」

靈夢

「それがお金かかるんですよ。河童でも作れる人少ないし…」

タモリ

「弾幕を代わりにすればどう? フランちゃんあたりに頼んでみるとか…」

靈夢

「いやあ… 恋の迷路とか495年の波紋は似てるけど、それだと花火独特の音とかが無いから代わりにならなくて…」

タモリ

「あ～なるほどな～。ならお守りでも売つてみたら?」

靈夢

「売つてゐるけど卖れないのよ…。守矢神社のは神が一人いるから売れるけどけいは神いないし」

タモリ

「いなかつたつけ?」

靈夢

「いなーいのよー!誰に聞いても知らないしー!紫も知らないってひづれうー」とー?」

タモリ

「…」先祖様は神がないのに神社建てたのかもね

靈夢

「それじゃ信仰するわけがないーー!」

タモリ

「ま、異変解決でなんとかなつてゐるでしょ?」

靈夢

「ま～そつね。あと魔理沙とかレニア、紫からの差し入れとかでなんとか…」

タモリ

「あ、それならいけそうだね。しかし一度は戦った妖怪とよく仲良  
くできるね?」

靈夢

「仲良く…ってほどでもないけどね。いやだって、妖怪退治も余り  
にやりますわ」と恨みを罵つしね~」

タモリ

「懐が深いね~」

靈夢

「幻想郷は全てを受け入れるのよ~。」

タモリ

「すごい考えだねえ…。いつたんじょはいります」

一日じょ

~

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当する  
アンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

靈夢

「へえ~。サービスいいわね」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか?」

靈夢

「そうねえ…」一週間で神社にお賽錢入れた人”でいこうかしら?」

タモリ

「あ、そつきますか?では”一週間で神社にお賽錢入れた人”スイッチオン!」

(

靈夢

「…いなか~」

タモリ

「お盆でお寺に墓参りに行く人は結構いるんだけどね~」

靈夢

「…博麗神社から博麗寺に変えようかしら?」

タモリ

「それじゃ巫女辞めることになるだしじょ~!」

靈夢

「あ、そうか。一輪みたいに巫女さんになるわね

(

一日CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい!」

『えへーー.』

靈夢

「そうねえ…友達とこいつより腐れ縁つてとかしつりへ. ハリコアを紹介するわね」

タモリ

「吸血鬼の巫女ですか…少し怖いですね」

Aのやんがつながった電話を靈夢に渡す

靈夢

「わしそひー、靈夢よ」

ハリコア

「わしそひー.」

靈夢

「今なにしてた?」

ハリコア

「紅茶飲みながら見てたわ…。私を指さるとは、あなたやほり見る田があるわねー」

靈夢

「せう…。じゃあタモリさん代わるわね

取扱器がタモリさん代わるわね

タモリ

「もしもしタモリです」

レミコア

「もしもし、レミコアよ。初めまして」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

レミコア

「大丈夫よ！」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

レミコア

「いいとも～！」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

)

## 第三回・博麗夢（後書き）

え～、第三回となりました。予想以上に好評の感想をいただきありがとうございました限りです。

今日は私、月見草の誕生日なんで同じ誕生日のタレントさんを調べてみたらタモリさんと一緒に本当にびっくりしました！何かの縁ですかね！？

これからも頑張っていきますのでよろしくお願いいたします。明日も見てくれるかな？

## 第四回・レミコア・スカーレット

（

タモリ

「はい、こんにちは～」

『こんにちは～！』

タモリ

「あと一週間ほどで夏休み終わっちゃいますね」

『そ～ですね！』

タモリ

「どんな夏休み過ごしましたか？海行きました？」

『そ～ですね！』

タモリ

「でも山でキャンプもいいよね～」

『そ～ですね！』

タモリ

「私の夏はずっと“スタジオ（）”です」

地面を指さし苦笑にするタモリさん

タモリ

「それでは登場していただきましょ~、昨日の博麗靈夢さんからの紹介で初登場、レミリア・スカーレットちやんです~.ビ~づわ~」

（

拍手と共にレミリアがさつそつと登場…

『可愛い~！』

『レミリア~！』

レミリア

「ふふ… ありがと」

優雅に笑いつつ、レミリアがタモリさんのもとに近づく

タモリ

「お、それは？」

レミリア

「少し早いけど… 九月中旬にフランスのテン・エミルタージュで開催されるブドウ収穫祭のポスターよ！」

タモリ

「えー？ 行つたりするのー？」

レミリア

「不本意だけど… 子供に変装してね」

少ししかめつ面になりつつレミリアが答える。あまり言いたくなかったらしく…

タモリ

「はつははは…そりゃ大変で…」

レミコア

「バレたら最悪、カトリック教徒達と戦うめにならね」

タモリ

「さうまでして行くんだ…」

レミコア

「もう大変よ…。咲夜が保護者役。時折鼻血が出てるのが妙に気になるわ…」

タモリ

「メイド冥利に厚あつてやつなんでしょうな…どんな祭りですか？」

レミコア

「ん~、仮装パレードもあるけど…最大の魅力はそこで振る舞われる新酒のワインね。たまらないのよ~」

タモリ

「いつものワインテージ物とはまた違つんだ?」

レミコア

「新酒はまだ発酵途中で、甘く濁つたワインなのよ。それにひいのヴィンテージはほとんど咲夜が急速に反応させて作ったものだしね」

タモリ

「そうですか~。これ貼つとこひょうつい!」

タモリ

「お花も結構届いてますね～。ニコニコさんご上海アリス幻樂団、紅魔館、妖精メイド一同。あ、博麗神社からも…」

レミコア

「あ～、靈夢氣がきくじや…」

セシドふと、レミコアがあることによつて元気をくれぐれむ

レミコア

「つてこれ、昨日靈夢が貰つた花を寄せ集めたものじゃない！なん  
で水仙の花と、私があげた紅いバラが一緒になつてんの！アンバラ  
ンスでしょー！」

花を指せしシッ 「むレミコア

タモリ

「新しく花を買つ余裕なかつたんでしょうな…  
タモリさんも流石に苦笑。レミコアにばれないよう含み笑いを浮か  
べつつ司会を務めている。

レミコア

「まあいいわ…」

少し呆れつつレミコア着席

タモリ

「しつかし…結構西洋の祭り行つたりしてんだ？」

レミコア

「そうね。色々見たわ～。パリのルーブル美術館とか…」

タモリ

「へえ～」

レミリア

「出来た時から人が多いから一度きりしか行ったことないけどね」

タモリ

「出来た時つて…すごいセリフだねえ」

レミリア

「設立当時は凄かったわ～。あの時は酸性雨なんてなかつたから石像がきれいで、パリ自体が一つの美術館みたいだったわ！」

タモリ

「実際見た人に言われると説得力あるなあ。500歳だけ？」

レミリア

「まあ500歳なんてまだまだ若いけどね。紫とかあの月の姫様とかはいくつなんだか…」

タモリ

「…なんか想像をはるかに超えそうだね～」

レミリア

「まあ聞いたらもめ事になりそつだから聞かないけどね」

タモリ

「へえ～。最近はどうですか？」

レミリア

「…」

「そうねえ……ちょっと不満かな？」

タモリ

「といつと？」

レミリア

「西洋のキャラが少ないなあ……と思つてね」

タモリ

「ああ～、確かに……」

レミリア

「私なんかの横文字のキャラ自体少ないし、西洋風となると……紅魔館メンバーにアリス、プリズムリバー……数えるほどしかないのよ！」

タモリ

「服装だけなら西洋風の人いつぱいいますけどね」

レミリア

「ほんとよ！特に最近出てきたあの聖白蓮！寺にいるのに紫と金の髪で魔女服みたいな着てたのにはびっくりしたわ……」

タモリ

「知らない人が見たら寺の住職には見えないだろ？ ねえ……」

レミリア

「文々。新聞で写真見た瞬間飲んでた紅茶吹きこぼしそうになつたわよ！」

タモリ

「まさにスカーレットデビル。ドレスが真っ赤に…」

レミコア

「だから西洋妖怪の代表として血機になりたいのよー。」

タモリ

「ええ！？でもレミコアはかなりの異変に関わっていない？」

レミコア

「そりなんだけど、人数多すぎちゃうとね…。だから昔の永夜異変の時みたいに出たいのよー。」

タモリ

「ああ～、咲夜さんと一緒に異変解決に行つたあの…」

レミコア

「そう、あの時みたく出たいんだけどね…」

タモリ

「でも昼間は外歩くと危険だからね～レミコアの場合」

レミコア

「私、病弱つ子なのよ」

タモリ

「…吸血鬼にあるまじきセリフですねえ」

（

一日〇二〇

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

レミリア

「さて…どうこううかしちゃ?」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか?」

レミリア

「うーん…私、B型の血液が好きなんで…“家族全員がB型の人”でいこつかしら?」

タモリ

「では“家族全員がB型の人”スイッチオン!」

（

レミリア

「あ、いた!!一人!」

手で口を押さえ驚きつつ、ADさんからストラップを受け取る

タモリ

「あ、あの人だ!」

満面の笑みで手を上げる一人の女性を指す。

レミリア

「へえ……そうなんだ～」

タモリ

「あの、そんな獲物を見つけたようなギラついた眼でお姉さん見るの止めてもらいます？怖いですよ？」

レミコア

「冗談よ。だいたい死ぬほど吸わないし」

『家に来て～！～吸つていわよ～！』

レミコア

「あり、ありがと」

タモリ

「すごい熱烈なファンだなあ…」

一曰CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さ～！」

『え～～～』

レミコア

「そうねえ…友達といつより部下つてこ～ね。美鈴を紹介するわね」

タモリ

「門番さんですか～」

アロちゃんがつながった電話をレニアードに渡す

レニアード

「もしもし、私よ」

美鈴

「……」

レニアード

「もしもし？ 美鈴？」

美鈴

「あ、はい何でしょうかお嬢様！ 見てましたよー。」

レニアード

「何よわざの空白の時間？ またかあんた… 私が出演中に寝てたん  
じゃないでしょ？ うねー？」

美鈴

「いえいえーーー滅相も！」やしませんーーー」

レニアード

「まあいいわ…。じゃあタモリさんに代わるわね  
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

美鈴

「もしもし、美鈴です。初めまして！」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

美鈴

「大丈夫です！」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

美鈴

「いいとも～！」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

)

## 第四回・レミコア・スカーレット（後書き）

まだ第四回なのに好評いただきありがとうございます！自身、初の毎日投稿を目標に頑張っていますが…知らないことが多いです。

初めのタモリさんとお密さんは本当にすごいと思います。

毎日考えてくるタモリさんは本当にすごいと思います。次回のゲストのリクエストは感想で受け付けております。無理がない限り（今回と次回のゲストに何の接点もないなど）それを優先的にしたいと思います。

明日も見てくれるかな？

## 第五回・紅美鈴

タモリ

「はい、ほんとうは」

『ここにまづまづ』

タモリ

「最近は夕立が多いですね~」

『そ~ですね~..』

タモリ

「こわなり雨降つてきてびつべつするんですね~」

『そ~ですね~..』

タモリ

「傘がいにげど激しこ風には意味ないし、やはりカツパかな?」

『そ~ですね~..』

タモリ

「でも着るの面倒なんですね~」

『そ~ですね~..』

タモリ

『そ~ですね~..』

「まあどうりも雷には意味無いんですけどね」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、昨日のレミコア・スカーレットさんからの紹介で初登場、紅美鈴さんですー・ビーナー」

（

拍手と共に美鈴が登場！

『可愛～～～～』

『綺麗～～～～』

美鈴

「はは…どうも」

頭に手を当て照れ笑いしつつタモリさんの元にやってくる。

タモリ

「お、それは？」

美鈴

「9月11日に広島県立総合体育館で開催される、第28回オープントーナメント全中国空手道選手権大会のポスターです！！！」

タモリ

「え？まさか出場とかは…」

美鈴

「いや～、やつてみたいんですけど流石に…ねえ？」「少し首をかしげつつ苦笑にする

タモリ

「あ～、確かに人間と妖怪が拳を交えたならヤバいかな」

美鈴

「だから映像で見るだけなんですねけどね」

タモリ

「どう？妖怪から見て？」

美鈴

「いやあ～、人間といえど『この人すごいな』って人いっぱい  
ますよ！動きとかすごく滑らかで…いや凄いな…  
あ～に手を当てうなずく

タモリ

「あ、そりゃんだー！相当生きてるからてつきり、まだまだ甘いとか  
言つかと」

美鈴

「いえいえ、そりゃ…。武道の道はもっと奥深いです。私がそんな  
こと言えませんよ…」

タモリ

「そうですか～、貼つといてちょうどい！」

タモリ

「お花も届いてますね～。NUNさんに上海アリス幻樂團、紅魔館  
…。守矢神社からも！意外ですね、守矢神社からとは…」

美鈴

「以前に非想天則で共演したからですかね。ありがとうございます」

タモリ

「すごいですね～、ボタンに菊、蘭にサザンカ、梅に水仙、レンゲも…」

美鈴

「…ありがとうございますけど、何でみんな中国の十大名花を選んでるんですかね？」

若干納得いかないような顔で美鈴が席につく

タモリ

「最近どうですか？」

美鈴

「そうですね～。前に比べればマシになつたかと…。格闘ゲームですが自機にもなれましたし」

タモリ

「活躍してますからね～」

美鈴

「私からしてみれば弾幕より武術の方が断然得意なので嬉しいです！まさか思う存分拳を交えられる日が来ようとは…」

タモリ

「弾幕では紅魔郷と文花帖以来出てなかつたからね～」

美鈴

「紅魔異変の後は大変でしたよ～。中国だの“みすず”だの…」

タモリ

「はははは…。確かに読みづらこからね～」

美鈴

「それにパソコンで“めいりん”って打つても出ませんからね…。  
かくいう作者も“みすず”って打つて変換しますし」

タモリ

「まあでも、“みすず”つてこう店ありますからね～。函館[.]…」

美鈴

「え、そつなんですか！？」

タモリ

「1932年創業の老舗のコーヒー焙煎工房ですよ。知らなかつた  
？美鈴[.]」

美鈴

「うわ～、じゃあそれが原因なのかなあ…」

タモリ

「地名や人名にもありますからね～。アナウンサーの高橋美鈴さん、  
女優の田中美鈴さん、とかも…」

美鈴

「あちや～、誤解が生まれるわけだな～りや…。いつそ改名しようつか  
な？」

類に手を当て苦笑する美鈴

『ええ～！…』

タモリ

「止めたきなつて… よつ一層ややこしくなるからー。」  
笑いつつそれを制止するタモリさん

タモリ

「仕事の方はどうなの？」

美鈴

「いつもと変わらず順調ですね。ときどき咲夜さんから注意されて  
はいますが」

タモリ

「あ、そうなんだ～」

美鈴

「でも少しの小言だけなんですよね。昔ほど警戒して屋敷を守る必  
要もありませんし。だいたいあの巫女や魔女は止めない方がいいん  
ですよ。逆に」

タモリ

「え、それどうこう」と？

美鈴

「あいつらは確かに大した用もなく屋敷に来ては、ご飯や魔術書を  
持つて行くんですけど…」

タモリ

「やつぱわんなんだ～」

美鈴

「でも無理に止めて門の前で戦うと、かえって被害が大きくなるんですよ。室内だと一人も流石に加減するんですけど、野外だと遠慮なく暴れるから…」

タモリ

「あ～、なるほど～」

美鈴

「魔理沙なんか外だと遠慮なくマスター・スパーク撃つから、門はむちゃくちゃになるし、爆風で花壇の花がなぎ払われるし…」

タモリ

「花が曲がったりしちゃうんだ？」

美鈴

「そりなんですよ～。だから止めないのが暗黙のルールになりつつあるんです。お嬢様もパチュリー様も認めちゃったみたいで…」

タモリ

「え？じゃあ君の仕事がなくなるんじゃ？」

美鈴

「だから“靈夢や魔理沙以外の、紅魔館の人たちが会う必要のない人を通すな”と命じられているんです。例えばチルノとかは通すないと…」

タモリ

「だんだん仕事が変わってきてるんだ~」

美鈴

「時代の流れですかね~。眞面目に緊張感を持つて門を守つてた時  
代が懐かしい…」

ちょっと遠い目で天井を見つめつつ、美鈴がつぶやく

タモリ

「今となつてはちょっと想像しづらいな…。一日CMで~す」

(

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当する  
アンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

美鈴

「う~ん、どうしようかなあ?」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか?」

美鈴

「それじゃあ…“武道で三段以上を持っている人”にします」

タモリ

「武道ならどれでもいいんだ?」

美鈴

「はい。空手、柔道、剣道、何でも構いません」

タモリ

「では“武道で三段以上を持つている人”スイッチオン！」

)

美鈴

「あちやー、三人…」

ひたいに手を当て悔しがる美鈴

タモリ

「意外にいたねえ？」

美鈴

「やはりまだまだ日本は武道が盛んですねえ…。流石、侍の国」

タモリ

「侍かー。なんか久しぶりに聞いたなあ…」

)

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『えー！…』

美鈴

「それじゃあ…。非想天則で共演したチルノちゃんを紹介しますね」

タモリ

「氷の妖精さんですか～」

ADちゃんがつながった電話を美鈴に渡す

美鈴

「もしもし、美鈴です～」

チルノ

「んあ、何か用～？」

美鈴

「なんかすっごくだらけてますね…。何してたんですか？」

チルノ

「いや～、暑いから日陰で大ちゃんと一緒にかき氷食べてた！」

美鈴

「そうですか～。じゃあタモリさんに代わりますね  
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです～」

チルノ

「もしもし～チルノだよ～」

タモリ

「どうもこんにちは～。明日は大丈夫ですか？」

チルノ

「ん~、大丈夫だよ！」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

チルノ

「まつかせとけ！」

美鈴

「ええ！？」

大妖精

「チ、チルノちゃん違うでしょ！…貸して！…」

チルノ

「え、え！？」

急にノイズが入ること数秒後……

大妖精

「あ、あのえつと…い、いいとも…！」

しどろもどろになりつつ大妖精が代わりに言っちゃった！

チルノ

「い、いいとも～？」

わけもわからないままそれに続くチルノ

タモリ

「はい、お待ちします…」

笑みを浮かべつつ答えるタモリさん

)

タモリ

「明日大丈夫かなあ?」

明日の放送に少し不安になるタモリさんでした…

## 第五回・紅美鈴（後書き）

第五回、紅美鈴編　いかがでしたか？

毎回、タモリさんの前口上とポスターに苦戦します。ポスターは東方関係のイベント、もしくはゲストが参加しそうなイベントにしています。

違和感のない仕上がりだといいのですが…

今回、美鈴という人名、地名を調べたのですが…。  
白鳥美鈴というAV女優が出てきてびっくりしました。ネタとして出そうかなーとは思いましたが止めました。  
下ネタ路線にはいかないことにしています。いいともは下ネタには行かない…と思つ…

次回はチルノです！「えりづ」期待！明日も見てくれるかな？

## 第六回・チルノ

（

タモリ

「はい、ここんちま～」

『こんにちま～！』

タモリ

「夏だつて言ひのに寒いね～！」

『そ～ですね～！』

タモリ

「スタジオがすゞ～い冷氣に包まれてます」

『そ～ですね～！』

タモリ

「一足早くスースの上着を着ました。なんかすゞ～く新鮮な感じです」

『そ～ですね～！』

タモリ

「街のサラリーマンはみんな半袖ですからね。すゞ～い違和感を感じます」

『 そうですね……』

タモリ

「 まさかこの歳で学生の衣替えの気分を味わうことになるとは……」

タモリ

「 それでは登場していただきましょう、昨日の紅美鈴さんからの紹介で初登場、チルノちゃんですー♪いわーー」

（

拍手と共にチルノが元気よく登場！

『 可愛い～！～』

『 チルノ～！～』

チルノ

「 ふふん、ありがと。私のすじさわかってるわね！」

胸を張り血麪げにタモリさんの元にやつてくる。

タモリ

「 お、それは？」

チルノ

「 まだ先の話になるけど、二月初めに開催されるわいぱい雪まつりのポスターよ！～」

そういう誇りしげにポスターを広げて見せるチルノ

タモリ

「 お祭り行くの？」

チルノ

「行きたいんだけど無理だから、」「ーりん堂にある本で見てる」

タモリ

「ガイドブックとかを?」

チルノ

「あ~、そんなやつ。すうじよね。あんな雪像作るなんて!」

タモリ

「そ~だよね~。よくあんな凝ったの作れるよ。リアルな物もいっぱいあるし」

チルノ

「あたいも行きたいんだけどね~。こ~んなおつきなあたいの像を作つて欲しい!!」

両手をいっぴに広げてその願望をアピールする

タモリ

「問題はその水色の羽だね~。どうせつけて作ればいいのか?」

チルノ

「だいじょ~ぶ!氷で作ればいい!~!~!

タモリ

「それじゃ雪像じゃないでしょ~!まあこ~いや~。これ貼つとこちようだい!~!~

タモリ

「お花もすいぶん届いていますね。ＺＺＺさんに上海アリス幻樂団、大妖精ちゃん、リグルに三月精からもー」

チルノ

「ん？三月精が花わたすなんてねえ…まあいいわ！あたいのすいじに感動したんでしょ！」

タモリ

（彼岸花送つてきてるから、おやじく皮肉なんだうつけど…。黙つておひづけ）

タモリ

「最近は…ずいぶん活躍してるようだねえ？」

チルノ

「ふふん。あたいなら当然ね。なんたつて“セレキョー”なんだから…」

タモリ

「強気だねえ…。でも夏はけつじつシカでしょ？」

チルノ

「へーぞ…といいたいけど、ここ数年はきついかな。なんか暑さが増していく気がする」

タモリ

「あ、幻想郷にも異常気象の影響が？」

チルノ

「たしかに異常だね。さすがのあたいも“ねつとーしょー”になり

かけたし

タモリ

「いや熱中症ね！冬妖精にしてみれば熱湯風呂に入れられたような気分だろ？ナビー！」

チルノ

「暑いからずっと湖で水浴びしてたわ！これはまちがいなく異変だよ！なんでの巫女は動かないの？」

タモリ

「いやいや、これは巫女でもござりにもならんでしょう…」

チルノ

「おかげでレティも早く消えるようになつたし…。それとあの地下のカラスのせいね！今度ぎつたんぎつたんにしてやる…」

タモリ

「止めときなさいって、ろくなことにならないから…」

興奮してきたチルノをなだめるタモリ

タモリ

（今まで見たことのないくらい不毛な戦いになるだろ？なあ…。話もかみ合わないまま戦つて、結局うやむやに終わるかも）

タモリ

「それじゃ、今は暑い事以外は何の不満もないんだ？」

チルノ

「いや、まだやりたいことがある…！」

タモリ

「え、何？」

チルノ

「妖精初のEXボスになりたい！！」

『ええ～！？』

チルノ

「何で意外そうな顔してんのよ！」

タモリ

「おお、ずいぶん大きく出たねえ！」

チルノ

「いやだつてさ、さいきょーのあたいが2ボス止まりじゃ嫌でしょ  
？」

タモリ

「いやでも、EXボスつていつたら強い人ばっかりだよ？フラン、  
藍、紫、妹紅、諷訪子、こいし、ぬえ…」

チルノ

「カエルに出来るならあたいだつて出来るでしょ！いつもカエル  
を凍らせてるんだよ？楽勝、楽勝！」

タモリ

「いやいや！あの人神様だからね！？土着神の頂点だよ？」

チルノ

「神と言つてもたかが力エル！」

タモリ

「NICOさんは認めないんじゃない？EXボスの大役は？」

チルノ

「うーん…じゃあ手始めに紅魔館に攻め入って、吸血鬼の姉妹でも倒してみれば認めてくれるかな？」

タモリ

「まず門番とメイドに止められるでしょ！」

チルノ

「そこは大ちゃんとリグルに協力してもらい、あたいはあのレーヴィアを倒す！」

腕を組みつつ自信満々に語るチルノ

タモリ

「そしたらカリスマブレイクビートの騒ぎじゃないでしょー…」

乗れなくなる！」

チルノ

「やつてやれないことは無い！」

タモリ

「いつ元気が活躍する秘訣なのかもしませんね～」

（

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

チルノ

「よーしー当てるー！」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか？」

チルノ

「それじゃあ…“カエルを凍らせたことがある人” いつてみよー！」

『ええ～！！』

タモリ

「いやいや！いるわけないでしょそんな人！」

チルノ

「そんじゃあ…“冬眠しているカエルを見たことある人” ならどう

？』

タモリ

「あ、確かにそれなら…。では“冬眠しているカエルを見たことある人”スイッチオン！」

（

チルノ

「あちやく、いないか…」

タモリ

「意外にいなかつたねえ？」

チルノ

「じゃあ力エルを凍らせたことある人は？」

タモリ

「一応やってみます？じゃあスイツチオン！」

チルノ

「ゼロか。人間ってのはわからない…」

タモリ

「妖精にしてみればそうかもね〜」

♪

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜！〜』

チルノ

「それじゃあ…。大ちゃんを紹介する…」

タモリ

「あ、やはり大妖精さんですか〜」

ADさんがつながった電話をチルノに渡す

チルノ

「もしもし、チルノだよ～」

大妖精

「もしもし？」

チルノ

「今何してた？」

大妖精

「香霖堂で見てたよ！まったくもう…私、嫌だからね！あの紅魔館に攻め込むなんて…」

呆れたような声で語る大妖精

チルノ

「え〜、ダメ？」

大妖精

「だめ！あとにかく、タモリさんに代わって

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

大妖精

「もしもし！大妖精です。ここにちはー！」

タモリ

「どうもこんにちは～。明日は大丈夫ですか？」

大妖精

「はい、大丈夫です！」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

大妖精

「いいとも～！！」

タモリ

「はい、お待ちしています！」

)

## 第六回・チルノ（後書き）

早いもので六回目となりました。こんなハイペースで連載するのは自身初なんですが、ぐく変な気分です。  
目次見るたびに「あれ、もうこんな書いたっけ？」といった感じです。

今回のチルノ編は結構難産しましたね。なんでだろ？書きやすいイメージだったけど、ずいぶん苦労しました。  
私はどうも性格が単純な人ほど書きづらいのかもしれません  
次回は大妖精です！明日も見てくれるかな？

## 第七回・大妖精（前書き）

今回は、前回のチルノ編を読んでいないとわかりにくいです。読んでいない方はチルノ編を一読することをおすすめします。

## 第七回・大妖精

（

タモリ

「はい、 ひどいかね」

『ひんじわは～！～』

タモリ

「ひんじわは～」

『ひんじわは～』

タモリ

「ひんじわは～」

『ひんじわは～』

タモリ

「ひんじわは～」

『ひんじわは～』

タモリ

「ああ、 読者の顔をいたせりと読みましたか？」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、昨日のチルノちゃんの紹介で初登場、大妖精ちゃんです！どうぞ～」

拍手と共ににはにかみつつ大妖精が登場！

『可愛い～～！～』

『大ちや～ん～！～』

大妖精

「ど、どうも初めまして！大妖精と申しますー本日は、あの、ご足労ありがとうございます～ぞ～いますー！」

緊張しつつ、まずはお礼の言葉を述べる大妖精

タモリ

「はっはは…。まあ楽に。それは？」

大妖精

「はい、長野県で開催されている女神湖妖精祭りのポスターですー！」

タモリ

「ん？聞いたことないなあ…」

大妖精

「2010年5月に第一回が開催された比較的新しいお祭りなんですよ。それから不定期に行われています」

タモリ

「へえ～。どんなことするの？」

大妖精

「専門家の方をお呼びしてのフェアリーークとか、ミコージック  
コンサートとかですね。日本のお祭りとはちょっと趣向が違うかも  
…」

タモリ

「へえ～。貼つといてちょうどい！」

タモリ

「お花もずいぶん届いていますね。NUUNさんに上海アリス幻樂団、  
リリーホワイトちゃんに三月精…あ、チルノちゃんからも…」

大妖精

「わー、ありが…」

お礼をいいつつお花を見た瞬間、大妖精は目の前が真っ白になつた！

大妖精

「つて！チルノちゃん…氷で作ったひまわりの花束じゃないの！す  
ごい！」

そこには光り輝く氷のひまわりのオブジェがあつた！

タモリ

「こりゃまた凝つたの作つたね～」

大妖精

「すごいです…。でも…」

そう、こんな物を作つたら…

タモリ

「でも……すでに溶けてきますね。花の下に水たまり出来てゐる……」

大妖精

「すいません……気持ちはありがたかったのですが」

「という訳で、チルノの力作“氷の花束”は早々に片付けられてしまつた」

タモリ

「最近はどう?」

大妖精

「あの、これ昨日のチルノちゃんの後日談になるのですが……。昨日は大変でしたよ……。あのあとチルノちゃん、本当に紅魔館に攻め入るつもりとして……」

タモリ

「え!…? 行つたの?」

大妖精

「いえいえ、私が全力で引き止めましたよ! 門番さんならまだ穩便に済みますが……。これがメイドさんなら大変なことに……」

タモリ

「それこそナイフの兩あられですからね」

大妖精

「それで、なんとかチルノちゃんをなだめていたのですが……。目を離した隙に、今度は地底のお空さんにケンカしに行つて……」

タモリ

「ええーー！」

大妖精

「私が来た時はすでに弾幕の嵐…」

タモリ

「で、また止めに？」

大妖精

「止められませんよ…。（妖精界では）最強のチルノちゃんと、神様を宿したお空さんですよ！私が割って入れるわけがないです…」

タモリ

「で、結局どうなったの？」

大妖精

「話もかみあわないまま戦つて、そういうじつはここにお嬢さんと、さとりさんが止めに来てくれたんですけどね」

タモリ

「結局ぐだぐだになつたんだ！」

大妖精

「しかも本人たちは戦つてゐるついでに当初の目的を忘れていて…本当に不毛な戦いでした…」

タモリ

「苦労してんだね～。自分のことははどう？満足？」

大妖精

「あ、はい。私はもともと好戦的ではありませんから、中ボスで丁度いいと思っています。それに、本名なくとも“大妖精”として定着していますし」

タモリ

「あ、確かにね～」

大妖精

「でも、少し注文を言わせてもらえるとするなら…。能力が欲しいですね」

タモリ

「あ～。“何々程度の能力”ってやつ?」

大妖精

「そうです！私も東方キャラの端くれですし、何か欲しいんです！だって能力ないの私と小悪魔ちゃんぐらいのものですよ！」

『ああ～！』

タモリ

「あ、確かに…」

大妖精

「中ボス界の中でも最低レベルですよ…。スペカはないし、能力ないし…」

少し涙目になりつつ力説する大妖精

タモリ

「まあまあ…。でもいいんじゃない？なんだかんだ言いつつもキャラの一人として定着しているのは」

大妖精

「それはそうですが…」

タモリ

「それに能力と言つても色々だよ？靈夢なんて“空を飛ぶ程度の能力”だよ？主人公なのに」

大妖精

「いいじゃですか！私にはその肩書きすらないんですよー…うつ…能力を持つ人が妬ましい…」

タモリ

「ちょっととちょっと！だんだんパルスイさんみたいになつてるから！」

大妖精

「ＺＵＺＵちゃん…」一考よろしくお願ひします…！」

（  
—旦CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持つてますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

大妖精

「はい！頑張ります！」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか？」

大妖精

「それじゃあ…“サイドテールにしたことある人”でお願いします

！」

タモリ

「では“サイドテールにしたことある人”スイッチオン！」

（

大妖精

「ああ、5人もいましたか？」

タモリ

「あんまり街では見ないけど…文化祭とかでやつてるのかな？」

大妖精

「でもうれしいです！サイドテールにしている人がいて！」

（

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜！』

大妖精

「では…。リリーホワイトさんを紹介したいと思います！」

タモリ

「あ、春妖精さんですか～。でも大丈夫？」

大妖精

「大丈夫です。会話はちゃんと成立しますから」

ADさんがつながった電話を大妖精に渡す

大妖精

「もしもし、大妖精です」

リリー

「もしもし？お久しぶりです」

大妖精

「今何してました？」

リリー

「彼岸にいました。」(J)は年中過(＼＼)しやすいですか～」

大妖精

「そうですか。タモリさんに代わりますね」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

リリー

「もしもしー。リリーホワイトです。こんなにちはー。」

タモリ

「どうもこんにちは～。明日は大丈夫ですか？」

リリー

「はい、大丈夫です！」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

リリー

「いいとも～！～！」

タモリ

「はい、お待ちしています！」

## 第七回・大妖精（後書き）

大妖精は書きやすかつた。

苦労人のイメージを膨らませていつたらすらすら書けましたね。  
苦労人だからこそチルノとコンビ組めるんでしょうけど。

次回はリリー・ホワイトです！明日も見てくれるかな？

## 第八回・リリーホワイト

（

タモリ

「はい、こんにちは！」

『こんにちは～！～』

タモリ

「暑いですね～」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「台風が2つも近づいているのですね～」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「速度は“ゆっくり”だそうです」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「ゆっくりしてこつてね～」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「いい訳ないだろ！」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、昨日の大妖精ちゃんの紹介で初登場、リリーホワイトちゃんです！どうぞ～」

}

『可愛い〜〜！！』

レリーフ

リリード

両手を広げ、まずは決まり文句をぱつぱつ。その間――

?

「ちよつと待つたー！」

タモリ

「え！？何？」

リリード

「私も出しなさいよ！どうせなら！」  
いきなり生放送にリリー・ブラックが乱入！！

タモリ

「ええ！？なんでリリー・ブラックが？」

リリー B

「いいじやないのー私たちは一人で一つー」

リリー W

「ええー！？…まあいいでしょ。特別ですよ？」

タモリ

「いいとも史上初だと思いますが、こんな登場…。では改めて、ゲストはリリー・ホワイトちゃんとリリー・ブラックちゃんです！」

リリー B

「よろしくーーー！」

タモリ

「お、それは？」

リリー W

「はい。日本三大美祭の一つ、岐阜県の高山祭のポスターです。春の山王祭（4月14・15日）と、桜山八幡宮の秋の八幡祭（10月9・10日）の一いつがあります」

タモリ

「すゞいねえ…日本三大美祭！山車とか出るの？」

リリー W

「屋台という山車みたいなものがあります。からくり人形仕掛けが施された屋台で、総勢数百名におよぶ祭行列、お囃子や雅楽、獅子舞もありますよー。」

リリー B

「からくり人形は歴史ある匠の技です。にとり直伝の！」

リリー W

「いや違うでしょ！」

タモリ

「はつはは…貼つといてちょうどいい！」

タモリ

「お花も届いてますね～。NICOさんには上海アリス幻樂団、大妖精  
に三月精、白玉楼に冥界からも～」

リリー B

「まさか映姫様からくるとは…。律儀ですねえあの人…」

リリー W

「裁判長ですからね…。とはいっても私達にまでとは」

タモリ

「最近は…また中ボスとして出演したそつですね？」

リリー W

「ありがとうございます」

リリー B

「本当に…でもセリフないのがちょっと残念…」

タモリ

「え、あるでしょ？」

リリー W & amp; B

「『春ですよ～』の一つだけでしょ？」「

タモリ

「さすが…さっちつカブリましたね。姉妹？」

リリー W

「違いますよ…。でも、やは知れてもにセリフないですからねえ

…」

タモリ

「何かしゃべりたいんだ？」

リリー B

「“あたしの屍を越えて行け”とか？」

リリー W

「不釣り合にも程があるでしょ！？本氣でピチコラレたらビリす  
るのー？」

タモリ

「靈夢さんなら間違いなく夢想封印されますね

リリー W

「怖すぎますよ…」

タモリ

「まあでも、春妖精のポジションが確定していますよね？」

リリー B

「いやまあ確かに…。でも正直面倒なんですね」

タモリ

「ええ！？」

リリー W

「私たち一人で幻想郷中に春を広めるの大変なんですよ…」

タモリ

「ああ～、確かに…」

リリー B

「とはいって、サボると異変と間違われて騒ぎになりますからね」

タモリ

「ああ～、妖々夢の時みたいになっちゃうんだ？」

リリー W

「そりなんですよ…。レティとチルノは喜ぶんですけどね」

タモリ

「まあそういう感じね」

リリー B

「冬が長く続いて欲しいからって、チルノが弾幕勝負挑んできたこともありましたけどね」

タモリ

「え？ そんなんですか？」

リリー W

「妖精総出で相手しましたけどね」

タモリ

「なにそれ！？ 妖精大戦争？」

リリー W

「いえ、主にレティと大妖精が説得したんですけどね」

タモリ

「あ、総出で説得したんだ？」

リリー B

「さすがに弾幕で争つと靈夢さんに退治されますからね」

リリー W

「それで何か効率的に春を伝えられないかな～って思いました

タモリ

「でも電話もパソコンもありませんからねえ、幻想郷は」

リリー B

「だから半鐘で知らせよ'つかと」

リリー W

「火事と間違うでしょ！ 紛らわしいよー」

リリー B

“は～るですよ～”って言いながら鐘を鳴らす説

タモリ

「絶対にダメでしょ！火消しが来ちゃいますよー。」

リリー B

「団長が妹紅の？」

リリー W

「いや、やつてそうだけどー。」

タモリ

「それじゃ弾幕で知らせるとか？」

リリー W

「それが、スペカありませんもの…」

リリー B

「だから、に通りに頼んで作つてもらいました」

タモリ

「何を？」

リリー B

「拡声器」

リリー W

「選挙じゃないのよー！？」

( )

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

リリーW

「わ～、どうしようかな～！」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか？」

リリーB

「それじゃあ…“春の甲子園に出場または観戦した人”でお願いします！」

タモリ

「あ、知ってるんだ？」

リリーW

「ルールはよくわかりませんが知っています。とても楽しそうですね」

タモリ

「では“春の甲子園に出場または観戦した人”スイッチオン！」

（

リリーW

「2人ですか？」

リリー B

「うーん、残念…」

タモリ

「意外にいたんですねえ…」

一曰 CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え～！…』

リリー B

「では…。レティさんを紹介したいと思っています！」

タモリ

「え、冬のレティちゃんを？大丈夫？」

リリー W

「大丈夫です。何とか来れますから」

ADさんがつながった電話をリリー Wに渡す

リリー W

「もしもしし、リリーホワイトです」

レティ

「もしもし~お久しぶりです」

リリー W

「今何してました?」

レティ

「妖怪の山の洞窟です。溶け残った雪があるので…」

リリー W

「そうですか。タモリさんに代わりますね」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

レティ

「もしもし。レティです。[ん]ちはー」

タモリ

「どうも[ん]ちはー。明日は大丈夫ですか?」

レティ

「はい、大丈夫です!」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな?」

レティ

「いいとも~…」

タモリ  
「はい、お待ちしています！」

)

## 第八回・リリー・ホワイト（後書き）

第八回、リリー W&amp;Bでしたが、いかがでしたか？

リリー・ブラック登場で作品初の二人ゲストとなりました。何か少し漫才みたいになりましたが…。しゃべらないキャラ動かすとこうなります、すいません。

二人とも真面目に話すと面白くないし、二次創作みたいにリリー・Bをツンデレみたいに書くのは私には無理だし…というわけでこうなりました。

次回はレティさん！果たして登場できるのか？明日も見てくれるかな？

## 第九回・レティ・ホワイトロック

タモリ

「はい、『んにちは』

『んにわせ～！』

タモリ

「暑い日が続きますね～」

『そ～ですね！～』

タモリ

「こんな日に冬妖怪呼んでも大丈夫なんですかね？」

『そ～ですね！～』

タモリ

「エアコン～～で何とかなるかな？」

『そ～ですね！～』

タモリ

「人間でもつらい温度なんですがね～。汗がにじみ出る…」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、昨日のリリー・ホワイト&ブルックちゃんの紹介で初登場、レティ・ホワイトロックちゃんです

「…」

拍手と共にレティが登場！

『ええ～！』

『レティ！？』

レティ

「どうも～」

現れたレティ、だがすゞくお腹や胸が膨らんでいる…！

タモリ

「え…あの、レティちゃん…。もしや…おめでた？」

レティ

「違うわよー！お相手なんていませんしーこれですよー。」

そういう藍色のベストを脱ぐと…

タモリ

「うわー！こんなにいっぱい保冷剤入れてるのー。ベストの裏には凍つててる保冷剤がたくさんー。」

レティ

「ここに頼んで作つてもらいましたわ」

タモリ

「幅広いなあの子ーあれ、それは？」

レティ

「はい、北海道は旭川市で2012年2月8日（水）～12日（日）に開催される旭川雪まつりのポスターです」

タモリ

「ああ～、やっぱり雪像作つたりするんだ？」

レティ

「そうですわ。ですが、さっぽろ雪まつりと違い、かなり巨大な雪像を作つています」

タモリ

「そんなにー？」

レティ

「世界一大きい雪像としてギネスに登録されたこともあります」

タモリ

「そうですか～、貼つといてちょうどいいー！」

タモリ

「お花も届いてますね～。NUNさんに上海アリス幻樂団、大妖精に三月精、チルノちゃんからもー！」

レティ

「さすがに氷の花は止めたようですね」

タモリ

「おそらく大妖精にたしなめられたんでしょうね～」

タモリ

「最近はどうですか？」

レティ  
「前に比べるとマシになりましたかね。太ましいネタも少なくなりましたし」

タモリ

「ああ～、確かに。でも今日の収録でまた再燃するんじゃない？」

レティ  
「ああ！？確かに…。いや、勘違いしないで下をこよ眞さん…！…身ごもつた訳でも太つた訳でもありませんからね…！」  
力説しながらベストをはだけ、保冷剤をアピールするレティ

タモリ

「まあまあ落ち着いて…。ちゃんと編集でテロップ入れときますから

レティ

「また再燃したらいつしょ～」

タモリ

「そう深刻にならずに…」

レティ

「いや、この服のせいですからね！脱いだらきっとスレンダーですよ？」

タモリ

「やつなんですか？」

レティ

「射命丸さんに頼んでセリヌード写真集でも出そうかしら？」

タモリ

「止めとせなせこつてー！」

レティ

「太ましい疑惑解消にいいかと…」

タモリ

「いやいや…。といひでレティちゃんつて春には何しているの？」

レティ

「妖怪の山の洞窟とか、天界の隅とか…。高い所にいますね」

タモリ

「あ、そつなんだ〜」

レティ

「それで、たまに寒冷前線を操つたりして」

タモリ

「何してんの！？」

レティ

「私、寒気を操る能力ですからねえ…。冷たい風を作り出して寒冷前線を強めたりして」

タモリ

「それやつちやダメだって……」

レティ

「いやまあ、これも一つの仕事ですよ。夏は特に雲が多いから、たまに雨を降らさないとバランスおかしくなるんですよ」

タモリ

「あ、そりなんだ～！」

レティ

「でも寒冷前線って嫌われるんですよ～。突然激しい雨が降るから」

タモリ

「積乱雲、俗に言つて“入道雲”ってやつですね」

レティ

「河童や雲山は喜ぶんですけどねえ」

タモリ

「雲山喜ぶんだ…想像できない」

（  
—田中M

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

レティ

「どうしようかしら～！」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか？」

レティ

「それじゃあ…“去年雪合戦をしたことある人”でお願いしますー！」

タモリ

「では“去年雪合戦をしたことある人”スイッチオン！」

（

レティ

「一人…やつた！」

ADさんがストラップをレティに渡す

タモリ

「お、あの人だ！」

手を挙げている女性を指さす

タモリ

「出身は？新潟！なるほどねえ…」

レティ

「ありがとうございますー！」

（

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『えへーーー』

レティ  
「では…。同じ季節を操る者として、秋静葉さんを紹介したいと思  
いますー！」

タモリ

「秋の神様！これから大活躍しますねー！」  
ADさんがつながった電話をレティに渡す

レティ  
「もしもし、レティです」

静葉

「もしもし？お久しふりです」

レティ

「今何してました？」

静葉

「妖怪の山です。紅葉やイチョウの様子を見に来ていました」

レティ

「そうですか。タモリさんに代わりますね」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

静葉

「もしもし。静葉です。こんちはー。」

タモリ

「どうもこんにちはー。明日は大丈夫ですか?」

静葉

「はい、大丈夫です!」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな?」

静葉

「いいともーーー!」

タモリ

「はい、お待ちしていますー!」

（

## 第九回・レティ・ホワイトロック（後書き）

第九回・レティ編、いかがでしたか？

レティに対する想像を膨らませたらこうなりました。寒冷前線はもしや…。そう思うと積乱雲も少し笑つて見れますね。私としては雷が嫌いなので積乱雲はカンベンして欲しいのですが…。次回は秋静葉！明日も見てくれるかな？

## 第十回・秋静葉

（

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは～！』

タモリ

「もうすぐ八月も終わり…。秋になりますね」

『そうですね～！』

タモリ

「秋には色々ありますね」

『そうですね～！』

タモリ

「イベントもありますね。収穫祭に紅葉狩り…」

『そうですね～！』

タモリ

「どちらがいいかは言わないでおきます。争いの火種になりそ…」

タモリ

「どちらがいいかは言わないでおきます。争いの火種になりそ…」

「それでは登場していただきましょ~、昨日のレティ・ホワイトロ  
ツクちゃんの紹介で初登場、秋静葉ちゃんです~!ど~も~」

拍手と共に静葉が登場！

『かわいい~!~!』

『静葉~!』

静葉

「ありがとう!」

嬉しそうに笑いつつ、紅い紅葉もみじをスタジオにぱらまく静葉

タモリ

「す~い登場だねえ...」

静葉

「一足早い紅葉狩りですわ」

タモリ

「お、それは?」

静葉

「山梨県は富士河口湖で10月29日～2011年11月20日に開催される富士河口湖紅葉まつりです~!」

タモリ

「あ~、もうすぐ紅葉のシーズンですからねえ...」

静葉

「ライトアップされた紅葉の道、紅葉トンネルがすごくきれいです  
よー！天候によつては紅葉と共に富士山も見えて！」

タモリ

「そりやすゞしそうだ…貼つといつけようだい！」

タモリ

「お花も届いてますね～。NUNさんに上海アリス幻樂団、秋穂子  
ちゃんに鍵山雛ちゃん、守矢神社からも！」

静葉

「神としてですかね～。ありがとうございます。でも博麗神社からは？」

タモリ

「博麗神社からは…来てませんね」

静葉

「あの巫女：今年の博麗神社は葉が緑のまま冬を迎えるでしょうね  
！」

タモリ

「止めときなれ～って。あとが恐ろしいでしょ…」

静葉

「あー、私も軍神になりたかったー！」

タモリ

「最近はどう？」

静葉

「んー、不満を言い出せばきりがないけど… まずボスになる気はあまりないのよね。戦闘は苦手だから」

タモリ

「あ、そつなんだ?」

静葉

「だからボスで出演することはなくていいけど… セメてもの願いがあるの」

タモリ

「何ですか?」

静葉

「まず紅葉狩りをする人が少ないなーと思つて」

タモリ

「そりや確かに」

静葉

「遠くから見るだけで山に入らないのが残念…。私が準備万端で待つてゐるのに」

タモリ

「準備つて何の?」

静葉

「連休とかに合わせて葉が赤くなるよう調整したり、人が通ると共に葉が散るよう仕向けたり」

タモリ

「そんな」とやつてんだー?」

静葉

「でもお密増えないのよね。いやおすすめよ?紅葉狩り。黄昏の  
淡い光に照りされて輝く紅葉たち。爽やかなムード。」の中で告白  
したら落ちるわよ?」

タモリ

「え、そりなんですか?」

静葉

「ドラマチックだと思わない?辺りは静かで、そこには一人だけの  
空間が広がる。たわいもない会話が紅葉狩りという日常と違う空間  
で変わっていくの!」

タモリ

「そりですかね?」

静葉

「そして近づく二人の距離。紅葉の様に赤く染まる一人の顔が近づ  
いて…キヤー!もう恥ずかしい~」  
ほほに両手を当てぶんぶんと頭を横に振る静葉

タモリ

「あの、静葉ちゃん?現実の世界に帰ってきて!」

静葉

「私には、いえ紅葉にはこんな力があるの!」

タモリ

「本当にですか?」

静葉

「私は紅葉を司る神。人の顔も赤く染めて見せましょー!」

タモリ

「そりや無理でしょー!」

静葉

「でも幻想郷じゃあ妖怪の山のふもとは有名なテースポットの一つよ~!」

タモリ

「やうなんですかー?」

静葉

「人里、香霖堂、太陽の畠、そして妖怪の山なのよー!」

タモリ

「それどこからの情報ですか?」

静葉

「文が発行した幻想郷ガイド誌に載っていたわ!」

タモリ

「信用できるのかなあ…」

静葉

「うん!」

「あとは…たまに穢子と静葉のどっちが姉かわからない人いるのよね～。あれシヨックだわ」

タモリ

「あ～。それあるわ」

静葉

「だいたい東方って妹が姉より上なのよね～。フラン、こいし、依姫…。みんな姉より上みたく思われているのよね」

タモリ

「姉が妹にいいとこ譲つたんじやない？」

静葉

「でも私たちの場合1ボスと中ボスだからどっちが姉か忘れられてるのよね」

タモリ

「あ～、確かに」

静葉

「だから私自身、より印象に残る服を着ようと毎回のよ。外の世界のアーティストみたいに」

タモリ

「どんな服？」

静葉

「全身エモモジの葉っぱを貼り付けて…」

タモリ

「レディー・ガ！？」

（  
一曰CM  
）

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持つていて、一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

静葉

「はい！頑張ります！」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか？」

静葉

「それじゃあ…“母校にモミジの木がある人”でお願いします！」

タモリ

「では“母校にモミジの木がある人”スイッチオン！」

（  
）

静葉

「ああ、0人でしたか～」

タモリ

「イチヨウの木ならあるのかな？」

静葉

「木がある学校も減つてきているのかなあ」

（

一曰CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え～！～』

静葉

「そうですねえ…。穰子と言いたいところだけ…。予想を超える人を呼んじゃおうかしら」

タモリ

「お、誰ですか？」

静葉

「同じく八百万の神の一人、八坂神奈子様です！～』

『ええ～！～』

タモリ

「一気に飛びましたねえ…。大丈夫？」

静葉

「大丈夫です。同じ山に住む者同士、多少なりとも親交ありますから」

A Dちゃんがつながった電話を静葉に渡す

静葉

「もしもし、静葉です。お毎時に申し訳ありません」

神奈子

「もしもし、お久しぶりね」

静葉

「今、何されていました?」

神奈子

「守矢神社で早苗や諏訪子と『飯食べながら見てたわ。いやー、一  
気に私へ出番が回るとはね』

静葉

「お密さんが予想できない展開の方が面白いと思いまして…。では、  
タモリさんに代わりますね」  
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

神奈子

「もしもし。八坂神奈子です。『んにちは…』

タモリ

「どうもこにちは。明日は大丈夫ですか?」

神奈子

「…」

「ええ、問題ないわ

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな?」

神奈子

「いいとも~...~..」

タモリ

「はい、お待ちしてます!~」

丶

## 第十回・秋静葉（後書き）

第十回、秋静葉編。いかがでしたか？

今回は少し恋愛みたいなことを語つていましたが、私にはそんな経験全くありません。紅葉狩りで告白が上手いく保証はありませんので悪しからず。

次回は神奈子様です。一気に飛びましたね。

これまでを振り返ると藍様を除いてみんな幼女～少女の年代なので、ここで一つ大人の女性を出すことにしました。誰だババアといった奴？

神奈子様は一体何を語るのか？明日も見てくれるかな？

第十五回・八坂神奈子

（

タモリ

「はい、こんなにちは～」

『こんなにちは～！』

タモリ

「今日のゲストは神様だそうです」

『そうですね～！』

タモリ

「私も見るのは初めてですねえ…」

『そうですね～！』

タモリ

「神つて何か悟りの一つでも開かないと見れないですもんね」

『そうですね～！』

タモリ

「私は何の悟りの境地に立つたんだろう…？」

タモリ

「それでは登場していただきましょ、昨日の秋静葉ちゃんの紹介で初登場、八坂神奈子様です！どうぞ～」

拍手と共に神奈子が登場！

『あや～！！』

『神奈子様～！』

神奈子

「我を呼ぶのは何処の人ぞ？」

威厳たっぷりに腕を組みつつ現れた神奈子！だが…

タモリ

「ちょ、ちょっとイスどけましょうか？」

そう、トレードマークのしめ縄が邪魔でまっすぐ歩いてこれないからカニ歩きで登場してきた！なんともシユールである。

神奈子

「改めまして、八坂神奈子です」

タモリ

「歩くとき大変そうですね…」

神奈子

「…まあ、そう思つ時も少々あるわ

タモリ

「お、それは？」

神奈子

「今年の秋に守矢神社で開催予定の“第一回五穀豊穣奉納祭”的知らせよ」

タモリ

「へえ、そんなのやるんですか？」

神奈子

「うちも博麗神社例大祭に負けないようなイベントを作ろうと思つてね。それで乾、すなわち天を創造する私による豊穣祈願祭をやろうってわけ」

タモリ

「そうですか。てっきり御柱祭のポスターと思つていましたが…」

神奈子

「諏訪子に頼まれたのよ。『御柱祭は諏訪大社最大の行事だから私がから説明する！』って聞かなくてねえ…」

タモリ

「そうですか…これ貼つと/orいちょうどいい…」

タモリ

「お花もいっぱい届いていますね～！ニコニコさんに上海アリス幻樂団、守矢神社に秋姉妹、妖怪の山一同、鍵山雛ちゃん…あれ？地靈殿からも！？」

神奈子

「地獄鴉に八咫鳥の力を与えたからかしら？おそらく本人は忘れるだろうから、主人の古明寺さとりが渡したんでしょうけど」

タモリ

「律儀ですねえ…」

神奈子

「それにひきかえ、なんで博麗神社は何もないのかしら？」

タモリ

「いやまあ…あの人はよその神社ですし」

神奈子

「…まあいいでしょ」

少し呆れ気味に神奈子が着席

タモリ

「この世界から幻想郷に移住して結構たちますが、信仰の方はどうですか？」

神奈子

「いきなり痛いとこ突くわね…。まあ早苗も立派に妖怪退治ができる、着実に広まりつつあるわね」

タモリ

「そうですか～」

神奈子

「ただ、最近やってきた命蓮寺に少し信仰を奪われつつあるかな」

タモリ

「あ～、そうなんですか？」

神奈子

「あそここの住職は私と違つて威儀を振りまく感じではないから人が寄るのよね。まあ、私のやり方と命蓮寺のどっちがいいのかは知らないけど」

タモリ

「確かに、最近じゃあ妖怪が寺に入門しようとしてるとか」

神奈子

「びっくりしたわ～。まさかヤマビコが仏門に入門しようとは…時代は変わったわね～」

タモリ

「天狗や河童とかにも仏門を目指す人が出でたりして」

神奈子

「いや、あの辺は上下関係強いから私を無視して仏門に行くとは考えづらいけど…。だいたい天狗は情報、河童は技術にしか興味がないし」

タモリ

「確かにそうですねえ」

神奈子

「まあいたらオンバシリカラわすけどね  
不敵に笑みつつ淡々と語る神奈子

タモリ

「物騒だなあ…」

タモリ

「でもまあ、信仰は上手くいっている様ですから歎みもないんですか？」

神奈子

「ん~、一つあるとするなら早苗かしらね~」

タモリ

「神奈子様、諏訪子様にしてみれば娘みたいなものですからね」

神奈子

「あの小さかつた早苗がいまや立派に妖怪退治…してるのは嬉しいけど、なんか重大なミスしてる気がするのよねえ…」

タモリ

「といいますと?」

神奈子

「いや少し強引すぎるかなあと。あの靈夢や魔理沙も強引だけど、早苗も強引だし段々おかしくなつてるよつた気が…」

タモリ

「ああ~、聖輦船の時の…」

神奈子

「あれ以来妖怪退治に生きがいを感じてるよつた気が…いや大丈夫かしらあの子?」

タモリ

「確かにそんな気が……」

神奈子

「少し倫理とか神のあり方にについて論議する必要がありそうね。このままだと早苗が説法できないうつな気がする」

タモリ

「え？ 現人神も説法するんですか？」

神奈子

「こずれはそうなつてほしいのよ。あと五年ぐらいたいたら……」

タモリ

「説法できるかもせんね。その時には結婚して母親になつてたりして」

神奈子

「……けつ、じん……？」

今まで普通に会話してきた神奈子の顔が急に引きつる。

タモリ

「あの、神奈子様？」

神奈子

「いや！ 早苗はまだまだ、結婚するにはまだ早い！ まず相手がいい！ まだあの子は幼い！」  
いきなり立ち上がり熱く語り始めた！！

タモリ

「ちょ、神奈子様！？落ち着いて…」

神奈子

「あの子はまだ嫁には渡さない！絶対に！渡してなるか断じて！！」

タモリ

「…こりゃ当分早苗さんは箱入り娘のまんまだなあ」

一曰CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持つていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

神奈子

「ええ、当てて見せましょう」

先ほどどうつて変わつて落ち着きと威厳を取り戻しかけた神奈子様

タモリ

「頑張つてください。何いきますか？」

神奈子

「それでは…“長野の御柱祭を実際に見たことがある人”でお願いします！」

タモリ

「では“長野の御柱祭を実際に見たことがある人”スイッチオン！」

神奈子

「ああ、0人でしたか」

タモリ

「七年に一回だから、長野出身の人以外は忘れてること多いのかもしれませんね？」

神奈子

「ううん、年数をあけるのも善し悪しかな」

一曰CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜〜!〜』

神奈子

「そうねえ…では昨日の静葉のように意外な人を呼んじゃおうかしら

タモリ

「お、誰ですか?」

神奈子

「同じく八百万の神の一人、鍵山雛さんです!〜」

『ええ～！』

タモリ

「お、あの方とも親交が？」

神奈子

「ええ、元は人形といえど同じ山に住む神同士ですかから  
ADさんがつながった電話を神奈子に渡す

神奈子

「もしもし、神奈子です。お久しぶりね」

離

「もしもし？お久しぶりです」

神奈子

「今、何されていました？」

離

「妖怪の山で厄を集めていました」

神奈子

「そう。では、タモリさんに代わるわね  
受話器がタモリさんに渡される

離

タモリ

「もしもしタモリです」

「もしもし。雛です。こんにちは！」

タモリ  
「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」  
雛

「ええ、大丈夫です」

タモリ  
「じゃあ、明日来てくれるかな？」

タモリ  
「いいともーーー！」

タモリ  
「はい、お待ちしています！」

）

## 第十一回・八坂神奈子（後書き）

第十一話・八坂神奈子編　いかがでしたか？

大人の女性＆威厳ある神様というテーマは少し難しかつたですね。てなわけで最後は少しカリスマブレイクしましたが。誰です吸血鬼想像したの？

でもまあ、神奈子様は早苗のことを気にかけてると思いますよ？あの星蓮船編での会話で神奈子様は早苗の将来に不安を感じたに違いない…

それから、実際には守矢神社での五穀豊穣奉納祭なんてありませんからね？全くの想像の産物なんで悪しからず。

次回は神つながりで離です！明日も見てくれるかな？

第十五回・鍵山雑

(

タモリ

「はい、じんにじちは～！」

『じんじむは～！』

タモリ

「今日で八月も終わりですね～」

『そ～ですね～！』

タモリ

「学生は夏休みの宿題に追われてこらでしょ～うね～」

『そ～ですね～！』

タモリ

「漢字の書き取りに問題集、読書感想文なんてのもあるのかな？」

『そ～ですね～！』

タモリ

「この厄ばっかりは今日のゲストも抱えきれないでしょ～うね

タモリ

「それでは登場していただきましょう、昨日の八坂神奈子様の紹介

で初登場、鍵山雛ちゃんですー。どうぞー

7

**拍手と共に雛が登場！**

『物語』

蜀書

蜀辭

フィギュアスケートぱりの綺麗な回転をくるくると見せつつ、難が登場！！

ガツンッ！！

だが雑の脇腹が机に直撃！！

勾住

脇を抱えつつ座り込む

タモリ

た  
力アホでまだ！」

「…ちょっと張り切りすぎました」

「さうそく厄が集まっていますねえ…」

雛

「だ、大丈夫です。どうも…」

タモリ

「お、それは？」

雛

「まだ早いですが…福岡県の柳川市で平成24年2月11日から4月3日にかけて行われる柳川雛祭りさげもんめぐりです！」

タモリ

「ずいぶん期間があるんですね～。それに“さげもん”とは？」

雛

「さげもんとは天井からつるす飾りです。女の子の一生の幸せを祈るもので、流し雛や水上パレードなどがあります」

タモリ

「すごいですねえ…貼つとこてちょうどいい…」

タモリ

「お花も届いてますねえ…...NICONICさんには上海アリス幻樂団、守矢神社に秋姉妹！」

雛

「ありがたいですねえ…」

タモリ

「しかし…雛さんって、確かに周りの人にも厄が降りかかるんですよね

？」

雛

「あ、大丈夫です。これ着けますから  
そういう、手首のシユシユを見せる。

タモリ

「何ですか？それ」

雛

「ひとりのシユシユです。一時的に厄が周りに放出されるのを抑え  
るんです」

タモリ

「はーっ、ひとつさん幅広いですねえ…」

雛

「ありがたい限りですね」

タモリ

「最近はざうですか？」

雛

「うーん…厄が多すぎて手が回らない状態かなあ？す、ぐく忙しい」

タモリ

「あ、そつなんですか…」

雛

「毎日フル稼働で回っています」

タモリ

「頑張つてくださいー！」

雛

「いつもより余計に回つておりますーー！」

タモリ

「いや違つて！ それ傘の上でマスを回す人ーー海老一染之助・染太郎さんね！」

雛

「こんどあの唐傘お化けにすすめてみよつかしら？..」

タモリ

「いや、見た人は驚くでしょうけど… 恐怖は無いでしようね」

雛

「それは置いといて。まあ、厄が多いこともありますが…ひな人形自体、飾る家が少なくなりましたからねえ…」

タモリ

「そうですね～」

雛

「私としても飾つてほしいのですが…出し入れが大変ですからねえ」

タモリ

「並べるのも大変ですかねえ」

雛

「そのぶん流し雛は普通に行われていますがね」

タモリ

「あ～、そなんですか？」

雛

「ええ…」

タモリ

「ひな人形も大変ですねえ…」

雛

「いえいえ、これが私たちの役目ですか？」

タモリ

「ありがとうございます！」

雛

「そう感謝していただくとありがたいですねえ。それにひきかえ幻  
想郷の人間は…せっかく忠告してもろくに聞かず撃つてくるんだか  
ら」

タモリ

「まあまあ、靈夢さんや魔理沙さんにもわかつてもうれる日が来ま  
すよ」

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

雛

「さて、どうしますかね」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか?」

雛

「それでは…“今年、家でひな人形飾った人”でお願いします!」

タモリ

「男の人でも家に飾つたらOKなんですね?」

雛

「ええ、家に女の子がいる方は可能性ありますし」

タモリ

「では“今年、家でひな人形飾った人”スイッチオン!」

)

雛

「う~ん、3人でしたか」

タモリ

「結構いましたね?」

雛

「でもうれしいです！まだ残っていたんだ…」

一曰  
三

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『えへー…』

雛

「では…河城にとつせんを紹介したいと思ひます」

タモリ

「あ、意外ですね？」

雛

「妖怪の山でよく会いますし、外の世界では漫才で優勝したそうですがから」

Aロさんがあがつながらった電話を雛に渡す

雛

「もしもし、雛です。じつも」

にとつ

「もしもし？お久しふりですか」

雛

「今、何されました？」

二〇四

「妖怪の山で新しいメカの開発してました」

蜀

「う」苦労をまです。それでは、タモリさんに代わるわね」「受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

二三の事

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか?」タモリ

にとり

「はい、大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな?」

二  
九

「いいとも～！？」

タモリ

「はい、お待ちしています！」



## 第十一回・鍵山雑（後書き）

第十二回・鍵山雑編、いかがでしたか？

今回は少しまたになりましたかね？神奈子編が壊れ過ぎたようなので少し戻しました。だけど少し短くなりましたね。反省します。また、第五回東方M-1グランプリのネタも少し混ぜました。見たことない人にも違和感ないように仕上げたつもりですが…大丈夫ですかね？

伝わるか不安なネタには傘回しもありますが…。「存じですかね？正月の特番とかで「おめでとうございま～す！いつもより余計に回しております」が決まり文句のあの方々です。

あれを小傘は取り入れるのか？いや、それはないか…

次回はにとりです。明日も見てくれるかな？

第十一回・河城ヒトツ

（

タモリ

「はい、ひどいですね～」

『ひどいですね～！』

タモリ

「今日から九月ですねえ」

『そ～ですね～！』

タモリ

「学生は始業式が始まつてゐるでしょ？ね～

『そ～ですね～！』

タモリ

「そこでの校長先生の話が長いんですね～」

『そ～ですね～！』

タモリ

「私も前フリははれへりこころとかもしゃべ、無駄に長くなぬ…」

タモリ

「私も前フリははれへりこころとかもしゃべ、無駄に長くなぬ…」

「それでは登場していただきましょ~、昨日の鍵山雛ひやんの紹介で初登場、河城にとりちやんです~♪」

「拍手と共に扉が開く!だけれど、元通りが戻らない

タモリ

「あ、あれ?」

「ひとつ

「はーい!~

いきなりタモリさんの皿の前にひとつが登場!~!

『おお~!~』

タモリ

「うわあー?あ~びっくりしたー~!びっくりして僕の前に?~?

「ひとつ

「おなじみの“光学迷彩”です~改めまして!こんにちは!~!河城にとりで~す!~

『ひとつ!~』

『かわいい!~!~』

タモリ

「お、それは?~」

「ひとり

「9月1~8日に大分県中津市山国町、中摩亀岡八幡宮で行われる白地楽・カツバ祭りのポスターです!!」

タモリ

「あるんだねえ、かつば祭り」

にじ

「相当長いですよ、このお祭り。1733年から続かれる河童樂で民衆の繁栄と五穀豊穣を祈願して行われます」

タモリ

「そうですか~。貼つとこちゅうだい!!」

タモリ

「お花も届いてますねえ……! ひとつとこに上海アリス幻樂団、文々。新聞に守矢神社、地靈殿、鍵山雛さんに霧雨魔法店! すごいですね~」

にじ

「いや~、ありがたい限りです」

タモリ

「それにしても…幻想郷唯一のエンジニアとして生じてないですね

にじ

「まあそうですね~。私だけがエンジニアといつわけではないんですけどね。自分で何か作るのは魔法使いも同じですしそ

タモリ

「ああ~確かに

にとり

「その“作りたい物”にどう近づけていくかが違うだけですよ。私は工学、魔法使いは魔術、それだけです」

タモリ

「へえ～。その工学の知識はいったいどこから？」

にとり

「人間からですよ」

タモリ

「え？ そななんですか？」

にとり

「昔は河童が身近にいたのはご存知ですかね？」

タモリ

「ええ… 言い伝えとかではよく出てきますね」

にとり

「そこで入づてに習つたり、機械をバラしたり直したりして覚えました」

タモリ

「へえ～！でもどうしてそこまで？」

にとり

「う～ん。私自身、こういったことが好きだったってのもあるけど

…

タモリ

「ほひっ？」

にとり

「何より可能性を感じたから、かな？川から町を眺めていたけど、技術の発展がとても早く早いんですよ。人間って」

タモリ

「高度経済成長の時代は特に凄かつたですからね～」

にとり

「でしょ～！まさかあんな速い電車、新幹線が出来るなんて想像もしなかった！」

タモリ

「いや～、当時は本当に驚きましたよ」

にとり

「だからこそに可能性を感じたんです。何でも出来そうな可能性を。確かに工業の進歩で環境に悪影響も出ましたけど、改善する手立ては必ずあるー！」

タモリ

「おお…」

にとり

「私はそつ信じますね。その工学の力で世界をよりよく出来ると思っています」

タモリ

「日本も、ですか？」

にとり

「ええ、もちろん！」

そういうと、自信満々に微笑む

タモリ

「じゃあ幻想郷にも工業化を？」

にとり

「いえいえ、私は工学により得られる利益が上手く幻想郷に調和することを望んでいます。無理に機械化すると弊害が出るでしょうから」

タモリ

「かつての日本の風土と、工学による利益の調和…難しいですねえ」

にとり

「気長にやりますよ。時間はまだありますから」

タモリ

「がんばってください…！」

（

一日CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

にとり

「さて、どうしようかな？」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか？」

にとり

「それでは……“家に電気ドライバーがある人”でお願いします！」

タモリ

「電気ドライバーって、電動でネジ回すあの？」

にとり

「ええ、あれです。欲しいんですね～」

タモリ

「では“家に電気ドライバーがある人”スイッチオン！」

（

にとり

「ひゅー！？一人！…やつた！」

タモリ

「いましたね～！？お、あの人だ！」

客席にいた一人の男性を指さす

タモリ

「職業は何を？」

『建築業者に務めています』

「ひとつ

「ありがとうございますーーいやー、嬉しいー。」

（

一日CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さっこー！」

『えーーーーー』

にとり

「では…靈鳥路 空さんを紹介したいと思こます」

『えーーーーー』

タモリ

「あ、あの人ですかーー？」

にとり

「大丈夫ですよ。絶対に」

ADさんがつながった電話をにとりに渡す

にとり

「もしもしー、ひとつです。どうも」

お空

「 もしもし~えつと... 誰だつた? 」

ひとつ

「 私です! 前に魔理沙と一緒にやつてきた河城にひとつですよーー今、何されていました? 」

お空

「 間欠泉地下センターで温度調節の仕事をしていました」

ひとつ

「 いじ姑奶奶まです。 それでは、 タモツさんに代わりますね  
『 話器がタモツさんに渡される

タモリ

「 もしもしタモツです」

お空

「 もしもし。 お空ですか。 イヤホンがはー...」

タモリ

「 えいわいこにわま~。 明日は大丈夫ですか? 」

お空

「 はい、 大丈夫です。 炉はきちんと停止しておきましたから」

タモリ

「 じゃあ、 明日来てくれるかな? 」

お空

「 こことわ~...」

タモリ  
「はい、お待ちしています！」

)

## 第十二回・河城にとつ（後書き）

第十三回・河城にとり編、いかがでしたか？

今回はえらく真面目な話になりましたね。にとりは、なんかこう職人気質なイメージなので、それを膨らませていつたらこんな風になりました。

なんかテレフォンショッキングというよりプロジェクトXやガイアの夜明けみたくなりましたね。

次回はお空です。一つ言ひときますが真面目な話になるでしょう。もちろんお空らしい雰囲気も出しますが。

こんな時になぜお空なのかと思われる方もいらっしゃるでしょう。ですが今だからこそ語らせたいと思います。

私は九州にいるので語る資格は無いのかもしませんが、私なりにお空に語りさせたいと思います。

それでは…

第十五回・空路歸途

（

タモリ

「はい、ころりま～」

『ひんじわま～…』

タモリ

「北風が吹いてますね～」

『や～ですね…』

タモリ

「速度は依然、ゆっくりだやつです」

『や～ですね…』

タモリ

「偏西風に乗つたら速くなるかなあ？」

『や～ですね…』

タモリ

「じ～なんでしょー…」

タモリ

「じ～なんでしょー…」

タモリ

「それでは登場していただきましょ、昨日の河城にとちちゃんの紹介で初登場、靈鳥路 空ちゃんですーどうぞ~」

**拍手と共にお空が登場！！**

お空

「どうも！初めまして！」

『お空～！！』

『可愛いいい～！！』

タモリ

空

江戸の風俗

タモリ

「ちよつと！？タモリですよ！タモリー！」

お空

「ああ~、そうそう。タモリさん！」

タモリ

「お、それは？」

お空

「はい、福島県福島市で9月30日～2011年10月2日に行われる飯坂けんか祭りのポスターです！」

タモリ

「けんか祭り…激しいお祭りなんだ？」

お空

「はい、2田田の「富入り」の儀が祭りのハイライトで、6台の太鼓屋台が激しくぶつかり合います」

タモリ

「そうですか～。貼つとこちゅうだい～！」

タモリ

「お花も届いてますねえ……！～コレセセヒ～上海アリス幻樂団、守矢神社、地靈殿、河城にとつさん～す～」ですね～」

お空

「ありがとうございます！」

タモリ

「最近は…すいぶん注目されちゃいましたね～」

お空

「まあ、しうがなことですよ」

タモリ

「ねづかやさんはあの福島の」とびつぱんでるの？」

お空

「うーん…私、あんま難しこ」とはよくわからないんですけどねえ…。新聞とか口クに読まない」

タモリ

「あ、そつなんだ」

お空

「でもあえて言つなりが…最悪の事態は回避できたんじゃないか? と考えてこますけど」

タモリ

「へえ…」

お空

「地震直後に制御棒が働き核分裂を止めたまではいいけど、発電機が津波で破壊されて冷やす作業が行き詰つたじゃないですか?」

タモリ

「あー、ありましたね。それでヘリとポンプ車で放水して…」

お空

「それに加えて海水や淡水の注水で原子炉の崩壊、メルトダウンはなんとか免れたようじゃないですか?」

タモリ

「詳しい所は不明ですが、まあそのようですね」

お空

「それで今も作業員の方々がその冷却と封じ込めにあたっているようすけどね。これから気温も下がれば、より一層作業も進みそう

ですけど」

タモリ

「うへん、もう少し早く収束してほしーですね」

お空

「そうですね~。使い方と安全管理を完璧なりば、原子力はすばらしこエネルギーなんですか~?」

タモリ

「今は一旦止めといった方がいいでしょ~。余震も気にになりますし」

お空

「そうなると電力不足はどうなるんだろうか~って話ですよねえ。火力には限界あるし… やはり節電になるかな?」

タモリ

「ただ企業には痛い話ですね~」

お空

「それで生産量が減ると不景気がひどくなりそうだし…………あれ?なんか何が正しいのかわからなくなってきたーあれ?」

すでにお空の脳は考えられる許容量をオーバーしてしまったらしい。

タモリ

「まあ、節電も一つの手ですよ。それで節電グッズや節電タイプの家電とか売れてこま致使る」

お空

「それが一番、経済的にもエネルギーの面からもいこのかもしだま

せんね「

タモリ

「確かにそうかもね～。改めてみると電気の使いすぎだった氣もするし」

お空

「あとは昔からの核の力、太陽エネルギーとかに代用するとかかな？」

タモリ

「それは確かにいいですよね～」

お空

「いつのこと太陽光パネルを設置するのに補助金が出れば電力問題が解決しそうなんだけどなあ…」

タモリ

「あとは新しい総理大臣がどう動くかですね」

お空

「あ～、あの辺はわかんないなあ。私は新しい総理なんて誰だかよく覚えてないし」

タモリ

「確かにそうですね～」

お空

「ただ私、なんでもめてるのか良くなきゃならないんだよなあ…。やらなきやいけないことはもう眼に見えてるんだし、それに全力で取り

組めばいいのに」

タモリ

「それが一番の疑問なんですよねえ…」

一田CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持つていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

お空

「さて、どうしようかな?」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか?」

お空

「それでは…“太陽光発電で電気代がほぼゼロの人”でお願いします!」

タモリ

「では“太陽光発電で電気代がほぼゼロの人”スイッチオン!」

(

お空

「あ、5人!多いねえ!」

タモリ

「こましたね～！？」

お空

「これから広まつてこくといこんですけどね～」

～

一田の島

タモリ

「続いてせお友達紹介して下をこ～！」

『え～～～』

お空

「それじゃあ……お燐を紹介したいと思こまか」

タモリ

「やはつわいわおあすか」

お空

「ええ、そりゃあまあ」

ADさん<sup>ガ</sup>つながつた電話をお空に渡す

お空

「もしもし～、お空よ～」

お燐

「もしもし～、お燐よ～」

お空

「今、何してた？」

お燐

「さとり様と一緒に見てたよーいやー、あんた結構真面目なこと考  
えてんのね~」

お空

「私も伊達や醉狂で核を扱う程バカじやがないわ」

お燐

「お空…あんた変わったねえ…。いや嬉しいよあたしやあ…。あ、  
これくらいにしてタモリさんに代わって」

お空

「へ?タモリさんって?」

お燐

「あんたの横にいる黒い眼鏡かけてる人!!そのへんは変わってな  
いんかい!!」

お空

「ああそつか!それじゃあ、タモリさんに代わりますね」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

お  
燐

「もしかして、お嬢様です。」こんなひどい顔

タモリ

「どうもこんにちは～。明日は大丈夫ですか？」

お  
燐

「はい、大丈夫です」

タモリ

タモリ

「はい、お待ちしています！」

## 第十四回・靈鳥路 空（後書き）

第十四回・お空編いかがでしたか？

私も出すべきか迷いましたが、新総理が誕生した今だからこそ語らせたいと思い出演させました。

お空は確かに記憶力悪いけど大切なことはきちんと覚えている。一  
言で言うと“笑えるおバカ”だと思っているんですよ。  
ですからこんな感じに仕上げました。私の力不足で正直大したこと  
は言えていませんけどね。

新総理の判断が少しでも日本を好転させることを祈っています。

さて、次回のお燐編からはいつもの感じに戻します。ええもう、大  
暴れしちゃいますよ！あの「ゴスロリ猫が！」  
次回をお楽しみに！明日も見てくれるかな？

第十五回・火焔猫 燐

（

タモリ

「どうもこじまは」

『こんちまへーーー』

タモリ

「今日は猫ちゃんがゲストですね～」

『そ～ですねーーー』

タモリ

「飼うとしたらやつぱり猫かな？」

『そ～ですねーーー』

タモリ

「でも犬も捨てがたいですよね～」

『そ～ですねーーー』

タモリ

「お焼と桜…甲乙つけがたいな～！いやほんと

タモリ

「それでは登場していただきましょ、昨日の靈鳥路 オウルさんの紹介で初登場、火焔猫 燐りちゃんです！…びつぞ～」

拍手と共にお燐が一輪車を押しつつ登場！

お燐

「どうも～初めまして！お兄さん、お姉さん方～今日はようじくお願いします！」

『お燐～！！』

『可愛い～！～』

お燐

「いいねえいいねえ」の感じ！無理しても来たかいあつたよ～！予想以上の反響ににやけるお燐

タモリ

「お、それは？」

お燐

「いや～、もう終わっちゃったんですが… 8月の最終土・日曜に北海道の登別温泉町で行われている登別地獄祭りのポスターです！」

タモリ

「へえ～、そりゃまたす～」「そりゃ…」

お燐

「年に一度、地獄谷の地獄の釜のふたが開き、閻魔大王が鬼たちを

引き連れて登別温泉に訪れるヒカルのお祭りでねえ…。閻魔や鬼の神輿がすごいのよ!」

タモリ

「そりやす、」そつだー!」

お燐

「だらう? ただ私にしてみりや少し笑えるナゾねえ」

タモリ

「え、なんで?」

お燐

「だつて人間が思う閻魔と実際の閻魔が全然違うからやあーあんな  
厳つい顔してないよ閻魔は!」

タモリ

「いや四季映姫様と比べちゃダメでしょー! ?」

お燐

「そりや説教は上手いけど、背だつてあたいの胸ほどしかないよ?  
ありや死神が働かないわけだ」

タモリ

「止めときなさいって! !」

これ以上はお燐がヤバいと感じ制止するタモリさん

タモリ

「初つ端からいきなり爆弾発言出ましたねえ…。あ、お花も届いて  
ますね! ヒカルさんには上海アリス幻樂団、地靈殿…」

お燐

「あれー? セとり様あたいにも花くれたのかい? ありがたいねえ…」

タモリ

「いい主人に巡り合いましたな…」

お燐

「こりゃ何かいいものもってかないと怒られるねえ…」

チラリ

お燐の目線がタモリさんに向けられる

タモリ

「ちょっとー! 僕はダメですよー! まだまだこの世には未練があるー!」

お燐

「冗談ですって! 火車流のジョークさ」

タモリ

「あ~びっくりした! お燐ちゃんが言つと[冗談に聞こえないんだから…」

お燐

「大丈夫だつて! そんなんことしたらセとり様になんて言われるか」

タモリ

「それで… 最近どう?」

お燐

「うへん、お空は異変の時以来おとなしく眞面目に仕事してゐるが、さとり様もこいし様もいつも通りだし…」

タモリ

「いたつて平穏なんだ?」

お燐

「だからこりやかよいと過頃だなあと。いや仕事はあるけどねえ、代わり映えしないもんだからさあ…」

タモリ

「異変でも起こす氣!…?」

お燐

「いやいやーそんな氣せきひさい…。いやねえ、あたいは怨靈を操る「ことが出来るじやない?」

タモリ

「ええ、そうですね」

お燐

「だからさあ、この怨靈使つて何か樂しここと出来ないかなーと」

タモリ

「あー、なるほどー」

お燐

「いろいろ考へてはいるんだよ。たとえば地底の熱を使つた地靈温泉街作るとか!従業員は怨靈であーあたいはこの女将になるー」

タモリ

「いやいや、お燐さん来るかなあ？」

お燐

「来るわーーーまず地底の鬼達が絶対やつてくるー。」

タモリ

「それじゃより一層来なくならじょー鬼がいる温泉つてー。」

お燐

「じゃあ鬼専用の“釜ゆでの湯”とか作つて、人間と妖怪はそれ以外の湯に入らせるー。」

タモリ

「いや、釜ゆでつて……」

お燐

「他にも“血の池の湯”とか“灼熱の湯”とか……」

タモリ

「ネーミング悪いーーーもつと温泉いつつよーーー。」

お燐

「あとは熱を利用したサウナとか

タモリ

「それいいですね~」

お燐

「その名も“業火の部屋”……。」

タモリ

「いや怖いよーなにその五分で倒れそつた名前ーー。」

お燐

「まあ名前は後で決めるとして、これなら人も妖怪も来れるんじゃ  
ないのかねえ?」

タモリ

「あー、なるほど…でも地底ですよ?来る人は限られるんじゃ…」

お燐

「そこは大丈夫!あたいにはちゃんとお密さんアップの秘策がある  
のさーぜひ行きたいと思つ秘策がねえ!」

タモリ

「お、どんな?」

お燐

「全部混浴にしてしまつー。」

タモリ

「女性密減るでしょー。」

お燐

「大丈夫だと思つよー。それこそ妖怪は百年なんてザラに生きてる  
んだよ?男に見られた程度でわめくような器じやないさー。」

タモリ

「いやまあ確かにそうだけど…」

お燐

「あのスキマ妖怪とかは男がいても一切隠そつとしないこと思ひなどねえ。自然な感じで来た男達と普通に喋りそつだし」

タモリ

「つ～ん、どうなんだろ？？」

お燐

「“あ～、いらっしゃい。ここは本当にいい湯ね～”なんて世間話するんじゃない？胸とかアレとか見せたままで」

タモリ

「生々しこよー。」

お燐

「あとほ名物のおみやげ作るとか

タモリ

「あ～、それいいですね～！たとえばどんな？」

お燐

「まずは、熱い地底で作り上げた地靈酒ーーー。」

タモリ

「あ、地靈殿で作ったお酒ねー。」

お燐

「勇儀姐さん認定の辛口に仕上げましたー。」

タモリ

「きつすぎるでしょ！人間が飲んだら倒れるでしょ！」  
「…」

お燐

「じゃあ怨靈風の青白い炎のキャンドルとかは？」

タモリ

「あ、それキレイですね～」

お燐

「すごいでしょう。何もしなくてもついたり消えたりしますよ～」

タモリ

「何で…？心靈現象…？」

お燐

「あとはパルスイさんに頼んで縁切りのお守り作ってもらいつとか」

タモリ

「売れないでしょ……すいに発想だなあ…」

（

一日CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

お燐

「さて、どうしようかねえ？」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか?」

お燐

「それじゃあ…“飼つてる猫が十年以上生きてる人”でお願いします!」

タモリ

「たしか化け猫になるんだっけ?」

お燐

「あたいの知り合いになるかもしれないからね~」

」

タモリ

「では“飼つてる猫が十年以上生きてる人”スイッチオン!」

」

お燐

「あれ? 0人?」

タモリ

「う~ん、難しかったかなあ」

お燐

「あたいも九尾のキツネさんみたく部下が欲しかったんだけどなあ」

」

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

卷之三

「そ  
お燐

「それじゃあ…さとり様を紹介したいと思します」

『一・二・三』

「ご主人様ですか？」

お燐

「まあ当然の流れって奴ですかね」

お  
焼

四

「もしもし？」

お燐  
「今、何されていました？」

七九

「地靈殿あなたを見てたわ。すごいわね、にとりが作った“地

「デジタル放送」は！鮮明に映つてゐるわ！」

叶鱗

「ありがとうございますー！ それでは、タモリさんに代わりますね」  
彼の話がタモリさんに渡される

タモリ

もしもしタモリです

七九

卷之三

「どうもこんにちは～。明日は大丈夫ですか？」  
タモリ

七九

「はい 大丈夫です 心配しなくてもいいですよ? 地靈殿の主といえど結構ヒマですから」

タモリ

「きつちり心を読んでますねえ…じゃあ、明日来てくれるかな？」

七九

「いいとも！」

タモリ

7

## 第十五回・火焔猫 燐（後書き）

第十五回・お燐編いかがでしたか？

いや～、かなり苦戦しましたね。東方M・1の“さとりんおつきゅん”的なネタである地靈温泉の話を元に作り上げました。

なんとかなり暴走したなあ～。いや、もともとお燐は明るいのうだしこれでいいのかな？

もし出来たら行ってみたいんですけどね～。地靈温泉で汗を流して地熱で一気に焼き上げた焼き魚とか食べたりして…

支配人はさとりで女将がお燐で…いやいや、何を言つてるんだ私は！？

次回はさとりです！明日も見てくれるかな？

第十六回・古賀地をひつ

（

タモリ

「はい、こそこそ

『こんなにまほ～ー』

タモリ

「そろそろ文化祭や体育祭の練習とか始まりますかね？」

『そ～ですねー！』

タモリ

「懐かしい話ですね～」

『そ～ですねー！』

タモリ

「リレーに綱引き、文化祭では出店まわったりして

『そ～ですねー！』

タモリ

「そうだったつけな～もつ何十年前の話だか…」

タモリ

「どうだつたつけな～もつ何十年前の話だか…」

「それでは登場していただきましょ、昨日の火薙猫 燐ちゃんの紹介で初登場、古明地 さとうちゃんです！どうぞ～」

（　）  
拍手と共にさとうが登場！

『さとう～！～』

『ジト田可愛い～！～』

さとう

「ど…どつも」

かなり照れながらさとうがタモリさん近くに寄る。心から褒めてることが分かるせいか、人一倍褒め言葉に弱いらしい。

タモリ

「お、それは？」

さとう

「はい、11月21日に徳島県三好市藤の里公園で行われる妖怪まつりのポスターです」

タモリ

「あるんだそんなの？」

さとう

「三好市山城町上名藤川谷周辺は妖怪 児啼爺こなきじいの故郷ですから。妖怪みこし、妖怪バンド、妖怪行列、手作り妖怪コンテスト等があります」

タモリ

「すごいねえ…貼つといへりやうだい！」

タモリ

「お花も届いてますね～。ＺＵＺさんには上海アリス幻樂団、地靈殿、  
守矢神社からも！」

さとり

「ありがとうございますねえ…でもＺＵＺさんが大丈夫でしょうか？毎回花  
贈つたりして…」

タモリ

「大丈夫じゃないんですか？」

さとり

「財布が空になつたＺＵＺさんが見えそひね」

タモリ

「最近はどうですか？」

さとり

「いたつて平穏ですね～。こゝしも少しずつ第3の田を開きつつあ  
りますし」

タモリ

「いい傾向ですね～」

さとり

「ただ自分自身を少しを変えたいな～とは思つてはいますがけどね」

タモリ

「とこりど… イメチHン?」

れとつ

「そうですね」

タモリ

「ほり、具体的には?」

れとつ

「まず服装を変えようかと」

タモリ

「服装?」

れとつ

「いや私、実年齢より幼く見られてるな~って  
そういう、会場のお客さんを見渡す

れとつ

「……小学校低学年程度に思っていますね」

ギクッ!!

お客さんの顔が急にこわばる。

タモリ

「なるほどね~」

れとつ

「とこりどしたものか…」

タモリ

「難しい女の子の悩みですねえ」

さとつ

「ドレスやワンドベースにしようと思っていますが、どんなデザインがいいのか？」

タモリ

「うーん、レミコアさんみたいなドレスとか？」

さとつ

「今“そうしたらレミコアと姉妹みたいで可愛いな”って思つたでしょー！」

タモリ

「あはは…」

さとつ

「紫の髪と合つて服つて選びびひこですねえ」

タモリ

「それは確かに…」

さとつ

「あとは…外の世界で流行つてゐる“つけまつ毛”をしてみよつかと」

『ええ～！…』

さとつ

「“変わりすぎ”ですか…」  
即座に読み取るさとり

タモリ

「大胆なこと言つたねえ…」

さとり

「いやー、たまには“おめめパツチリしたさとり”なんてのもいいかなーと」

タモリ

「またすごい事を…」

さとり

「このジト目は誤解を生みやすいですからね。怒つてないのに怒つてるように見える、普通にしても不機嫌にみえるって訳で…」

タモリ

「“心読めても理解はされず”ってやつですか…」

さとり

「うーん、心というのは難しい…」

（  
一日CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

さとり

「うーん…」

タモリ

「心読むのは無しですよ?頑張つてください。何いきますか?」

さとり

「では…“高所恐怖症の人”でお願いしますー」

タモリ

「では“高所恐怖症の人”スイッチオン!」

（

さとり

「ああ、3人でしたか?」

タモリ

「意外に多かつたですね」

さとり

「トライウマを見せたげまじょうか?  
ジト田でにやけるさとり

タモリ

「止めときなさいって」

（

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さー！」

『えーーーー。』

さとり

「では、妹の古明地こいしを呼びますーーー！」

『おおーーーー。』

タモリ

「大丈夫？いつもふらふらしてるそつだけど」

さとり

「大丈夫です」

ADさんがつながった電話をさとりに渡す

さとり

「もしもし、お姉ちゃんよ？」

こいし

「もしもし？」

さとり

「今、何してた？」

こいし

「守矢神社あたりをお燐と散歩中。よく私の位置がわかつたね」

七八

「お燐の怨霊と私のペットをフル稼働させて探したのよ。では、タモリさんに代わりますね」

タモリ

「もしもしタモリです」

二  
いし

「なんとかなれ！」

タモリ

「どうも」んにちは。明田は大丈夫ですか？」

二  
いし

「大丈夫だよ」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

二  
い  
し

「いとむ！」

夕モ引

「はい、お待ちしています！」

7

## 第十六回・古明地をとつ（後書き）

第十六回・古明寺をとり編いかがでしたか？

いや～、今回は少し女の子の悩み入りましたね。あんま上手く書けなかつたです：女の子の心は難しい

心を読めるのはメリットもデメリットも大きいですからね～。他人が思う自分の第一印象丸わかりな分、見た目に悩むのかもしけないと思い書きました。

さて次回は古明寺じいじちゃんとです！明日も見てくれるかな？

第十七回・古明地にこひらがへ

（

タモリ

「はい、ほんとうね～」

『ほんとうね～』

タモリ

「今日は無意識を操る方ですね～」

『そ～ですね～～』

タモリ

「私にも色々セがあるんですが…それを操れるんですかね？」

『そ～ですね～～』

タモリ

「だったら作者のびんぼうゆすりのクセを直して欲しい…」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、昨日の古明地わとつちやんの紹介で初登場、古明地にこひらがへです。びつべ～」

（拍手と共ににこひらがへが登場！）

（

二二三

可愛い！

卷之三

「お、それは？」

۱۷۰

「月一館、三月一館に木ノ山日没ノ経三邊乃で日没ノ木ノ關作る  
れるうずまの妖怪祭りです！」

「ほー、妖怪のお祭りって結構いっぱいあるんですね~」

二  
一  
三

「そうみたいですね、蔭の街ナイトクルーで溶解に扮した船頭さんが怪談話を語りつつ夜の川を巡ります」

タモリ

「そうですか、貼りといてちょうだい！」

タモリ

「お花も届いてますね。ZUNさんに上海アリス幻想樂団、地靈殿、守矢神社からも！」

二  
い  
し

「山の神社からも来たんだ～！今度また参拝しよう～と」

タモリ

「最近はどうですか？」

タモリ

「ん～、閉ざした第三の田は徐々に開きつつありますガ…」

タモリ

「それはいいことですね」

タモリ

「でも無意識状態でふらついているとこそこともあるんですね」

タモリ

「といいますと？」

タモリ

「気配を完全に消せるからいろんなところに入り込めるんですよね」

タモリ

「それいいですね～」

タモリ

「山の神社だらうと紅魔館だらうと、いろいろ入れるんですね。ですからいろいろなネタ持ってるんですね」

タモリ  
「えー？」

「いし

「たとえば…普段のみんなの会話とか難なく聞けますね」

タモリ

「うわあ…」

「いし

「あと着替えシーンとか」

タモリ

「それダメでしょーー！」

「いし

「だから射命丸さんにスカウトされてるんですね」

タモリ

「ええーー？」

「いし

「“ 私に変わり潜入取材を敢行してくれ ” って…」

タモリ

「いや絶対ダメですよーー！」

「いし

「まあ私自身あんまり新聞には興味ないんですけどね」

タモリ

「あ、そなんだー」

「いし

「でも探偵なら興味あるかな～」

タモリ

「幻想郷初の？」

こいし

「そうそう！私が潜入して決定的な情報や証拠を手に入れ、お姉ちゃんが犯人を追いつめる！」

タモリ

「それ最強じゃないですか！！百パーセント当たりますし！」

こいし

「でしょ～？」「 ンや金 一なんてメジやない！！」

タモリ

「心が読める時点で犯人の田星つきますからね」

こいし

「“姉妹探偵 古明寺”かつこいし～！」

タモリ

「それいいね～」

こいし

「私たち姉妹だったら事件が起きて30分で解決しますよ～」

タモリ

「それいいですね～」

こいし

「だから心の田を自由に開け閉めできないかなーと」

タモリ

「がんばってください！！」

（

一曰CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持つてますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

こいし

「うーん…」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか？」

こいし

「では…“クセが5つ以上ある人”でお願いしますー。」

タモリ

「無くて七癖なんて言いますからね～」

こいし

「でも自分じゃ気付かないんですよ～」

タモリ

「では“クセが5つ以上ある人”スイッチオン！」

（

こいし

「ああ、0人でしたか？」

タモリ

「人間わからないものですからね～」

こいし

「見せたげようか？自分の癖を」

タモリ

「知りたいような知りたくないような…」

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え～！～』

こいし

「では…意外な人を呼びます！！橋姫のパルスイさんを呼びますね」

『おお～！～』

タモリ

「あ、あの人呼ぶんですか？」

こいし

「あの人ほど裏表ある人いないよ。ひとのいない所ではいい人なんだから」

ADさんがつながった電話をこいしに渡す

こいし

「もしもし？」

パルスイ

「もしもし？」

こいし

「今、何してた？」

パルスイ

「いつもどおり橋の警護中」

こいし

「では、タモリさんに代わりますね  
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

パルスイ

「もしもしパルスイです」

タモリ

「どうもこんにちは～。明日は大丈夫ですか？」

パルスイ

「大丈夫よ。ヤマメに変わつてもらうから」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

パルスイ

「いいとも～！～」

タモリ

「はい、お待ちしています！」

（

## 第十七回・古明地こいし（後書き）

第十七回・古明地こいし編いかがでしたか？

こいしの無意識能力つて潜入に最適じゃね？というアイデアのもと、  
こんな感じに仕上りました

実際に古明寺姉妹が探偵コンビ組んだら最強と思います。

次回はパルスイです！明日も見てくれるかな？

第十八回・水橋パルスイ

（

タモリ

「はい、こんにちは～」

『こんにちは～！～』

タモリ

「やつと台風行っちゃいましたね～」

『そ～ですね！～』

タモリ

「大雨で大変でしたよ～」

『そ～ですね！～』

タモリ

「でも庭の花は無事だったんですよ～」

『そ～ですね！～』

タモリ

「根が強いんでしょうね。これがホントの根魂ねたましい？怒っちゃやーよー。」

タモリ

「ねたましい」と「怒っちゃやーよー」

「それでは登場していただきましょう、昨日の古明地にこしづちゃんの紹介で初登場、水橋パルスイちゃんです!どうぞ~」

拍手と共にパルスイが登場!

『パルスイーーー!!』

『可愛いーーー!!』

パルスイ

「そのストレートな褒め言葉が妬ましいわ…そして司会のダジャレが妬ましいわ!!!」

いきなり鋭い眼光をタモリさんへ浴びせる

タモリ

「言わせたの作者ですよーーー!」

パルスイ

「そう…丹見草さん、地底の地獄にじご招待してあげようかしら?..」

タモリ

「止めときなをこつて…お、それは?」

パルスイ

「京都府の宇治市、あがたじんじゃ県神社で毎年6月5日から6日の未明にかけて行われる県祭りのポスターよ」

タモリ

「ほー、京都ですか…」

パルスイ

「珍しい事にこの祭りは、ともしう火をともさないことから「暗夜の奇祭」と言われるわ」

タモリ

「へえ～」

パルスイ

「でもね…ホントは宇治市の橋姫神社をアピールしたかつたんだけどね…祭りがないのよ！縁切りの神社だから！」

タモリ

「そうだつたんですか！？」

パルスイ

「だから代わりに同じ宇治市の県神社紹介したのよ…。県神社は縁結びだから。妬ましいわ！！橋姫神社もお祭り作りなさいよ！」

タモリ

「縁切りの神社の祭りですか？」

パルスイ

「アイデアなんかあるでしょ！縁を完璧に切りたい人の写真を燃やす“縁切りお焚きあげ”とか」

タモリ

「暗いよ！呪いの儀式みたいでしょ！」

パルスイ

「じゃあ嫌な縁を切るという願いを込めて日本刀で丸めたゴザを斬るとか」

タモリ

「危ないでしょ…いや楽しそうだけだぞ…」

タモリ

「えへ、お花も届いてますね～。ＺＵＺさんと上海アリス幻樂団、地靈殿、旧地獄街道からも！」

パルスイ

「ありがたいわね～」

タモリ

「最近どうですか？」

パルスイ

「暇ね～。いやほんと」

タモリ

「そなんですか？」

パルスイ

「忌み嫌われた者たちの巣窟である地底にわざわざ降りてくる奴なんて、巫女か魔女くらいのものよ。あの余裕が妬ましいわ…」

タモリ

「で、実際には口クに橋を通る者はいないと？」

パルスイ

「そうね。まあそれはそれで樂でいいんだけど……」

タモリ

「ほう？」

パルスイ

「いやあたし、元は嫉妬に狂つた女でしょう？」「

タモリ

「あ、なんかそんな説ありますね。橋姫といえば先ほどいの“宇治の橋姫”は有名なようですし」

パルスイ

「いやまあ、その時は若かつたからこんな風になつたんだけじょそもそも一度若じいひのよつこ、燃えるよつな恋をしてみたいのよねえ……」

遠い目で遙か昔のことを語るパルスイ

タモリ

「あ～、やうなんですか。でも……」

パルスイ

「わかつてゐる。私は嫉妬を操る者。人が近づきにくい者……。でもさあ、それでも寄つてくるような醉狂な奴がいたら、それでもいいかなあ……なんて」

少し苦笑しつつ語るパルスイ

『おお～！』

タモリ

「おお～、東方テレフォンショッキング初の恋バナですかーー！」

パルスイ

「橋姫が恋の話とは、少しおかしな気もするけどね。でもまあいいじゃないの。嫉妬は恋の一つの形よ？その人を一人占めしたいという気持ちの形」

タモリ

「いい」と言いますねえ…」

パルスイ

「もう一度味わってみてみたいのよ。他の女にとられて気が狂いそうなほど嫉妬するような、そんな熱い恋を」

タモリ

「ずいぶん詩的のこと語りますねえ…」

パルスイ

「でもまあ、なかなか相手いないんだけどねえ…。骨のある男がないのが、あたしが男をはねのけているのか？」

タモリ

「時代は草食系男子が多くなりつつありますからね～

パルスイ

「その中に作者も含まれるんだけどね」

タモリ

「ははは…」

パルスイ

「ん~、いつそのこと外の世界みたく合コンでもやってみたいけどね~」

タモリ

「地底に男いますかね?」

パルスイ

「そこが問題なのよ!...全く 地上の世界が妬ましいわ!...」

タモリ

「こりゃ 相手探しは難航しそうだなあ...」

一曰CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

パルスイ

「どうしようかしら?」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか?」

パルスイ

「じゃあ“西想いの恋が上手く成就した人”でお願いします!」

タモリ  
「おお～、ロマンチックですね～では“両想いの恋が上手く成就した人”スイッチオン！」

パルスイ  
「ああ～〇人か～」

タモリ  
「恋は難しいですね」

パルスイ  
「その難しさが妬ましいわ～！」

タモリ  
「それが恋ですって～！」

一田CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え～！～』

パルスイ

「では…星熊勇儀様を呼びますね」

『おお～！』

タモリ

「ついに来ますか？語られる怪力乱神！」

ADさんがつながった電話をパルスイに渡す

パルスイ

「もしもし？パルスイです」

勇儀

「もしもし？」

パルスイ

「お久しへりです。今、何されていました？」

勇儀

「いつもどうりさ。飲み連中と酒食うつてた」

パルスイ

「では、タモリさんに代わりますね」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

勇儀

「もしもし。どうも初めてまして」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか?」

勇儀

「大丈夫さ」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな?」

勇儀

「いいともーーー!」

タモリ

「はい、お待ちしてますー!」

)

## 第十八回；水橋パルスイ（後書き）

第十八回；水橋パルスイ 編いかがでしたか？

パルスイは嫉妬を操るところから、昔大恋愛してるイメージがある  
のでこうなりました。“妬ましいわ”は寂しさや思い出の現れかも  
しませんね。

次は勇儀姐さんです。明日も見てくれるかな？

## 第十九回・星熊勇儀

（

タモリ

「はい、じんにちば」

『じんじゆせ～！』

タモリ

「鬼が来るそうですね」

『そ～ですね！～！』

タモリ

「なんと怪力だそうですね」

『そ～ですね！～！』

タモリ

「でも炒った豆が苦手だそうですね」

『そ～ですね！～！』

タモリ

「私も苦手なんです、炒った豆。歯に挟まつて取れないのなんのつて…」

タモリ

「では登場していただきましょ、昨日の水橋パルスイさんの紹介で初登場、星熊勇儀さんです！どうぞ～」

拍手と共に勇儀が登場！

勇儀

「おうおひ、よろしく頼むわ皆の集…！」  
さかずき  
盆戸手に勇儀がさつそうと登場…

『勇儀姐さん…』

『かつこいいー！！』

勇儀

「ははは、いいねえ外の世界は華やかで！」

タモリ

「豪快な登場ですねえ！」

勇儀

「なあに、軽いもんぞ…」

バシッ！

勇儀は照れ隠しで軽くタモリさんの肩を叩いた…！

タモリ

「ぐえつ…」

勇儀

「おおつとーいや失敬! 軽くしたつもりだったんだが……」

タモリ

「十分痛いよ! ……鬼だつて」と自覚してくさい……」

勇儀

「あ~、すまんすまん」

タモリ

「お、それは?」

勇儀

「愛知県は岡崎市の滝山寺で旧暦1月7日に近い土曜日に開催の滝山寺鬼まつりのポスターよ!」

タモリ

「鬼は祭りと関わり合い大きいですからね~」

勇儀

「天下泰平・五穀豊穣を祈るものでねえ……私も混じつて呑みたいものさ」

タモリ

「本物出でたら怖すぎるでしょ! ……」

勇儀

「あつはつは! ……そりゃそつだ!」

タモリ

「お花も届いてますね～ニコニコさんに上海アリス幻樂団、地靈殿、妖怪の山一同、伊吹萃香さんからも…」

勇儀

「お、あいつ気がきくね～今宵はいい酒持つてあいつと飲み明かすか！」

タモリ

「す”い飲み会でしうね…最近はどうですか？」

勇儀

「うーん、酒飲んで宴会して十分満足してんだけさあ…。腕試しがしたいのよ！」

タモリ

「強い奴と戦いたい、鬼の性分つてやつですか？」

勇儀

「よくわかってるね～」

タモリ

「でも相当な奴つれてこないとダメでしょ…」

勇儀

「そりなんだよなあ…」

タモリ

「地底の外にはいろいろいるんですけどねえ。暇そうな天人ぐずれとか、幽閉されてた吸血鬼とか」

勇儀

「一度手合させ願いたいものぞ」

タモリ

「あ、いやマズイかも。周囲に相当な被害が…」

勇儀

「そんときわや私と萃番で直すわー。あとせん皿ご酒でも持つてこなば問題なし…」

タモリ

「豪快だねえ…いやほんと」

勇儀

「いやまあ、それがダメならせめて派手な祭りでもしようかと思つてるけどね」

タモリ

「こつも宴会してるのは?」

勇儀

「確かにそうなんだけど…。宴会とは違つ雰囲気を味わいたいのや」

タモリ

「たとえばどんな?」

勇儀

「けんか祭りとか」

タモリ

「大問題でしょ！…」

勇儀

「火事と喧嘩けんかは江戸の華、でしょ？」

タモリ

「いや鬼が神輿かついでぶつけ合つたら相当マズイでしょう！」

勇儀

「でも壮大だと思つよ？」

タモリ

「確かに庄巻のスケールだけど…あなたは参加できないでしょう？」

勇儀

「そうかな？なんなら一人で神輿かついてもいいけど？」

タモリ

「相手が多数の鬼でも“力の勇儀”の前では歯が立たないでしょう！」

勇儀

「ちゃんと加減するよ？盆の酒をこぼさないまま神輿かつぐとか」

タモリ

「もうそれ 자체がすごいイベントだなあ…」

（

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

勇儀

「さて、どうしようかねえ?」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか?」

勇儀

「そんじゃあ……昨日お酒を一升のんだ人”で頼む!」

タモリ

「一升か?。でも一人いるかも知れませんね。では“昨日お酒を一升のんだ人”スイッチオン!」

（

勇儀

「お!一人!」

タモリ

「あの人だ!」

手を上げる一人の男性を指さす

勇儀

「兄さんいけるクチだね~」

A Dさんからストラップを受け取る

勇儀

「そんじやあ」の鉄の腕輪に付けようかね」

タモリ「ありがと、」  
モコ「あー。」

}

—  
三  
〇  
M

タモリ

— 続いてはお友達紹介して下さい!』

卷之三

勇儀

では鬼の四天王の一角、伊吹萃香を呼びます！！

ପ୍ରକାଶକ

タモリ

「やばつわいれもすか～」

ADさんがつながった電話を勇儀に渡す

勇儀

「もしもし？」

萃香

「ぐー、ぐー」

勇儀

「あん？おじつ！酒食らって寝てんのか！？起れやー。」

萃香

「あー…もしもし？その声勇儀か？どしたの？」

今起きたばかりの寝ぼけた声で萃香が返事する

勇儀

「明日のテレフォンショッキングにあんたを紹介したの！それじゃタモリさんに代わるから」  
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

萃香

「もしもし？」

タモリ

「どうもこひんにうちはー。明日は大丈夫ですか？」

萃香

「大丈夫だよ～」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

萃香

「いとちーーー！」

タモリ

「はい、お待ちしていきます！」

）

## 第十九回・星熊勇儀（後書き）

第十九回・星熊勇儀編いかがでしたか？

勇儀姐さんは金髪なのに和のイメージありまくりですからね。もうハッピ着て神輿かついだら男顔負けじゃないかと。そこからこんな話になりました。

勇儀姐さんなら右手で神輿かついで左手にある酒を飲むなんて楽勝でしょうね。

次回はいよいよ二十回田一明日も見てくれるかな？

第一十回・伊吹萃香

（

タモリ

「はい、ここのちば～」

『こんにちば～！』

タモリ

「今日も鬼ですね～」

『そ～ですね～！』

タモリ

「お酒をよく飲むそうですね」

『そ～ですね～！』

タモリ

「一日酔いしないでしょ～ね」

『そ～ですね～！』

タモリ

「あんなに飲んでアル中にならないのかなあ？」

『そ～ですね～！』

タモリ

「あの人絶対にウコンの力やキャベジンいらぬでしうね」

タモリ

「では登場していただきましょ、昨日の星熊勇儀さんの紹介で初登場、伊吹萃香さんです！びつた～」

（

拍手と共に萃香が登場！

萃香

「ど～も～！いや～初めてまして！..」

いつもどおり酔っ払いつつ萃香が登場！..

『萃香～！..』

『可愛い～！..』

萃香

「いや～、やつぱり外の世界は賑やかだねえ！..」

タモリ

「相変わらず飲んでますねえ～！」

萃香

「飲む？」

腰の瓢箪をかけて見せる

タモリ

タモリ

「いやー、そりこわけには…」

萃香

「昼から酒飲めないとは…大変だねえ」

タモリ

「お、それは？」

萃香

「10月15日に京都府京都市一条通り、大将軍商店街で行われる  
一条百鬼夜行のポスターよ！！」

タモリ

「百鬼夜行ってことは、妖怪の仮装行列ですか？」

萃香

「まあそうだねー。でも本物と比べたらまだだけどね」

タモリ

「いやいやー本物と比べちゃダメでしょー！」

萃香

「何だつたら出てもいいけど、私先頭で、勇儀や紫とか、あとは天  
狗や河童なら大勢呼べると思うけど？」

タモリ

「たしかに壮大でしうけど…絶対やつちやダメですよー！」

萃香

「ちえー、でも幻想郷で百鬼夜行しても面白くないもんなあ…」

タモリ

「もはや見慣れたものでしうからうね」

タモリ

「お花も届いてますね～ニシニさんに上海アリス幻樂団、妖怪の山一同、星熊勇儀さん、比那名届 天子さん、博麗神社、八雲家からも！」

萃香

「おお～、来たねえ～～！」

タモリ

「靈夢さんから来るとは…流石ですね」

萃香

「能力で萃めたんだよ」

タモリ

「強制的に…？」

萃香

「さうでもしなきゃ花出れないでしょ～」

タモリ

「いや確かにそうかも…」

タモリ

「最近はどうですか？」

萃香

「あいかわらず酒飲んでいるんだけじね～」

タモリ

「あ、そつなんですか～。ビール飲んでるんです?」

萃香

「まあ、天界だつたり靈夢さんといつたり…」

タモリ

「なるほど」

萃香

「でもまあ最近は夜雀さんとこで飲んだりするかな?」

タモリ

「ミステイアさんですか?」

萃香

「セツセツーあのハ目ウナギのー」

タモリ

「よく行くんですか?」

萃香

「週五だね」

タモリ

「すういな～」

萃香

「あそこ面白いんだよね～。普段会わない奴と飲めるから」

タモリ

「たとえばどんな？」

萃香

「それがさあ、最近…あの不死の、火を使う…」

タモリ

「藤原 妹紅さんですか？」

萃香

「そうそう、あの妹紅！死なないから思いつきり飲ませてやったわ  
～あの時は楽しかった！」

タモリ

「そんなことやつてたんですねー？」

萃香

「すでにベロベロの状態から、さらに瓢箪の酒飲ませたつけな？完璧につぶしちまった。もう意識失いかけてたな。目がうつろだつたし」

タモリ

「止めときなれこつてー。」

萃香

「そんでやつてきたあの蓬莱山 輝夜も瓢箪の酒でつぶしちまつて  
るあ…。いや、あいつら不死のせいが、普通の酒じゃ効きにくーの

よね

タモリ

「お姫様つぶしたの！？」

萃香

「あんときやヤバかつたな……後からやつてきた薬師と半獣が怒り狂つて弾幕の雨あられ！……“今夜を無かつたことにしてやる……”なんてね……」

タモリ

「そうなるでしょー！」

萃香

「すでにその時は酒飲み過ぎててさあ……こりゃ流石にマズイと思つて天界まで飛んでつて、追つて来た一人と天子が弾幕始めて……」

タモリ

「その隙に逃げたんだ？」

萃香

「そうやつてー！」

タモリ

「人騒がせだなあ……」

萃香

「まあ良かつたと思うよ？里の人たちや流星群と思つてたらしいし。いい夏の思い出だつたろ？よ？」

タモリ

「いいのかなあ？天子はやられたんでしょう？」

萃香

「いいんじゃないかなー。天子暇そだつたし。終わりよければすべてよし。酒は人付き合いを円滑にするのさ。人工の天体観測もいんじやない？」

タモリ

「確かにそうかもしませんが…」

萃香

「まさに“瓢箪から星”！！」

タモリ

「いやなってるけども…新しい格言作らんで下さい…！」

一曰CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持つていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

萃香

「どうしようかねえ？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

萃香

「それじゃあ…“泣き上戸の人”で！」

タモリ

「泣き上戸ですか？」

萃香

「あたしや見たことないんでね。そんな奴いるのかと思つてさあ…」

タモリ

「では“泣き上戸の人”スイツチオン！」

（

萃香

「あれ！？3人！！」

タモリ

「いますね～…！」

萃香

「そいつらとは飲みにくいだろ？ね～」

タモリ

「いやまあ…飲んでどうなるかはわからないものですからねえ」

（

一曰CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下せー!」

『えーーー』

萃香

「では昔からの旧友、八雲紫を呼びますーーー!」

『おおーーー!』

タモリ

「ついに来ますか~大妖怪!」

ADさんがあつがつた電話を萃香に渡す

萃香

「もしもし?」

紫

「もしもし?」

萃香

「何してんの?」

紫

「家で見てたわ。まったくもつ、あの流星群あんたが黒幕だったの?  
?」

萃香

「まあいいじゃないか。それじゃタモリさん代わるから

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

紫

「どうも初めまして」

タモリ

「どうも、こんにちは～。明日は大丈夫ですか？」

紫

「ええ大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

紫

「いいとも！」

タモリ

「はい、お待ちしています！」

## 第一回・伊吹萃香（後書き）

第一回・伊吹萃香編、いかがでしたか？

萃香の前が勇儀で、勇儀は腕力の話でしたからお酒の話にしようと  
思つて書いたらこんな形になりました。

萃香は相手が死ないとわかつたら、文字通りつぶれても飲ますで  
しうね。

皆さんには絶対やらな「よ」…！

次回は紫、その次はkameさんのリクエストで阿求さんにします  
ね。

転生しつづける阿求さんと紫さんは長年の付き合いありますし。  
明日も見てくれるかな？

第一十一回・八雲紫

（

タモリ

「はい、こんにちは～」

『こんにちわ～』

タモリ

「今日はスキマ妖怪だそうですね」

『そ～ですね～！』

タモリ

「いろんなとこワープするそ～です…いいですね～」

『そ～ですね～！』

タモリ

「世界旅行簡単に出来ますからね～」

『そ～ですね～！』

タモリ

「彼女なら世界旅行も小旅行になるんだうつなあ…」

タモリ

「彼女なら世界旅行も小旅行になるんだうつなあ…」

「では登場していただきましょ、昨日の伊吹萃香さんの紹介で初登場、八雲紫さんです！どうぞ～」

拍手と共に紫がスキマを開けて登場！

紫

「ふふ、どうも初めまして  
傘をさしつつ紫が登場！！

『おお～！！』

タモリ

「また一風変わった登場ですねえ！」

紫

「これが私らしいと思つてね

タモリ

「お、それは？」

紫

「神奈川県鎌倉市、八雲神社で7月中旬の土・日・月曜に行われる  
八雲神社例大祭のポスターよ」

タモリ

「ほ～、あるんですねえ八雲の祭り」

紫

「町内じゅうで行われる大々的な祭りよ。4基の神輿が練り歩くわ

タモリ

「やつですか…貼つとこりやつだい…」

タモリ

「お花も届いてますね～ニシニさんに上海アリス幻樂団、伊吹萃香さん、博麗神社、白玉楼、八雲家、稗田阿求さんからも…」

紫

「ふふっ、ありがたいわねえ」

タモリ

「最近はどうですか？」

紫

「私としては順風満帆、何も不自由していないんだけどね」

タモリ

「自機、サポート、EXボス、全て制覇しましたしね」

紫

「いやまあ、私は正面切って何かやらかすより裏から手を回す方が好きなんだだけね」

タモリ

「確かにやつでしょうね～」

紫

「私としてはこの性格と能力、いい具合に合つてると思つわ

タモリ

「スキマ能力ですか…潜入にもつてこいですかね」

紫

「でもそのせいで謎多いキャラになつてゐるナビね」

タモリ

「ああ～、確かに」

紫

「だから外の世界の創作物だと、本物の私からかけ離れた人になつてるのよね」

タモリ

「いや、それは他のキャラもそつでしょ？」

紫

「確かにそつなんだけど、私ほど振れ幅大きいのもいないと思つわよ？」

タモリ

「そつなんですか？」

紫

「あるときは幼児体型、あるときはナイスバディの大人的女性、またあるときは急け者…」

タモリ

「安定しませんね～」

紫

「あの魔女の妹なみのイジられつぶつよーー。」

タモリ

「謎多いですからね～。冬眠するし、ビリニーカわからない」

紫

「もう少し謎を明かしてみようかしら」

タモリ

「といつとー。」

紫

「血伝を書くとかじつがじりっ。」

タモリ

「おお～、それいいですね」

紫

「私の出生から今までを書くの」

タモリ

「うわ……」

紫

「幻想郷誕生から私が関わった様々な異変や出来事を書くのーーこれなら私への誤解も拭えるーー！」

タモリ

「え、それって…書きれます？」

紫

「……やっぱ無理そづね。書くスピードが追い付きやうこないわ」

タモリ

「相当な量ありますからね…」

紫

「……タモリさん、紳士として歳には触れないで」  
自分で言つときながら少しへこむ紫でした。

一曰CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

紫

「どうしようかしらね?」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか?」

紫

「それじゃあ……外では常に日傘をさしてゐる人”でお願いします

タモリ

「では“外では常に日傘をさしてゐる人”スイッチオン!」

}

紫

- 0 人か : -

タモリ

一 夏真っ盛りならいたかもしけれませんけどね」

紫

さすがに秋に変わりつつあるからね」「

一  
日  
C  
M

タモリ

続いてはお友達紹介して下さい！」

え！

紫

「では稗田阿求を呼びます！！」

『おめでた！』

タモリ

「あの方ですか？」

紫

「昔からの付き合いにありますからね」

ADさんがつながった電話を紫に渡す

紫

「もしもし?」

阿求

「もしもし?」

紫

「今何してるの?」

阿求

「執筆のかたわら見てました。」

紫

「あー、ありがと。それじゃタモリさんに代わるから  
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

阿求

「どうも初めまして」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか?」

阿求

「はい、大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな?」

阿求

「いいとも~!~!~!~!~!

タモリ

「はい、お待ちしています!」

)

## 第一十一回・八雲紫（後書き）

第二十一回・八雲紫編いかがでしたか？

紫ほど謎多いキャラいないでしょうね。彼女はホントどんな日常を送ってるんだろ？..

次回の阿求はむつと謎なんですね。求聞史紀持っていないんです。  
どうなることやら…明日も見てくれるかな？

## 第一十一回・稗田阿求

（

タモリ

「はい、ここんちま～」

『こんにちは～』

タモリ

「今日の方は見た物全て覚えるやうですね」

『そ～ですね！～』

タモリ

「テストの時役立つでしょ～」

『そ～ですね！～』

タモリ

「作者は逆に“大切なことから先に忘れる能力”を持つています」

タモリ

「では登場していただきましょ～、昨日の八雲紫さんの紹介で初登場、稗田阿求さんです～。どうぞ～」

（

拍手と共に阿求が登場！

阿求

「こんにちは。どうも初めまして」

『可愛い～！』

『阿求～！！』

阿求

「す」いですねえ、外の世界は…」

タモリ

「あ、それは？」

阿求

「はい、毎年8月1~6日に奈良県大和郡山市稗田町の売太神社めいたで行われている阿礼祭あれのポスターです」

タモリ

「ほつ…どんな祭りなんですか？」

阿求

「日本最古の歴史書、古事記の編纂をした稗田阿礼の遺徳を偲び、神事や舞、お神輿も出ます。1930年から行われて今年で82回を迎えました」

タモリ

「なんですか？」

阿求

「私もこんな方になりたいですわ」

タモリ

「そうですね！貼つとこてあゅうだいーー！」

タモリ

「お花も届いてますね～ニコニさん」上海アリス幻樂団、八雲家、人里一同、上白沢慧音さんからも！」

阿求

「ありがとウイザードますーー！」

タモリ

「よかつたですね～」

阿求

「同じ本数返す」とこじましちょう

タモリ

「ものす」に律儀ですねえ……」

タモリ

「最近はどうですか？」

阿求

「そうですねえ…あいかわらず執筆を続けてはいるのですが

タモリ

「幻想郷縁起ですね」

阿求

「いやあ…あの取材のときは大変ですよ。人によつては危ないし」

タモリ

「あ、そつなんですか？」

阿求

「たまに紫さんが手伝つこともあるんですが、出来る限り自分の手で取材するように心がけているんです。それで…」

タモリ

「ああ～、確かに危険な妖怪いますからねえ」

阿求

「風見幽香さんやフランデールさんに取材した時は大変でしたよ」

『ええ～！～』

タモリ

「ええ～？あの一人と…？」

阿求

「まあ、幽香さんの時は紫さんが、フランさんの時はパチュリーさんとレミコアさんが同席していたんですけどね」

タモリ

「それで、どうでした？」

阿求

「フランさんは常識があつて無事に済んだんですが、幽香さんはか

なり緊張しましたね

タモリ

「そうでしょうね…」

阿求

「百戦錬磨の賜物とでもいうのでしょうか、あの眼光と氣迫が凄くて…」

タモリ

「そうでしょうね~」

阿求

「それこそ下手なこと言つたら食虫植物の餌にされそうですからね。冷や汗が溢れるほど流れで…」

タモリ

「お疲れさまでした」

阿求

「まあでも、最近現れた方々は友好的で取材が楽でしたね」

タモリ

「といいますと?」

阿求

「命蓮寺の方々とか…」

タモリ

「ああ~、あの方たちは友好的でしょうね」

阿求

「快く引き受けた所でした。ただそこでちょっとした事件が…」

タモリ

「何があったのです？」

阿求

「命蓮寺で取材していたらすっかり遅くなりまして、その日は一泊お世話になつたんです」

タモリ

「まづ？」

阿求

「美味しい精進料理とお湯を頂いて、もう床に着こうとロウソクの火を消したときに…障子の向こうに青白い光が…」

タモリ

「うわ…」

阿求

「正直見たくなかったんで、布団に潜り込んで目を閉じていたら“カラーン、コロン”という下駄の音が廊下に響いて…」

タモリ

「まづまづ」

阿求

「その音がだんだん近づいて…もうダメと思つたときにふと、下駄

の音がフツと消えたんです

タモリ

「それで？」

阿求

「どうしたのかと思って、布団からゆっくり顔を出すと……そこには一つ皿のカラカサお化けが……！」

タモリ

「おお～！！小傘ちゃんに驚かされたんだ？彼女喜んでいたでしょ？驚いてくれたから」

阿求

「いえ、それが…。私、あまりの恐怖で反射的に彼女の顔に正拳を

タモリ

「ええ！？殴ったの！？」

阿求

「見事に鼻に入りましたね」

タモリ

「うわあ…小傘ちゃん泣いてたでしょ？」

阿求

「いえ、“殴るほど驚いてくれてうれしい”って笑つてました

タモリ

「大したプロ根性だなあ…」

一曰CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

阿求

「どうしようかしら?」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか?」

阿求

「それじゃあ…“元素記号をすべて暗記している人”でお願いします」

タモリ

「そうきますか…では“元素記号をすべて暗記している人”スイッチオン!」

(

阿求

「ああ、2人か…」

タモリ

「理系の大学生の方ですかね?」

阿求

「いらっしゃいましたか~。う~ん」

一田CM  
（

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え~...』

阿求

「では上白沢慧音さんを呼びますーーー。」

『ねや〜！』

タモリ

「の方ですか~」

阿求

「同じ歴史を書く者同士、親交があるんですね」

ADちゃんがつながった電話を阿求に渡す

阿求

「もしもしし~」

慧音

「もしもしし~」

阿求

「お久しぶりです。今何してましたか？」

慧音

「テストの採点のかたわら見てました」

阿求

「ありがとうございます。それじゃタモリさんに代わります  
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

慧音

「どうも初めまして」

タモリ

「どうもこちにちは～。明日は大丈夫ですか？」

慧音

「はい、大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

慧音

「いいとも～…！」

タモリ

「はい、お待ちしています！」

{

## 第一十一回・稗田阿求（後書き）

第二十一回、稗田阿求編いかがでしたか？

かなりこれは難産しました。原作の知識不足がモロに出ましたね。  
正午更新できずすいません

驚かされて顔に正拳を喰らわせたことが、実は私にはあります。相手は何と女の子！あの時はかなり気まずくなつたなあ…

次回は慧音先生です。明日も見てくれるかな？

第一二三回・上白沢慧音

（

タモリ

「はい、こんにちは～」

『こんにちわ～』

タモリ

「今日のゲストは歴史の先生です」

『そ～ですね～！』

タモリ

「歴史の授業…中学、高校以来ですかね？」

『そ～ですね～！』

タモリ

「いい国作りうの野田内閣！言つてみただけです」

『そ～ですね～！』

タモリ

「いい国作りうの野田内閣！言つてみただけです」

タモリ

（

「では登場していただきましょ~、昨日の稗田阿求さんの紹介で初登場、上白沢慧音さんです~♪」

（

拍手と共に慧音が登場！

慧音

「ここにちは。じつも初めてまして」

『慧音先生～～』

『わや～～』

慧音

「ど…どひむ。いや凄いな」

どつものよつた雰囲気には慣れていないからこそ

タモリ

「あ、それは？」

慧音

「ああ、群馬県は沼田市で毎年七月下旬に開催される白沢ふるわとい祭りのポスターです」

タモリ

「白沢といつ地名あるんですねえ」

慧音

「いえいえ、道の駅“白沢”で行われるのです。14台の神輿をはじめ、地酒や焼きまんじゅう、トマトなどの特産物提供、伝統芸能

の発表が主です

タモリ

「そうですか。點つといてちょうだい！」

タモリ

「お花も届いてますね」。NUNさんと上海アリス幻樂団、人里一同、稗田阿求さん、藤原妹紅さんからも！」

慧音

「ありがたいですね。いや氣を使つてくれなくとも良かつたの」

タモリ

「まあいいんじやないでしょうかね」

慧音

「ふむ。どうしたものか」

タモリ

「最近はどうですか？」

慧音

「うーん、歴史の授業は上手くいくかが心配なんですよねえ」

タモリ

「気になるところですね」

慧音

「まずどう興味を持たせるかが鍵ですよね。最近じゃ“歴史だけじゃ運命は変えられない”とか言つ子もこりますし

タモリ

「ほほ間違になく//コトヤマの影響でしおりね」

慧音

「否ー私は声を大にして言いたいーー歴史とはー未来を切り開くーつの道しるべになるー私はそう信じてこる」

タモリ

「おお…熱いですねえ」

慧音

「でなきや長ことと教師やひひなんて考えませんよ」

タモリ

「まあ確かに」

慧音

「だからたまにテストをして悪いと落ちてしまふよ…」

タモリ

「お疲れ様です。問題児でもいるんですか?」

慧音

「なんといつたらいいのかなあ…。根は真面目だけどなぜか珍回答を出すんですよね」

タモリ

「ああー、なるほど」

慧音

「どうしたものか…」

タモリ

「最近じやあテレビ番組でテストやらせてみると、もの凄い珍回答返してくる人いますからねえ」

慧音

「嘆かわしいですねえ… 一度私の手で育て上げてみたいものです」

タモリ

「慧音さん…が…そしたら…頭の形変わつたりしません?」

慧音

「いやいや…そこまでスバルタではないぞ?」

タモリ

「まあでも、最近じや戦国武将に興味を持つ人多いですしね」

慧音

「俗に言つて歴女つてやつですね。嬉しいです」

タモリ

「そうでしょうね~」

慧音

「ただ、その人の好きな英雄のみ見ていく気がするんですよね」

タモリ

「とこども?」

慧音

「歴史には多くの人々が影響し合って紡ぎあげた物。そこには多くの人々のドラマがある。そこを理解してほしい」

タモリ

「確かに…」

慧音

「歴史にはきちんと“なぜ起きたか”という理由があるんです。それを理解すれば、世の流れがわかり人生の道を開く力が気になると思つんですがね」

タモリ

「すごいですねえ…」

慧音

「けども、寺子屋で教えるのはたいがいが子供。どうしたものか…」

タモリ

「切実な悩みですねえ」

慧音

「衣装を変えてみるかな?」

タモリ

「といいますと?」

慧音

「平安時代の授業では十一単を着るとか…」

タモリ

「無理があるでしょ！…」

（  
一日CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

慧音

「さて、どうしようか？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

慧音

「それでは…“旧作から最新の神靈廟まで東方のゲームを全て持っている人”でお願いします」

タモリ

「えっ、何故？」

慧音

「東方の歴史と共に歩んだ人というわけです」

タモリ

「そうしますか…では“旧作から最新の神靈廟まで東方のゲームを

全て持っている人”スイッチオン！”

(

慧音

「おお、2人か…！」

タモリ

「やはり根強い人気ですね～」

慧音

「いらっしゃいましたか…」

タモリ

「…あの、（歴史を）食べないで下さいよ？」

慧音

「ええまあ、もう少いん

（  
一  
旦  
C  
M  
）

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え～…』

慧音

「では藤原妹紅を呼びます…！」

『おお～！』

タモリ

「ついに来ますか蓬萊人！！」

ADさんがつながった電話を慧音に渡す

慧音

「もしもし？」

妹紅  
「もしもし？」

慧音

「今何してた？」

妹紅

「寺子屋で生徒のみんなと共に見てたよ」

慧音

「ありがとうございます。それじゃタモリさんに代わるかひい  
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

妹紅

「どうも初めまして」

タモリ

『おお～！』

「どうも、こんにちは。明日は大丈夫ですか？」

妹紅

「はい、大丈夫です」

タモリ

「あ、明日来てくれるかな？」

タモリ

1

## 第一二三回・上白沢慧音（後書き）

第一二三回、上白沢慧音編いかがでしたか？

慧音先生はすごい楽だった！いやあ、私の歴史の先生の台詞をアレンジして書いたらすぐできました！

慧音先生は長年教師やつてるくらいだから、おそらく熱い先生だろうと考えてこうしました。頭突き怖い…

次回は藤原妹紅です！明日も見てくれるかな？

第一十四回・藤原妹紅

（

タモリ

「はい、こんにちは～」

『こんにちは～！～』

タモリ

「今日は不死鳥をモ<sub>デ</sub>ルにした人ですね」

『そ～ですね！～』

タモリ

「背中に火の翼持つてますね」

『そ～ですね！～』

タモリ

「懐かしいなあ、手塚先生の火の鳥…小さい頃読んだなあ

初登場、藤原妹紅さんです～ど～ぞ～」

（

拍手と共に妹紅が登場！

妹紅

「どうも、初めまして」

『妹紅』！！』

『綺麗』！！』

妹紅

「す」「いな……私が人の時からはや千年、人とは賑やかになったものよ」

タモリ

「貴祿のあるセリフですねえ……」

妹紅

「なら私も少し羽目を外そつか？」

妹紅が力を込めるとい、背中に燃える炎の翼……

『おお～！』

タモリ

「ちょっとちよっと……！」

妹紅

「さて、これくらいにしどきましょうか  
すぐに翼は一瞬で消えた……

タモリ

「あ～びっくりした！あ、それは？」

妹紅

「例年、福井県で毎年8月1日から8月3日の3日間にかけて行われている福井フェニックスまつりのポスターよ」

タモリ

「なんか凄そうな祭りですねえ…」

妹紅

「戦災、震災、水害、雪害など多くの苦難を乗り越えてきた福井市を不死鳥、つまりフェニックスに例えているのです」

タモリ

「それはいいねえ」

妹紅

「花火によぞこい、民踊にマーチング…すばく豪華なお祭りです！」

タモリ

「すごいですねえ…貼つといてちょうどいい！」

タモリ

「お花も届いてますね～。NUNさんと上海アリス幻樂団、人里一同、上白沢慧音さん、蓬萊山輝夜さんからも～」

妹紅

「ありがたいね…って輝夜！？どうゆうひことー？」

タモリ

「意外ですねえ…。これはまた綺麗なコリの花

妹紅

「何があるに違いない…」

つかつかと花に寄る妹紅

妹紅

「きつと何か…」

花に手をかけたその瞬間…！

ビヨン…！

仕込まれた人形がバネの力で飛び出してきた…！

だが妹紅、これは読んでいたのか即座に避けた…！

タモリ

「おおーーー！」

妹紅

「全く輝夜め…こんなことだらうと思つたよーーーやる」とが子供じみているんだから…」

タモリ

「長年戦っているだけありますね

妹紅

「千年以上戦つてればこんなの読める…」  
そういう、妹紅がバネに触れた瞬間…！

バチイイツ…！

妹紅

「痛つたあ！…あの野郎…バネに電流流してやがる…」

タモリ

「…時とともに進歩してますねえ」

妹紅

「むきー！…今夜はただじやおかない！…首を洗つて待つていろ…！」

タモリ

「ははは…まあ落ち着いて。最近はまだつです？」

妹紅

「やうねえ…まあ相変わらず輝夜と殺り合つてるわけなんだけど」

タモリ

「怖いな…」

妹紅

「毎日の恒例行事ね」

タモリ

「そうですか…」

妹紅

「昔からやつてゐる」とと云つた。それへりこねえ…」

タモリ

「あ、そなんですか？」

妹紅

「まず家が竹林だからねえ……人があんまり寄らないのよ。会う人が限定されるわけ」

タモリ

「あ～、なるほど……」

妹紅

「だから一人でやることが多くなるのよねえ……。料理とか、陶芸とか……」

タモリ

「結構多趣味ですねえ」

妹紅

「時間は限りなくあるからねえ、いろいろやったわ……おかげで色々な事を自分一人でやれるけどね」

タモリ

「へえ～」

妹紅

「竹林で暮らしてるとそんなものよ？あるのはこの炎の力だけだし。竹林で暮らし始めた時は大変だったわ……」

タモリ

「そなんですか？」

妹紅

「まあ元は貴族のはしぐれでね、最初はろくにご飯も炊けずに苦労したわ…水多すぎておかゆみたいになつたり、途中でふた開けて硬くなつたり」

タモリ

「あ〜、なるほど…」

妹紅

「それに、自然のままの竹林に住むわけだから竹との戦いがね」

タモリ

「竹との戦い?」

妹紅

「いやまあ、竹を切りはらつて家を建てたんですけど…」

タモリ

「そんなことしたの!?」

妹紅

「炎使えば竹をはらうのは簡単だつたし、身に付いた妖力で力仕事も何とかなつたのよ。あの輝夜も金閣寺の一枚天井撃つてくるぐらいだし」

タモリ

「そうなんですか…」

妹紅

「で、いざ住んでから数カ月後かなあ?夜、寝てたら小さく“ミシ

ツ、ミシツ、って聞いれたのよ

タモリ

「まひまひ

妹紅

「最初は天井裏のネズミかなあと思つたんだけど、いくら探しでも  
ネズミはいなくて……数日してやつとわかつたのよね」

タモリ

「なんだつたんですね？」

妹紅

「最初、竹を伐採して火をつけて地ならししたんだけど、その時ま  
だ竹の子が残つていたらしくて……」

タモリ

「生えてきたんだ！？」

妹紅

「そうそう……いや私もびっくりしたわ……床をぶち抜いて生えてきた  
のよ……」

タモリ

「床を……？」

妹紅

「それに気が付かず踏みづけたあ……いやびっくりした！床に竹生え  
ることあるとはね」

タモリ

「そりゃ驚きますね……」

妹紅

「でもまあ、家できたらあとはなんとかなつたわね。燃料は竹炭でどうにかなつたし、食糧はタケノ口や山菜を中心にして……」

タモリ

「すういですねえ……」

妹紅

「そのうち囲炉裏やかまど作つて、炎を使つていろいろやつたわね……燻製作つたりとか、道具もいろいろ……食器とか、ナベや鎌とかも作つたり」

タモリ

「器用ですねえ？」

妹紅

「そのうち慧音がやつてきて、いろいろあつたなあ……。寺子屋作つたり……」

タモリ

「作ったのー?」

妹紅

「なんせ資金不足でさあ……。出来る限り私と慧音で作ったわ。黒板とか窓ガラスとか」

タモリ

「すうじい自給自足ですねえ……」

妹紅

「そのへんの知識と技術ならD A S H 村に負けないと想つよ?」

タモリ

「知ってるんだ!/?」

妹紅

「見るたび昔を思い出しちゃねえ……」

タモリ

「千年を超える思い出と経験ですからねえ……。本出したら売れるかも」

一曰CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持つていて、一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

妹紅

「さて、どうしよう?」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか?」

妹紅

「それでは……“ガス式の炊飯器がある人”でお願いします」

タモリ

「えつ、ガス式？電気炊飯器ができる前の？」

妹紅

「そう、ガスの火で炊くやつ。まだいるかな～と思って」

タモリ

「そうきますか…では“ガス式の炊飯器がある人”スイッチオ  
ン！」

（

妹紅

「ああ、0人か…！」

タモリ

「さすがにいないか～」

妹紅

「最近じや煮焼きも電気に変わつてきているからねえ…時代の流れ  
かな」

（

一日CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え～！…』

妹紅

「じゃあ…呼びたくはないけど蓬萊山輝夜を呼びます…！」

『おお～！！』

タモリ

「月のお姫様ですか…でもなぜ？」

妹紅  
「まあいろいろあってね」

ADさんがつながった電話を妹紅に渡す

妹紅

「もしもし？」

輝夜

「もしもし？」

妹紅

「今何してた？」

輝夜

「あなたがシビれてる間抜けな姿を見ていたわ

妹紅

「そつかい…」

既にこめかみに血管が浮き出ている妹紅

妹紅

「…まあいいわ、それじゃタモリさんに代わるから  
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

輝夜

「どうも初めまして」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか?」

輝夜

「ええ、大丈夫よ」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな?」

輝夜

「いいとも~!~」

タモリ

「はい、お待ちしています!」

)

## 第一十四回・藤原妹紅（後書き）

第二十五回目、藤原妹紅編いかがでしたか？

彼女は自給自足の知識が相当あるだろうとの考えでこうなりました。  
それこそ本家DASH村に勝るとも劣らないほどと思います。

それこそ火の力で料理から鍛冶、陶芸まで何でもこなすのではない  
かなあ？

次回は蓬莱山輝夜です。明日も見てくれるかな？

追伸

今夜7時、この作品で何かが起ころる?  
ネタばれ発言は止めてくださいね

番外編・上白沢慧音（獣人版）

（

タモリ

「はい、こんばんは～」

『こんばんは～！～』

タモリ

「今日はなんと夜の特別生放送です」

『そ～ですね！～』

タモリ

「この作品初の一回にわたる登場です」

『そ～ですね！～』

タモリ

「な～んで一回になつたんだか？はい、作者の責任ですね」

タモリ

「では登場していただきましょ～、今宵の夜にふさわしいワーハク  
タク～一回田の登場、上白沢慧音さんです～ビツビツ～」

（

拍手と共に慧音が登場！

慧音

「ど「も」そばんは……」

『慧音先生……』

『角かわいいく……』

慧音

「いいねーこの感じ……」

若干ハイになつてゐる半獣姿の慧音先生登場！緑の髪に一本の角が月光を受けて輝く……

タモリ

「この作品初の一回田の登場ですねえ……」

慧音

「まさか昨日出て、次の日の夜にまた出るとはね

タモリ

「いやほんと驚いたよ……」

慧音

「実は、今晚の2011年9月1~2日は満月なんですよね

タモリ

「それで番外編といつ」とですか？」

慧音

「しかも、今日は旧暦の8月15日、秋の十五夜にあたるんですよ

ね

タモリ

「そうなんですか！？」

慧音

「十五夜の晩に満月になるのは実に6年ぶりだそうです。それでまあ、私がこのような形で出演することになりました」

タモリ

「それでですか…まさに絶好の日ですね」

慧音

「“今宵の月は私の為にある…”って感じですかね」

タモリ

「なんか少しハイになつてますね！？」

慧音

「今は獣人ですから」

タモリ

「お、それは？」

慧音

「中国の北京市豊台区盧溝橋で今晚行われている中秋廟会のポスターです！」

タモリ

「月のお祭りですか？」

慧音

「中国では中秋節は伝統的な祭りで、丸い月は中国で“团圆”つまり家族全員が漏れずに集まることを意味するからです」

タモリ

「そつなんですか！」

慧音

「盧溝橋では雑技觀賞などの伝統的な民俗ショウがあり、二万個を超える色とりどりの提灯で飾られます！」

タモリ

「そつですか…貼つとこてちゅうだい！」

タモリ

「今日は…お花はありませんね。番外編ですし」

慧音

「まあその方がいいですよ。私としても心苦しいですし」

タモリ

「それにしても…獣人姿を見るのは初めてですね」

慧音

「…」の時のみ歴史を創る」とができるんですね

タモリ

「そうですね」

慧音

「この能力で東方テレフォンショッキング初の一回田登場といつ歴史を作ったなんですがね」

タモリ

「そりなんですかーー？」

慧音

「いやほんと、まさか実現するとは…」

タモリ

「良かったですね…。どんな気分なんですか？満月のみ獣人というのには？」

慧音

「いやまあ、確かに少し不便かな。日常ではどうとこい」とはないが、異変の時に本来の力を發揮できないとは情けない…」

タモリ

「なるほど…」

慧音

「それに、紛らわしいんですね」

タモリ

「といいますと？」

慧音

「獣人のイメージからか、“満月になると歴史を食つ”と思つている人が多いんですよね…。作者も昔そうでしたが」

タモリ

「ああ～、確かに」

慧音

「“今夜を無かつたことにしてやる…”は人間の時のセリフですか  
らね！」

タモリ

「獣人のときに言つても違和感ありませんからねえ…」

慧音

「あとは…やはりなんといつても可憐さが減つていてる気がする」

タモリ

「あ、やはり気になるんですか？」

慧音

「そりゃまあ…女の唄きぬ歎みと聞いてますか」

タモリ

「一時期ひどかったですからねえ…」

慧音

「まったくですよ。せつかく可愛さアピールで角にリボン結んだの  
に」

タモリ

「まあまあ、落ち着いて…」

慧音

「時代の流れからするこ、リボンよりシュシュのまつがいいかなあ？」

タモリ

「さらっと入れてきますねえ！？」

慧音

「いいんじやないですか？“ロングホーンとシュシュ”」

タモリ

「ストップ！—それ以上やるとこの小説が無かつたことになられるから！」

慧音

「冗談ですって。角があつて人気のあるキャラいないかなあ？」

タモリ

「えーっと……バッファローマンとか？」

慧音

「可愛くないでしょ？—私、ハリケーン＝キサー出来ないし！」

タモリ

「まあ、まず角のある女性キャラ、自体少ないかと…」

慧音

「じゃあ、この“満月のみ獣人になる”ことを生かして売り出そつかな？」

タモリ

「といいますと？」

慧音

「夜の異変を私が解決する！」

タモリ

「え？ でも満月でなければ……」

慧音

「ええ、 獣人じゃない。だからペアを組むんです」

タモリ

「誰と？」

慧音

「鈴仙と……」

タモリ

「狂氣の瞳で獣人に！？」

慧音

「それなら私をいつでも獣人へ変身させられるんじゃないかなあ……」

タモリ

「密かに思つ自機への夢ですか……」

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

慧音

「さて、どうしようか?」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか?」

慧音

「それでは…“東方永夜抄で妹紅のラストワード、フェニックス再誕を打ち負かした人”でお願いします」

タモリ

「えつ、何故?」

慧音

「妹紅と戦ったのは肝試しの時。それこそ、その人は筋金入りの肝を持つた人でしょう?」

タモリ

「そうきますか…では“東方永夜抄で妹紅のラストワード、フェニックス再誕を打ち負かした人”スイッチオン!」

（

慧音

「おお、1人…！」

タモリ

「すごいな！おお、あの人だ！」

手を上げる一人の男性を指す

慧音

「大した度胸だなあ…いや、恐れ入ったよ」

ADさんがストラップを渡す

タモリ

「いやあ…あつといつ間の番外編でしたね」

慧音

「そうですねえ…」

タモリ

「それでは、また明日の正午にお会いしましょう。明日も見てくれるかな？」

『いいとも～…』

番外編・上白沢慧音（獣人版）（後書き）

番外編・上白沢慧音獣人バージョン、いかがでしたか？

「慧音は満月にまた出したいな～」と思つていたら、なんと中秋の名月、十五夜の日に満月！！

何の運命のいたずらか、これは出さないといけないな～と思つて書きました。

本来ならこれは輝夜のポジションでしようけどね。お許しください。

東方夢月抄では幽々子が“中秋の名月つていうけど10年に9年は雨が降つて見られない”って言つてましたが…皆さんは見ることができましたか？

それでは皆さん、明日も見てくれるかな？

第一回・蓬莱山輝夜

（

タモリ

「はい、ここんちま～」

『ここんちま～』

タモリ

「昨日は十五夜でしたね～」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「満月でしたね～」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「私は見れませんでした。雲に隠れていで…」

「では登場していただきましょ～、昨日の藤原妹紅さんの紹介で初  
登場、蓬萊山輝夜さんです～びづか～」

（

拍手と共に輝夜が登場！

輝夜

「じいじもにじにむけま」

『輝夜～！～』

『髪キレイ～！～』

輝夜

「ふふ、じつもあつがと」

タモリ

「お、それは？」

輝夜

「7月下旬に静岡県富士市中央公園で行われる富士かぐや姫祭りのポスターです！」

タモリ

「あるんですね～！かぐや姫の祭り…」

輝夜

「踊りにパレード、かぐや姫コンテストとかもあるんです」

タモリ

「すいですねえ…貼つとこちゅうだい！」

タモリ

「お花も届いてますね。ＺＵＺＵさんに上海アリス幻樂団、永遠亭、  
藤原妹紅さんからも！」

輝夜

「ありがたいわね…え、妹紅！？」

タモリ

「意外ですねえ…。これはまた…菊の花ですか」

輝夜

「何があるんでしょうね  
つかつかと花に寄る輝夜

輝夜

「きつと…」

花に手をかけたその瞬間…！

ビヨン…！

仕込まれた人形がバネの力で飛び出してきた…！

だが輝夜、これは読んでいたのか即座に避けた…！

タモリ

「おおー…！」

輝夜

「昨日の復讐のつもりかしら？私と同じ手とは…甘いわね妹紅！」

出てきた人形を指さし笑う

輝夜

「そして私は人形には触れない…あなたの負けよ！妹紅！」

そう言つた次の瞬間！！

バアン！！

輝夜

「きやああーー！」

いきなり人形が破裂し、中に仕込まれていたロケット花火が輝夜に直撃！！

タモリ

「うわああーー？」

輝夜

「熱つーー水！水を早くーー！」

騒然となるスタジオ

タモリ

「だ、大丈夫ですかーー？」

輝夜

「大丈夫、この程度の傷ならすぐ治るわ…。妹紅め…ちょっとやり過ぎてないかしら？」

歯ぎしりしてその怒りを内に秘めようとする輝夜

タモリ

「す「い戦いだなあ……」

輝夜

「千年も続いたからねえ」

タモリ

「最近はどうですか?」

輝夜

「よぐぞそれを聞いてくれたわ!」

タモリ

「え? どうされたなんですか?」

輝夜

「実はねえ……昨日は妹紅から紹介されたじゃない? おかしいと思つたのよ……」

タモリ

「まあ確かに」

輝夜

「おかしいと思いつつ、まあいいかとなじがしひにしていたら昨日の晩、あの慧音が夜に出てたのよ! …」

タモリ

「ああ~、そうですね!」

輝夜

「おかしいでしょー? 昨日は十五夜の満月、とすれば出演するのは

私でしょー。昨日の用は私の為にあつたはず……。」

タモリ

「かぐや姫ですかねえ」

輝夜

「そのかぐや姫差し置いて慧音って何よーー！飛び入り出演してやうと思つて永遠亭を飛び出したら、案の定妹紅に見つかって……」

タモリ

「待ち伏せされてたんだ？」

輝夜

「そうよーー！きなりフジヤマヴォルケイノ撃つてくるつて鬼でしょー？それから弾幕で争つてたらいつの間にか慧音の収録終わつていたわけ」

タモリ

「妹紅さんの思惑通りに進んだわけですね」

輝夜

「全くよーー！弾幕で服燃えたしーー！今度会つたら五つの難題全て打ち込んでやるーー！」

タモリ

「まあまあ……最近はどうですか？」

輝夜

「さうねえ……いたつて平穏なんだけれど」

タモリ

「それは良かった」

輝夜

「でもさあ…私の話が最近薄れてる気がするのよ」

タモリ

「といつと?」

輝夜

「児童書のかぐや姫は知れ渡っているけど、原本のほうは知らない人多いのよね。児童書では五つの難題とかは省かれてるし」

タモリ

「確かに…」

輝夜

「作者なんて私のスペカから五つの難題の存在を知ったぐらいだからね」

タモリ

「作者はまず古文の興味が口クにないからねえ…」

輝夜

「もう少し古文の授業が面白くなつたらなあつて思つわ…。面白い話いっぱいあるのよ?」

タモリ

「難しい問題ですねえ…古文を面白くする方法ですか?」

輝夜

「現代の難題ね…私が古文の教師になるとか?」

タモリ

「使う教材は竹取物語でしょ!?」

輝夜

「あ、ダメ?」

タモリ

「ただの自己アピールじゃないですか?」

一曰CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持つていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

輝夜

「何いこつかしら?」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか?」

輝夜

「それでは…“私の五つの難題と、難題のHardとLunatic版のスペカ名をすべて暗記している人”でお願いします」

タモリ

「え、難題とHard版?つまり...」

輝夜

「たとえば龍の頸の玉と、ブリリアントドラゴンバレッタみたいなもんね」

タモリ

「そうきますか...では“私の五つの難題と、難題のHardと”Unatice版のスペカ名をすべて暗記している人”スイッチオン!」

（

輝夜

「ああ、3人か...！」

タモリ

「多いねえ！？」

輝夜

「結構覚えてるわねえ？いや意外ね」

（

一曰CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜！』

輝夜

「じゃあ…八意永琳を呼びます…！」

『  
おめ～！』

タモリ

一月の頭脳ですか？

A Dさんがつながった電話を輝夜に渡す

輝夜

永琳

卷之二

「今何してた？」

永琳

「茶の間で見てましたわ。顔大丈夫ですか?」

輝夜

「帰つたら薬ぢょうだい、それじやタモリさんに代わるから」受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

永琳

「どうも初めまして」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか?」

永琳

「はい、大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな?」

永琳

「いいともーーー!」

タモリ

「はい、お待ちしていますーーー!」

)

## 第一回・蓬莱山輝夜（後書き）

第二十五回、蓬莱山輝夜いかがでしたか？

昨日の夜は熾烈な争いが繰り広げられたでしょうね。絶好の機会を妹紅にとられた輝夜でした。

原本の竹取物語を読まれた方とかいらっしゃいますか？

私の高校時代の教師は源氏物語とか、恋の話を主に教材として使っていたので嫌だったんですね。

源氏物語って何かドロドロした話ですし…

次回は永琳です！明日も見てくれるかな？

第一十六回・八意永琳

（

タモリ

「はい、こんにちは～」

『こんにちは～』

タモリ

「今日はお医者さんだそ～うですね」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「出来る限り病院は行きたくないですよ～」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「消毒液とか嫌ですよ～ね」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「注射とか怖いですもんね」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「注射が気持ちいいとか言う人の気がしれない……いや本当に、妬ましい」

タモリ

「では登場していただきましょ~、昨日の蓬莱山輝夜さんの紹介で初登場、ハ意永琳さんです~!!~!!~」

（

拍手と共に輝夜が登場！

永琳

「どうも、初めまして」

おしどやかに永琳が歩いてくる…

『永琳』！！

『キレイ…！』

永琳

「あら、どうもありがとう」

優雅な笑みをこぼす。流石月の頭脳は伊達じゃない

タモリ

「お、それは？」

永琳

「9月中旬の夕月の前後に、奈良県広陵町の竹取公園芝生広場で行われるかぐや姫祭りのポスターです」

タモリ

「あれ、昨日の輝夜さんとのとは違いますね？」

永琳

「これは竹取物語で竹取翁と姫が住んでいた所がこの広陵町とされ  
ているため、ここに祭りが行われています」

タモリ

「なるほどねえ…貼つとこでちょうどいい！」

タモリ

「お花も届いてますね～。NUNOさんには上海アリス幻樂団、永遠亭、  
人里、綿円豊姫さん、綿円依姫さんからも～！」

永琳

「え、あの子たちから？ありがたいわね～」

タモリ

「といっかビツヤツって永琳さんが出演すること知ったんでしょうね  
！？」

永琳

「おそらく依姫が娘媽神を身に下ろしたのでしょうかね

タモリ

「それは一体？」

永琳

「娘媽神は「千里眼と順風耳」を従えた航海の神のことよ。たぶん

それで……

タモリ

「すごいですねえ……」

タモリ

「最近はどうですか?」

永琳

「そうねえ……医術と薬学で順風満帆に過いじているけど……」

タモリ

「幻想郷唯一の診療所ですからねえ」

永琳

「ただねえ……それが元で少し問題がねえ」

タモリ

「といいますと?」

永琳

「幻想郷の患者さんをほぼ全て私一人で診療しているでしょ?」

タモリ

「まあ確かに」

永琳

「だから鈴仙に指導や教育をする時間があまりなくてね……」

タモリ

「ああ～、なるほど……」

永琳

「本格的に薬の調合法とかを教えて、将来的には鈴仙が診療と処置を一手に担い、私は研究をして重大な事態などに鈴仙の補佐に回るのが理想ね」

タモリ

「え？でも永琳さんは不老不死だから今まで通りでも問題ないのでは？」

永琳

「いえいえ、腕のある薬師はいくらいてもいいでしょう？私だってなにがあるかわからないし、一人より二人いたほうが何かの時に安心なのよ」

タモリ

「なるほどねえ……」

永琳

「今はまだ助手、薬師と看護師の中間みたいなところだからね」

タモリ

「そうですねえ」

永琳

「他に考えていることは……外の世界の医療技術を出来る限り導入しようつってどこかしら？」

タモリ

「どういふことですか？」

永琳

「私の場合、診断は主に問診と血中の感覚で行ひ訳でしょ。実際に患部を見たり触れたりして…」

タモリ

「確かにやうですね」

永琳

「でもそれだとわかりづらい時もあるの」

タモリ

「それで、レントゲンなどを取り入れよう」とへ。

永琳

「そりゃ。他にもCTやMRI、緊急時の為に人工心肺など…」

タモリ

「なるほど…」

永琳

「今、それを河童に作らせるんだけどね…まだ少しかかりそうなのよ」

タモリ

「幅広いな河城にとりー!?」

永琳

「他にも動かない図書館とかに頼んではいるけどね」

タモリ

「あのひと出来るのー!?」

永琳

「魔法で代用品みたいなものできないかなあと思つてね」

タモリ

「にとりとパチュリーと永琳さんが組んだら最高の技術開発チーム  
でしきうね」

永琳

「あとはハ雲紫かな…でもあの人はそういうのに首突っ込まないで  
しきうし」

タモリ

「え、なぜ紫さん?」

永琳

「彼女、空間にスキマを開くじゃない?あれの応用でスキマを開いて  
患部のみ治療できないかなあと思つてね」

タモリ

「メスではなくスキマでー!?」

永琳

「彼女はスキマで空間を超えた異次元を通り遠くまであつという間  
に行ける。なら異次元への道を開けることで、皮膚を傷つけず直接  
患部を治療したら…」

タモリ

「なるほどねえ！？皮膚には傷跡が残らないわけですか」

永琳

「とくに女性は傷痕残したくないでしょ？」

タモリ

「すごい発想だなあ…」

一曰CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持つていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

永琳

「何いこつかしら？」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか？」

永琳

「それでは…“今まで一回も歯医者に行つたことがない人”でお願いします」

タモリ

「そうきますか…では“今まで一回も歯医者に行つたことがない人”スイッチオン！」

（

永琳 「ううん、2人か……！」

タモリ

「多いねえ！？」

永琳

「いやいいことですね。作者なんて歯並び悪いから歯周病が怖いのよ」

タモリ

「歯並び悪いと歯石がたまりやすいですからねえ」

（

一日CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『えへー……』

永琳

「じゃあ…鈴仙・優曇華院・イナバを呼びます！…！」

『おお～！！』

タモリ

「狂氣の瞳の鬼ですか…」

AIOさんがつながった電話を永琳に渡す

永琳 「もしもし？」

鈴仙 「もしもし師匠？」

永琳 「今何してた？」

鈴仙 「茶の間にて皆で見ていました。師匠… いざれ第一線を退くおつもりだったんですね…」

永琳 「そりはいつてないわよ。あなたが診療、私は研究がメインになるだけ。緊急の場合に私とあなたで対処する、それだけよ」

鈴仙 「ああ～」

永琳

「つまりあなたが第一線に来るつてこと。それじゃタモリさんに代わるか？」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

鈴仙

「どうも初めまして」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか?」

鈴仙

「はい、大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな?」

鈴仙

「いいとも~!!」

タモリ

「はい、お待ちしています!」

)

## 第二十六回・八意永琳（後書き）

第二十六回・八意永琳編いかがでしたか？

えーりんに限らず永夜抄メンバーは書きづらい…最近永夜抄買ったばかりですね。

しかし東方キャラ多いですねえ…神靈廟の新キャラも入れると軽く100人超えますからねえ。

いまはまだ大学始まつていないので、始まつたら毎日更新はたぶん無理だと思います。一日、三日に一回の更新となりそうです…

ですが、全キャラ書き上げたいと思います！応援よろしくお願ひいたします。

明日は鈴仙・優曇華院・イナバです。長い名前…明日も見てくれるかな？

第一一十七回・鈴仙・優曇華院・イナバ

（

タモリ

「はい、ひそむけられま～」

『ひんにまほ～』

タモリ

「今日はウサギさんですね」

『そ～ですね～！』

タモリ

「学校の飼育小屋とかにいましたね～」

『そ～ですね～！』

タモリ

「可憐いんですね～、いやほんと」

『そ～ですね～！』

タモリ

「でもほととじ六の中に隠れてるんですね～、さくへに姿を見た覚えがない…」

タモリ

「では登場していただきましょう、昨日の八意永琳さんの紹介で初登場、鈴仙・優曇華院・イナバさんです！どうぞ～」

（

拍手と共に鈴仙が登場！

鈴仙

「どうも初めまして」

鈴仙が登場…だが？

『鈴仙～！え～？』

タモリ

「あれ？それは…」

鈴仙

「いやあ…これしどかないとマズイかなあ…と」

何と鈴仙、狂氣の瞳防止のためサングラスをかけていた！！

タモリ

「どうだらう？狂うのかな？ちょっと外してもらいます？」

鈴仙

「ではほんの少しだけ」

そいつい、サングラスを外してタモリさんと眼が合つた瞬間…

クラッ…

鈴仙

「ちょっとー? 大丈夫ですか?」

いきなりタモリさんが倒れた!!

タモリ

「…う、ええ大丈夫です。少しめまいがしただけで」

鈴仙

「さすがに魔力や妖力のない人に狂気の瞳はきつかったか…」

てなわけで、サングラスをかけたまま収録開始!!

タモリ

「お、それは?」

鈴仙

「えー、八月初旬に鳥取県鳥取市内で行われる鳥取しゃんしゃん祭りのポスターです!」

タモリ

「しゃんしゃん祭り?」

鈴仙

「はい、しゃんしゃんと鳴る鈴の音と共に大勢の市民が因幡の傘踊りを披露するのです!」

タモリ

「そうですかー、貼つといってちょうどいい!」

タモリ

「お花も届いてますね~。ＺＵＺＵさんご上海アリス幻樂団、永遠亭、人里…あ、因幡てゐさんからも…」

鈴仙

「え？ てゐが？」

驚きつつ、飾られている花に近づく

鈴仙

「わ～、きれいな水仙…私の名に合わせたつもりかしら？…  
そういう、水仙に手をかけた瞬間！」

プチン！

何か糸が切れた感触が鈴仙の手に伝わる…！

鈴仙

「へ？」

異変を感じたその時！

ガアアン…！

落ちてきた金ダライが鈴仙の頭を直撃…！

『あはははは…』

鈴仙

「…痛つたあ～い…！」

タモリ

「ははは…大丈夫ですか？」

誰しも一度は見たであろう、伝説のコント仕掛けの再現に思わず笑う一同

鈴仙

「あの子どもだけ手間のかかるいたずら仕込んでるのよ…」

タモリ

「時代とともに巧妙になつてきてくれるのよしうねえ」

鈴仙

「まさか2011年のテレビ番組で金ダライが落ちてくるとは思わなかつたわ」

タモリ

「いや～、懐かしい物みせてもうございました。最近はどうですか？」

鈴仙

「まあ問題はないわね。一部を除いてだけど」

タモリ

「それつちゅつぱつ…」

鈴仙

「てゐよ…」

語尾に力をこめて即答する鈴仙

タモリ

「いたずらの的これがでているんだ?」

鈴仙

「最近それが妙に凝つてきてるのよねえ……」

タモリ

「たとえば?」

鈴仙

「どこをどうやったのか知らないけど……家の階段登ついたら、いきなりてぬがヒモを引いたのよ。そしたら……」

タモリ

「そしたら?」

鈴仙

「いきなり階段が坂になつたのよーー。」

タモリ

「ええー?」

鈴仙

「びっくりして顔から倒れて……おもいっきり顔を階段にこすりつけたわ」

タモリ

「うわあ……痛そつ」

鈴仙

「おうされる大根の気分を味わつたわよー。」

タモリ

「手が込んでるなあ……」

鈴仙

「他にも、私の椅子を座つただけですぐに壊れるより細工したりとか、私が使つている墨汁をイカ墨にすり替えるとか」

タモリ

「何それ！？」

鈴仙

「竹林を歩いていたらいきなり竹が私めがけて倒れてくるとか」

タモリ

「どんどん過激になっていますねえ」

鈴仙

「中でも最大のやつがこの前あつたわね

タモリ

「どんないたずらですか？」

鈴仙

「連日連夜のいたずらに疲れ果てた私は、お風呂からあがった後すぐには布団に倒れ込んだのよ。そしたら…」

タモリ

「そしたら？」

鈴仙

「布団の下の床板外されていたのよーあの子私の布団の真下に落と

し穴作っていたの！！」

『ええ～！』

鈴仙

「知らずに布団に倒れ込んだと同時に布団」と落っこちて、床下の木に顔面直撃したわよ！！」

タモリ

「うわあ…」

鈴仙

「完全に外の世界の影響ね。まったくもう…」

タモリ

「芸人でもやらないような規模の大きいいたずらですね」

鈴仙

「いやほんと止めてほしいですね。身が持たない…」

「  
一  
日  
C  
M

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

鈴仙

「どうしようかしら？」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか?」

鈴仙

「それでは…“落とし穴を作ったことがある人”でお願いします」

タモリ

「てゐさんへのメッセージですか?」

鈴仙

「そうよー落とし穴作るのはあの子くらいのものと教えてあげるわ

タモリ

「そうきますか…では“落とし穴を作ったことがある人”スイッチ  
オン!」

( )

鈴仙

「え、1人…!!…いるんだあの子以外にも…?」

ADさんがストラップを渡す

タモリ

「お、あの人だ!」

タモリさんが一人の男性を指さす

鈴仙

「うーん、複雑な気分だなあ」

—  
三  
C  
M

「続いてはお友達紹介して下さい。」

卷之三

金仙

ପ୍ରକାଶକ !

タモリ

ヤハラヒ来ますか

ADさんがつなかつた電話を鈴仙に渡す

金仙

てゐ  
「もしもし?」

鈴仙

一今何してた?」

て  
ゐ

「茶の間で鈴仙の面白い姿見てた」

鈴仙

「…帰つたら覚えときなさい。それじゃタモリさんご代わるから  
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

てゐ

「どうも初めまして」

タモリ

「どうせここにちは～。明日は大丈夫ですか？」

てゐ

「はい、大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

てゐ

「いいとも～！～」

タモリ

「はい、お待ちしています！」

（

## 第一十七回・鈴仙・優曇華院・イナバ（後書き）

第二十七回 鈴仙・優曇華院・イナバ編いかがですか？  
東方トップクラスのイジられキャラの鈴仙なんで、すこくイジつたらどうなるかと思いこうしました。

てゐなら外の世界のドッキリやコントのネタを急速に吸収していたずらに使いそうですね。

次回はその因幡てゐです！明日も見てくれるかな？

第一十八回・因幡てゐ

（

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは～！』

タモリ

「今日は因幡の白兎ですねえ」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「たしか昔話にもありましたね。因幡の白兎」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「ラストは兎が焚き火に飛び込むんでしたっけ？」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「あのてゐがそんな」とするとほ思えないんだけどねえ…」

タモリ

（

「では登場していただきましょ~、昨日の鈴仙・優曇華院・イナバさんの紹介で初登場、因幡てゐちゃんです!~じゅ~」

~

拍手と共にてゐが登場!

てゐ

「どうも初めまして~

『きわめ』

『てゐ~!~』

てゐ

「いやあ…外の世界は派手だねえ~

タモリ

「お、それは?~」

てゐ

「はい、五月下旬~いろいろに鳥取県鳥取市智頭街道商店街で行われる因幡の手作り祭りのポスターです~」

タモリ

「手作り祭り?~」

てゐ

「子供に手作りの良さを広める祭りですね。実際に手作りで色々なものを作る体験が出来るんです~」

タモリ

「そうですか～。貼つといてちょうどいいー！」

タモリ

「お花も届いてますね～。NUNさんと上海アリス幻樂團、永遠亭から！」

てゐ

「少ないな～、花あげた人には幸せくれてやるうと思つたのに

『ええ～！』

タモリ

「…え、それって？」

てゐ

「さういふと嘘つきましたねーー？」

タモリ

「さういふと嘘つきましたねーー？」

てゐ

「そりゃあこの道何百年の鬼よ～年季が違つて

タモリ

「あんまり嘘ついてると閻魔様に舌抜かれますよ～」

てゐ

「それは魔理沙！私じやない」

タモリ

「ああ確かに」

てゐ

「私の場合は

タモリ

「何ですか?」

てゐ

「皮を引ん剥かれる

タモリ

「覚悟してるんだ!-?」

てゐ

「まあ嘘だけどね

タモリ

「懲りない人だなあ……」

てゐ

「でもまあ流石に皮むかれるのは勘弁したいね

タモリ

「そうですねえ……最近はどうですか?」

てゐ

「いやまあ相変わらぬ……いたずらに隠しきをかけておつまます

タモリ

「それ頑張つちやダメでしょ！？」

てゐ

「これが私の生きがいなんでね」

タモリ

「昨日も鈴仙さんがその被害を報告していましたが」

てゐ

「あ～、言つてたねえ。他にもすここのあるよ？」「

タモリ

「へえ、どんな？」

てゐ

「オーソドックスなもので言えば……鈴仙が川で洗濯中に後ろから突き落とすとか」「

タモリ

「何してんのー？」「メーティアン？」「

てゐ

「薬と下剤をすり替えるとか」

タモリ

「ええ～！」

てゐ

「でも最近は出来る限り凝つたものにしてるね。趣向を変えて

タモリ

「たじえばっ。」

てゐ

「弓削川をどんどん返して戻えて驚かすとか」

タモリ

「手間のかかる」としますねえ…」

てゐ

「そうこやこの夏も派手にやつたねえ…」

タモリ

「まう、どんな？」

てゐ

「いや～、暑いからみんなで川に泳ぎに行へことになつて、水着に着替えて川に行つたんですよ」

タモリ

「いいですね～。あ…もしかしててゐちゃん、鈴仙さんの水着をどうぐわに紛れて脱がすとか？」

てゐ

「いやいや、鈴仙をなめちゃあいけないわ。それを警戒して紐じやなごビキニで脱げにくこよづて少し小さめのサイズの水着着てたの

よ

タモリ

「え？ それじゃあ…」

てゐ  
「力で脱がすのは無理ってことさ。川に入った時も、私が近づくた  
びに警戒してたし」

タモリ

「それじゃあ水着を脱がすイタズラは無理ですね」

てゐ

「チツチツチツ… 悪戯歴数百年の私をなめちゃあいけないさ」

タモリ

「どうしたんです?」

てゐ

「泳ぎに行く前日に、針で水着に小さい穴をいくつも開けといたの  
さーー！」

タモリ

「え？ それじゃあ…」

てゐ

「しかも开けといたのはブラの肩ひもやホック周辺、ショーツの腰  
骨の辺り… そう、そこが前と後ろの布をつなぐ重要な架け橋！」

タモリ

「それを着た鈴仙さんは…」

てゐ

「川で開放的になり、小さい水着ではしゃいで水着が伸縮。ついに水着がちぎれたのさー！」

タモリ

「ええ！？」

てゐ

「しかも川から出た瞬間にね。見事に上下ともちぎれて落ちた！」

タモリ

「うわあ… それじゃあ鈴仙さんは

てゐ

「見事に全裸だね！」

タモリ

「そのとき他に人は？」

てゐ

「いたねえ… 男も。上下がつづり見られたよー。それも大勢に」  
思い出し笑いをしてにやけるてゐ

タモリ

「うわあ…」

てゐ

「いやー、いいリアクションだつたなあ… 気付いてから2・3秒で一気に顔真っ赤になつて“いやああ”なんて言いつつその場に座り込んだね」

タモリ

「そりなるでしょ普通！－」

てゐ

「それで師匠からバスタオル借りてものすごい速さで永遠亭へ逃げ  
かえつていったねえ」

タモリ

「なんかすゞく可哀そうになつてきた…」

てゐ

「ちなみにあれから3日ほど高熱が出たつけな？相当ショックだつ  
たのかね？“もうお嫁にいけない”とか言つてたし」

タモリ

「ほじほどにしどきましょうね…」

（  
一日CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当する  
アンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

てゐ

「どうしようか？」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか？」

てゐ

「それでは……”泳ぎに行つて水着が脱げたことがある人”でお願いします」

タモリ

「そうきますか……では”泳ぎに行つて水着が脱げたことがある人”スイッチオン！」

（

てゐ

「お、一人……いるんだねえ！」

A Dさんがストラップを渡す

タモリ

「お、あの人だ！」

タモリさんが一人の女性を指さす

てゐ

「お！ありがとう……いい経験してるねえ！」

タモリ

「いや悪夢でしょ！」

（旦CM）

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さこー！」

『えへーーー』

てゐ

「じゃあ、円の兎、レイセンを呼びます！ー！」

『おお～！ー』

タモリ

「あの、円に紫さんと攻め込んだ時の？」

てゐ

「そうそう。兎としてのよしみでねえ」

ADちゃんがつながった電話をてゐに渡す

てゐ

「もしもし？」

レイセン

「もしもしーーー！」

てゐ

「おー、久しぶり。今何してた？」

レイセン

「あいかわらず訓練よ」

てゐ

「そりや大変だねえ…。それじゃタモリさん代わるから  
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

レイセン

「どうも初めてまして」

タモリ

「どうもひさにちは～。明日は大丈夫ですか?」

レイセン

「はい、大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな?」

レイセン

「いいとも～…」

タモリ

「はい、お待ちしてます!」

（

## 第一十八回・因幡てゐ（後書き）

第二十八回、因幡てゐ編いかがでしたか？

昨日に引き続きいたずら話第一弾です。鈴仙はほんとイジられてるなあ…

まあこれがでると鈴仙の関係かなあ?と思いまして。

次回は月の兎のレイセンです。明日も見てくれるかな?

## 第一十九回・レイセン

(

タモリ

「はい、こんにちは～」

『こんにちは～』

タモリ

「今日でウサギは最後ですねえ」

『そ～ですね～!』

タモリ

「東方でウサギは鈴仙、てゐ、レイセンの三人ですよね?」

『そ～ですね～!』

タモリ

「あれ?でも鈴仙の耳は付け耳じゃなかつたつけ?じゃああの人は何者!?人なの?兎なの?」

タモリ

「では登場していただきましょ～、昨日の因幡てゐちゃんの紹介で初登場、レイセンちゃんです～!どうぞ～」

(

拍手と共にレイセンが登場!

レイセン

「あの、どうも初めまして…」

緊張した面持ちでレイセン登場！

『可愛いーーー!』

『レイセンーーー!』

レイセン

「すうじいなあ…これが地上の外の世界」

タモリ

「お、それは?」

レイセン

「はい、2011年6月5日に静岡県浜松市で行われた、日本うさぎ祭りのポスターです」

タモリ

「あるんだそんなの?」

レイセン

「うさぎ好きの人たちによる祭りです。毎年行っているわけではありませんが、うさぎのコンテストなどを主に行っています」

タモリ

「そうですか~、貼つといてちょうどいい!」

タモリ

「お花も届いてますね。ＺＵＺＵさんと上海アリス幻樂団、月の都警護部隊、依姫様に豊姫様からもー。」

レイセン

「うわ～、ありがとうございますーーー。」

タモリ

「すゞこですねえ…最近は忙いりますか？」

レイセン

「田々稽古に励み、月の都の守護に全身全靈を傾けさせてひつ鍛えておりまーす」

タモリ

「……本当に?」

レイセン

「…はい」

だが少しばかり視線が泳いでいる…怪しい

タモリ

「そうですか…それで毎日銃剣術を?」

レイセン

「ええ、そうですね」

タモリ

「でも見た感じ田式の銃だよね?」

レイセン

「いや、あれ以上の物を渡してくれないんですよ。威力のある武器はもつと上方でないと扱えないんです」

タモリ

「まあ確かに、素粒子レベルで浄化する扇子なんて誰しも持ついたら危ないですよね」

レイセン

「そりゃそりゃですよ…それこそ私たちの場合弾丸を撃つたりもしませんし」

タモリ

「え、そうなんですか？」

レイセン

「やうですね。月面戦争の名残で銃剣術なんですけど…正直意味あるのかな～なんて」

タモリ

「確かに飛び道具が主流ですからねえ…銃剣術の師匠は依姫さんですか？」

レイセン

「ええまあ…ですが暇がなくあまり私達と会つ」とはありませんがね

タモリ

「へえ…」

レイセン

「でも前に地上の妖怪たちが攻め込んできたときには私たちじや歯が立たなかつたんで少し厳しくなつたみたいですね」

タモリ

「そりなんですか？」

レイセン

「前より依姫様が見に来る日が増えたそりですしそれまで」

タモリ

「そりですか……」

レイセン

「わうなると普段の何倍もあつこんですがね」

タモリ

「そりでしょうねえ、どれぐらこ来るのですか？」

レイセン

「週一回が週二回が増えたんです」

タモリ

「じゃあいいでしょ！ 依姫様いなこととはサボつていいんだからー。」

レイセン

「いえそんな」とは……

とかいこつつ、せっぱつ田が泳いでいるレイセン

タモリ

「でも月は凄いですねえ。ウサギが月と地上を行き来出来るんだか

「う

レイセン

「もうですねえ…でもまさか妖力を使えない人が月に来るとはなあ

タモリ

「なら訓練を頑張らないといけませんね」

レイセン

「まあ月の都には来れないからいいんですけどね」

タモリ

「守る『氣』ゼロじゃん！？」

一曰CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持つてีますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

レイセン

「どうしようが？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

レイセン

「それでは…“つせきを実際に飼つた”ことある人”でお願いします

タモリ

「そうぎますか…では、ついさきを実際に飼つたことある人”スイツ  
チオン!」

（

レイセン

「ああ3人…！」

タモリ

「結構いるんですねえ！」

（

一日CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『えへー！』

レイセン

「では私たちの主人、綿月姉妹の豊姫様をお呼びします！…」

『おお～！』

ADさんがつながった電話をレイセンに渡す

レイセン

「もしもし？」

豊姫

「 もじもじっへ 」

レイセン

「 どうでしたか…。それじゃタモリさんに代わりますから 」

豊姫

「 桃を食べつつあなたを見てたつてことね 」

レイセン

「 どうも初めまして。明日は大丈夫ですか? 」

タモリ

「 もじもじタモリです 」

豊姫

「 どうも初めまして 」

タモリ

「 どうも初めまして。明日は大丈夫ですか? 」

豊姫

「 ええ、大丈夫です 」

タモリ

「 じゃあ、明日来てくれるかな? 」

豊姫

「 ここともーーー 」

タモリ  
「はい、お待ちしています！」

## 第二十九回・レイセン（後書き）

第二十九回、レイセン編いかがでしたか？

儂月抄は全巻持っているんですがね…いや苦労しました。  
明日の豊姫、明後日の依姫も難産しそう…

明日も見てくれるかな？

第三十回・綿月豊姫

（

タモリ

「はい、こんにちは～」

『こんにちは～』

タモリ

「今日は月の人ですねえ」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「毎日桃食べてるのかなあ？」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「桃つて長寿にいいのかなあ？天子さんの帽子にもあるし」

「では登場していただきましょ～、昨日のレイセンちゃんの紹介で  
初登場、綿月豊姫様です～ビワ～」

（

拍手と共に豊姫が登場！

豊姫

「どうも初めまして」

『きれ～！～』

『豊姫様～！～』

豊姫

「地上とは賑やかなものねえ」

スタジオの雰囲気やスポットライトが気になつて仕方ない様子の豊姫

タモリ

「お、それは？」

豊姫

「月の都で、そちらの旧暦元旦に行われる月の都太陽祭のポスター  
です！」

タモリ

「月で太陽祭？」

豊姫

「太陽が不可欠なのは月も同じ。ですから年の最初に太陽に感謝を  
捧げるのです」

タモリ

「成程ねえ…貼つといてちょうどいい！」

タモリ

「お花も届いてますね～。ＺＵＺＵさんに上海アリス幻樂団、月の都警護部隊、依姫様、八意永琳さんからも！」

豊姫

「ありがたいわねえ～！！」

タモリ

「最近はまじうですか？」

豊姫

「私は月の都の監視と先導だからヒマなのよね～」

タモリ

「そうなんですか～」

豊姫

「それで書を読んだり桃食べたりしてるんだけど……ひとつも難でしてね」

タモリ

「でじょうねえ。月の都は平和なんですか？」

豊姫

「そうねえ……靈夢のおかげで全て丸く収まつたみたいでし～」

タモリ

「よかつたですねえ！」

豊姫

「でもおどりいたわ……まさか妖怪が月に来るとはね」

タモリ

「あ～、そうですねえ」

豊姫

「でも久しぶりに永琳様の手紙を読めて良かったです」

タモリ

「永林さんは師弟関係でしたっけ？」

豊姫

「ええ、依姫と共に教えを受けました」

タモリ

「どんな師匠ですか？」

豊姫

「教えてすゞく上手い人でしたねえ…でも」

タモリ

「でも？」

豊姫

「あの人打ち込むと周りが見えない人なんですよねえ～」

タモリ

「そりなんですか？」

豊姫

「今はそうでもないですけど若い時はそりだつたなあ…」

タモリ

「どんな感じですか？」

豊姫

「教えてもらつていて、自分が教えたいたい話になるとこつまでも喋るんですよね」

タモリ

「あ～、なるほど…大学教授みたいな感じですか？」

豊姫

「特に理数系の話になると盛り上がるんですね～」

タモリ

「自分の好きな話なんでしょうね」

豊姫

「気づいたらいつの間にか口が暮れていったなんて事ザラにありますからね」

タモリ

「うわ、それ凄いなあ」

豊姫

「あの時正直きつかつたなあ…笑顔で喋るから、」Jの辺で止めときまじょう”とか言いづらいんですねえ」

タモリ

「なんか想像できますねえ」

豊姫

「輝夜さんが止めたんですがねえ… その人集中力が凄まじいんですよ。考え始めるとそれ以外のこと考えられなくなりますし」

タモリ

「へえ～」

豊姫

「人から聞いたんですけど、部屋にこもって研究していた永琳様を最近見ないなあと騒ぎがおきまして」

タモリ

「ほうほう

豊姫

「見に行つたら永琳様が机に突つ伏して寝てたんですね」

タモリ

「すごいなーまさに研究者ー！」

豊姫

「そして起きて言つた一言が…」

タモリ

「何だつたんです？」

豊姫

「え？ もう朝だつたのーー？」

タモリ

「時間の感覚わからなくなるんだ！？」

豊姫

「あれは真似できないなあ…」

（  
一日CM  
）

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持つていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

豊姫

「どうしようかしらね？」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか？」

豊姫

「それでは…“桃を週一以上のペースで食べる人”でお願いします」

タモリ

「そうきますか…では“桃を週一以上のペースで食べる人”スイッチオン！」

（

豊姫

「ああ0人…！」

タモリ

「なかなかいませんねえ…」

』

一曰CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下せこー！」

『えへへ！…』

豊姫

「では私の妹、依姫を呼びます！…！」

『おおへへ！』

Aのさんがつながった電話を豊姫に渡す

豊姫

「もしもし？」

依姫

「もしもし？」

豊姫

「どうもひさしひま。今何してた？」

依姫

「姉さんを見てたよ

豊姫

「そりゃ…。それじゃタモリさんに代わりますから、受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

依姫

「どうも初めまして」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

依姫

「ええ、大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

依姫

「いいともーーー！」

タモリ

「はい、お待ちしています！」

)

## 第三十回・綿月豊姫（後書き）

第三十回 綿月豊姫編いかがでしたか？

いやあ…完全にスランプですね。なかなか筆が進まない…

綿月姉妹は名は知れてるけど謎が多いですからね。

大幅に時間遅れてすいません。次回は依姫です。明日も見てくれるかな？

第三十一回・綿月依姫

(

タモリ

「はい、こんにちは～」

『こんにちは～』

タモリ

「今日の人は神を味方にする人ですねえ」

『そ～ですね！～』

タモリ

「神様が味方…いいですねえ」

『そ～ですね！～』

タモリ

「作者なら稔子様味方につけたいんですよ…実家が農家なんですよ。どうでもいいか！」

タモリ

「では登場していただきましょう、昨日の綿月豊姫様の紹介で初登場、綿月依姫様です！～」

(

拍手と共に依姫が登場！

依姫

「どうも初めまして」

『依姫様〜〜!!』

『かわいい〜〜!!』

依姫

「どうもありがとうございます」

少し照れ氣味に笑う依姫

タモリ

「お、それは？」

依姫

「月の都で、七月二十日に行われる月の都月面祭のポスターです！」

タモリ

「どんな祭りですか？」

依姫

「アポロ11号が月面着陸した時、月の都ではパニックになつたんですが、結局都には入られなかつたのでそれを祝う祭りです」

タモリ

「成程ねえ…貼つといてちょうどいい！」

タモリ

「お花も届いてますね。ＺＵＺＵさんに上海アリス幻樂団、月の都警護部隊、豊姫様、八意永琳さんからも！」

依姫

「ありがたいわねえ～！！」

タモリ

「最近はどうですか？」

依姫

「月に妖怪が入り込んだ時を機に平穏そのものなんですよね」

タモリ

「そうですねえ」

依姫

「その時は驚いたなあ……特にあの巫女はすごかった！」

タモリ

「あ～、そうでしたねえ」

依姫

「撃つてくる弾幕全て斬ることになりましたしね」

タモリ

「すごい業物ですねえ、その刀……」

依姫

「誰が作ったかわからないんですけどねえ」

タモリ

「もしかして鉄も斬れたりして」

依姫

「それは無いでしょ、うー。」

タモリ

「それにしても、神をその身に下ろすってどんな感じなんですか?」

依姫

「そうねえ……神が私に乗り移るって感じね」

タモリ

「なんかイターフみたいですねえ、恐山の」

依姫

「いや口寄せと違いますよー!」

タモリ

「じゃあ指を噛んで血を出し、煙と共に神様が現れ……」

依姫

「その口寄せも違いますー私の身に神を下ろしますが、私の心や性格に影響しませんよ……」

タモリ

「そつなんですか?」

依姫

「まあ余りにも極端な性格だと多少影響しますけどね」

タモリ

「へえ…」

依姫

「あと複数の神を下ろすと心が少し不安定になるんですがね」

タモリ

「ああ～、確かに多重人格者みたいになるなんでしたね」

依姫

「靈夢がやつたように住吉三神を下ろすのならまだしも、全く関わりのない神同士や仲の悪い神同士だとかなり不安定に…」

タモリ

「どうなるんです？」

依姫

「性格がいろいろ変わったりとか、落ち着きがなくなったりとか

タモリ

「いきなり同居すればこざこざが起きるでしょうね」

依姫

「若い時は大変でしたよ。神を下ろしたはいいけど力を口クに貸してくれないとか」

タモリ

「ああ～」

依姫

「好き勝手に私の体操うつとするとか。それで我を忘了の私を永琳様が戻してくれたのよ。下ろした神を払つて」

タモリ

「神を払つたんだ！？」

依姫

「三日三晩の激鬪でしたよ」

タモリ

「もはやエクソシストの世界ですねえ…」

一曰CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持つていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

依姫

「どうしようかしらね？」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか？」

依姫

「それでは…“イタコさんの口寄せを実際に見たことある人”でお願いします」

タモリ

「そうきますか…では“イタロさんの口寄せを実際に見たことがある人”スイッチオン！」

（

依姫

「う～ん、0人か…！」

タモリ

「なかなかいませんねえ…有名ではありますが」

（

一日CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え～…』

依姫

「そうねえ…では攻め込んできた地上の民で私が面白こと思った十六夜咲夜を呼びます…！」

『おお～…』

ADさんがつながった電話を依姫に渡す

依姫

「もしもし？」

咲夜

「もしもし？お久しぶりですね」

依姫

「どうもこんにちは。今何してました？」

咲夜

「館の掃除がほぼ終わつたつてとこかしらね」

依姫

「そう…。それじゃタモリさんに代わりますから  
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

咲夜

「どうも初めまして」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

咲夜

「ええ、大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

咲夜

「いいとも～！～！」

タモリ

「はい、お待ちしていきます！」

）

## 第三十一回・綿月依姫（後書き）

第三十一回、綿月依姫編いかがでしたか？

儂月抄キャラは上手く書けなかつたなあ…いや残念。

次から取り返したいと思います。次回は完全で瀟洒なメイド！

さてどういう風に書こうか？瀟洒に書くか？面白おかしく書くのか？

お楽しみに！明日も見てくれるかな？

第三十一回・十六夜咲夜

（

タモリ

「はい、ひさしちゃ～」

『ひんにこま～』

タモリ

「今日はメイドさんですねえ」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「なんか欲しくなりますねえ」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「月を眺めつつ“咲夜、いる？”なんて言って紅茶のおかわりを…ダメだ、作者にはとても似合わない…」

タモリ

「それでは登場していただきましょ～、昨日の綿月依姫様から紹介で初登場、十六夜咲夜さんです～ど～ぞ～」

（

拍手と共に咲夜が登場！

『可愛い～！～』

『セベヤセ～ン！～』

咲夜

「ありがとうございます。どうも初めまして、紅魔館のメイド長をさせていただいております。十六夜咲夜と申します」

スカートを手で少し広げつつ礼をする咲夜。

タモリ

「おお… まだずいぶん瀟洒に来ましたねえ」

咲夜

「ふふ、どうも」

タモリ

「お、それは？」

咲夜

「はい、10月31日に紅魔館で行われるハロウィンパーティーのスターです」

タモリ

「吸血鬼の館でハロウインを～？」

咲夜

「まあお菓子と仮装がメインなんですけどね。いつもと違つ服装を楽しもうとこ～うお嬢様の企画なんです」

タモリ

「本物の妖怪ですから、弋が盛り上がるでしょうねえ…」

咲夜

「ちなみにお嬢様は趣向を変えて漆黒のドレスをお召しになりますわ」

タモリ

「おお～、正統派吸血鬼らしく？」

咲夜

「そうですね。黒の布地に紅のリボンをあしらつたものです。妹様はデザインを一新した長袖の紅のドレスに、黒のボタンで対照的な雰囲気を表しました」

タモリ

「凄そうですねえ…貼つとこてちゅうだい！」

タモリ

「お花も結構届いてますね～。ソシソさんに上海アリス幻樂団、紅魔館、妖精メイド一同からも…」

咲夜

「ありがたいですわ」

タモリ

「すごいですねえ…最近はびひですか？」

咲夜

「私は相変わらずメイドの仕事をこなす毎日ですね」

タモリ

「家事に掃除、あとは紅茶を淹れたり…。変わった紅茶を淹れてい  
るそうですね？青い紅茶とか」

咲夜

「お嬢様を楽しませるのもメイドの仕事ですわ」

タモリ

「へえ…」

咲夜

「他にも色が変わる紅茶とか作りましたね」

タモリ

「そりゃまた凄そうだな。どうやって作るのですか？」

咲夜

「赤と黄色の紅茶の比重を変えて出すのです。赤の紅茶の比重を軽  
くしておけば最初は赤色ですが、スプーンで混ぜることで橙色に変  
わるのです」

タモリ

「なるほどねえ…」

咲夜

「仕事でしたら、他にも侵入者の排除もありますわね」

タモリ

「魔理沙ですか？」

咲夜

「もはやあの盗み癖は治らないでしょうねえ……毎回時を止めてナイフ投げる身になつて欲しいわ」

タモリ

「ナイフ投げての時間停止ですか……初めて見た人は相当驚くでしょうね」

咲夜

「そうですか？」

タモリ

「作者なんて初プレイで見た時驚きのあまり絶叫しましたからね。リアルに二十歳過ぎた男が“うつわあ”なんて言つて」

咲夜

「あら、それはどうも」

タモリ

「あの普通に飛んできたナイフが、時間停止して一気に広がつていぐのは怖いですよ」

咲夜

「でもネタばれしてからは皆驚かなくなつたわねえ……」

タモリ

「まあいいじゃないですか、時止められるのはあなた一人ですし。それでヴィンテージワインも作れるじゃないですか」

咲夜

「ええまあ、この能力でメイド長を務めているのですが…そりそろ優秀な妖精メイドが欲しいわね」

タモリ

「え？ 妖精メイドならいくらでも…」

咲夜

「いや妖精だと仕事の能力にも限界あるのよ。一通りの仕事は出来ても一級品というわけじゃないの。仕方ないけどね」

タモリ

「あ～、なるほど。仕事覚えるにも限度があると」

咲夜

「三月精やチルノがいい例でしょ?」

タモリ

「わかりやすい解説ですねえ」

咲夜

「それでどうしたものかと…将来的には私に変わる妖精メイドが居たらなあと思いまして」

タモリ

「難しい話ですねえ！？あなたに代わるメイドか…」

咲夜

「ですから、霧の湖にいる大妖精を部下にしたいなあ…と

タモリ

「ええー?」

咲夜

「彼女ならあることは…と思いましてね。指導の仕方によればなんとか…」

タモリ

「いやいや、ならこいつを美鈴さんをメイド喰ら…」

咲夜

「それは無理」

タモリ

「あつぱり断言しましたねえ…」

咲夜

「難しいものねえ…いつも紫に式神の作り方でも習おうかしら?」

タモリ

「あなたならリアルにやつてのはれりで怖いですねえ…」

咲夜

「他に最近の話題と言えば…靈夢たちが神靈が出たのを鎮めたそ�ですね?」

タモリ

「ええそりですかね」

咲夜

「私もそれ出たかったわ」

タモリ

「ああなるほど…」

咲夜

「とはいって、私も少し改良が必要かと最近思っていますけどね」

タモリ

「改良？スペカのですか？」

咲夜

「スペカといつよつショットね。ほら、靈夢は札とホーミング弾。  
魔理沙はレーザー、早苗は広範囲のショットで妖夢は斬撃でしょうね  
？」

タモリ

「あなたにはナイフがあるでしょう…十六夜咲夜の代名詞といえ  
るほどのナイフが！」

咲夜

「いやそれだけだと押しのが弱いかなあと思いまして」

タモリ

「ここにきてのタイプ転向ですか！？」

咲夜

「いいと思いません？」

タモリ

「それで一体どんな?」

咲夜

「そうねえ…。紅魔異変での私のスペカらしく一定距離までは直線状に、そこから広がるように飛んでいくナイフとか」

タモリ

「何か使いづらそうですねえ」

咲夜

「でしたら、ナイフと共に私特製のストップウォッチを投げて、ストップウォッチに当たった弾や敵は動けなくなるとか」

タモリ

「おお、咲夜さんらしい。でもそれだとチートじゃないですか?」

咲夜

「難しいものねえ、ならスペカをアレンジしようかしら」

タモリ

「ほう、例えば?」

咲夜

「スペカ発動と同時に時が止まり、敵周辺をナイフが囮むとか」

タモリ

「何かカッコいいですねえ!..」

咲夜

「

「そして時は動き出す…と同時に敵はPと点に変わる」

タモリ

「うわあ…でも弾が残るのは嫌ですねえ」

咲夜

「なら時を消し飛ばしましょ。スペカ発動と共に弾は当らす私の背後に飛んでいき、スペカが消えたと同時に私の投げたナイフが敵を貫く！」

タモリ

「……あなたなら本気でやつそつで怖いなあ。もはや最強の部類じゃないですか」

咲夜

「いえ、お嬢様ほどでは…」

といいつつも、少し嬉しそうな咲夜さんでした

「  
一日CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

咲夜

「さて…何にしようかしら？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

咲夜

「それでは……6月10日、時の記念日が誕生日の人”にします」

タモリ

「では“6月10日、時の記念日が誕生日の人”スイッチオン！」

（

咲夜

「あ……1人！」

驚きつつA.D.さんからストラップを受け取る

タモリ

「あ、あの人だ！」

満面の笑みで手を上げる一人の女性を指す。

咲夜

「偶然あるものですねえ。ありがとうございます」

（旦CM）

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え～！～』

咲夜

「では、お嬢様の妹君であるフランドール・スカーレット様をお呼

びいたします

タモリ

「え！？大丈夫ですか？」

咲夜

「ええ、きちんと一般常識はありますし。今日私が出演すると聞いて、次は私に指名する様頼まれまして…」

タモリ

「なるほど…お姉さんや美鈴さんが出たから早く登場したかったんじゃないかな」

Aのわんがつながった電話を咲夜に渡す

咲夜

「もしもし、咲夜です」

フラン

「もしもし？私よ

咲夜

「どうもひこにちま。何それでいました？」

フラン

「咲夜を紅魔館のテレビで見てたわ。今から毎日起きたの」と冗談い  
したこと明日がわかつこからね

咲夜

「そうですか。ではタモリわんに代わりますね

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

フラン

「もしもし、フランドールです。初めましてー」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか?」

フラン

「大丈夫よー」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな?」

フラン

「いいともー!」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

（

## 第三十一回・十六夜咲夜（後書き）

第三十一回、十六夜咲夜編いかがでしたか？

大体は瀟洒っぽく、ところどころボケを入れて咲夜さんの雰囲気を  
出そうとしてみました。

瀟洒な従者って難しいですね… 小説だと特に雰囲気をビジュアル出してい  
いのか全く。

登場シーンでスカート広げつつ会釈なんて、原作ではやつてなかっ  
たでしょうが…まあ咲夜さんらしいのかな？

それから色が変わる紅茶の話ですが、そんなものがあるのか私は全  
く知りません。全て想像なので悪しからず。

次回はブランドールです。明日も見てくれるかな？

第二十二回・フランデール・スカーレット

（

タモリ

「はい、これにちがえ」

『こんなにちがへー！』

タモリ

「今日は吸血鬼ですねえ」

『そへですねー！』

タモリ

「なんでも壊せる吸血鬼ですねえ」

『そへですねー！』

タモリ

「破壊の皿をつかんで、さゆりとしどがーん」

『そへですねー！』

タモリ

「これで台風壊してくれないかなあ？でも台風はもともと皿がある  
し…どうなるんだろう？」

タモリ

「それでは登場していただきましょ、昨日の十六夜咲夜さんからの紹介で初登場、フランドール・スカーレットちやんです…ビッグ

』

拍手と共にフランが登場！

『可愛い～！～』

『フラン～！～』

フラン

「ふふ、どうもありがと」

七色の翼を輝かせつつフランが登場！！

フラン

「外の世界つてす”いね～にぎやかで、人間がこんなにもいっぱい

…

タモリ

「まあ貴方は咲夜さん、靈夢さん、魔理沙さんの三人ほどしか見てませんからねえ」

フラン

「じゃあ一つ派手にやつましょつか！“禁弾”スターボウ…  
瞬間、手のひらのスペカが輝き出す…！」

『あやああああ…』

タモリ

「ストップ！－！」でスペカ使っちゃダメ！！」  
即座に制止するタモリさん！

フラン

「え？ ダメ？ 盛り上がるかなーと思つて」

タモリ

「絶対ダメ！！スター・ボウブレイクなんて危なすぎるでしょ！」

フラン

「ちゃんと手加減して安全地帯のあるスペカ選んだんだけど」

タモリ

「安全地帯どいつも前に、普通の人間に撃たんで下さい……」

フラン

「でも魔理沙は……」

タモリ

「あれ普通の魔法使いね！！幻想郷の人間＝普通の人間と解釈しないでください！！人間は弾幕張れないし空飛べませんから……」

フラン

「わかつたわ……」

少し残念そうにスペカを解除しフラン着席

タモリ

「あ～びっくりした……。お、それは？」

フラン

「ああこれ？昨日咲夜が言つてた紅魔館ハロウインパーティの、紅魔館メンバーの写真入りポスターが出来たんで持つて来たわ」

タモリ

「おお～！！なんか黒い服が多いですねえ？」

フラン

「パチュリーは黒の魔女服、美鈴はキヨンシーのコスプレだからね」

タモリ

「なんか見覚えのあるような格好ですねえ！？咲夜さんは…これは何ですか？黒のマントに顔の傷？」

フラン

「ああそれ？フランケンシュタインよ。お姉さまのリクエストでそうなったの」

タモリ

「バラエティ豊かですねえ…貼つとこりひょうだい！」

タモリ

「お花も結構届いてますね～。ニコニコさんに上海アリス幻樂団、紅魔館、妖精メイド一同からも…」

フラン

「なんで靈夢と魔理沙はないのかしら？…すこし拗ねた感じのフラン

タモリ

「おや、りべお金がなかつたんでしょ、うな」

フラン

「……まあこいいか」

タモリ

(よかつた〜、機嫌損ねてはいなによつだ)

先ほどの未遂事件で少しフランを警戒してくるタモリ。無理もない…

タモリ

「最近はまだうですか?」

フラン

「せうねえ…あの紅魔異変で靈夢や魔理沙と会つてから、少しずつ外に出るようになってしまったのね」

タモリ

「へえ〜」

フラン

「でもなかなか出してくれないのよねえ、少し渋つてこむ感じ」

タモリ

「徐々に範囲を広げるつもりなんじょ、うな」

フラン

「私としては行きたい場所があるんだけどじょ、うな」

タモリ

「ほへ、どにですか？」

フラン

「人から聞いたんだけど、迷いの竹林と永遠亭という場所には死なない人達がいるそつね？」

タモリ

「ええまあ…。ってまさか、あの入達と遊ぶ氣で！？」

フラン

「無論、弾幕」じこでね」

タモリ

「凄まじい戦いになるでしょうな～」

フラン

「いいじやない。お姉さまから手加減が出来ないと言われる私でも、相手が死なないのなら…」

タモリ

「いやいや、あなたの場合周りに立てる損害も凄まじいですからね！」？」

フラン

「じゃあレーヴァテイン無しで」

タモリ

「ハンデ付けてもダメだつて！」

フラン

「難しい話ねえ」

タモリ

「でもまあ、外に出たがってるんですね」

「いやまあ、前までは地下にずっといても文句は無かつたんだけど、異変以来外にも興味を持つてね。別に自機とかになりたいわけじゃないけど」

タモリ

フラン

「でもたまにはお姉様みたく出演してみたいかな」とてね。いいじやない、実力はあるよ?」

タモリ

「それはもう折り紙付きの実力者でしょうね」

フラン

「知的なセリフ言えるよ？」

タモリ

「確かにフランスぐらいでしょうね。英語のセリフを言ったのは」

フ  
ラン

「でしょう？ どう考へてもチルノやお姉様よりはマシよ」

タモリ

「はははは…」

フラン

「だつてお姉様、能ある鷹は尻隠さずなんて言つたのよ?あれに比べれば雲泥の差よ」

タモリ

「まあまあ、落ち着いて…。でもまあ確かに原作ではあまりいい待遇ではないかもせんね」

フラン

「言えるわねえ…。この待遇改善をしたいのよ。吸血鬼なのにシンデレラみたいね」

タモリ

「まあいいじゃないですか。あなた自身にもテーマ曲にも人気ありますし、二次創作も多いし」

フラン

「そこにも不満あるのよね。二次創作だとなぜか私エロネタ多いのが腑に落ちない」

タモリ

「ありますねえ、腐るほど」

フラン

「私が襲われてエロシーン突入つてあります!/?全てを破壊するこの私が!?」

タモリ

「あはせ…」

フラン

「こっそ全ての同人誌を“あむひとじでじかーん”したりやおつかし  
り…」

タモリ

「それは勘弁してやつてください…色々とまずいから…」

フラン

「最後に不満あるとしたら…外の世界の野球かなあ?」

タモリ

「野球!…?それはまだどうして?」

フラン

「前に文々。新聞で読んだけど、千葉ロッテの神戸って選手の応援  
歌が私のこ・ノ・オーラン使つてこるやつね」

タモリ

「あ、やうやくしたねえ」

フラン

「ただ打てないのよねえ…」

タモリ

「あ〜、成程…。打率が約一割でしたっけ?」

フラン

「だからたまに代打で出るくらいなのよ。神戸がスタメンになつて

毎回応援歌を聞きたいものね…」

タモリ

「そうなると東方ファンも嬉しいんですがねえ」

フラン

「…そ私が試合に出ようかしら？代打なら何とかなると思つよ？」

タモリ

「…あなたが打つたら場外まで飛んでいくでしきけど、それは流石にまずいって！！」

一曰CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持つてีますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

フラン

「さて…何にしようかしら？」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか？」

フラン

「それでは…“実際に神戸選手の応援を見たことある人”にします

タモリ

「では“実際に神戸選手の応援を見たことある人”スイッチオン！」

（

フラン

「あ…2人！」

タモリ

「う～ん、惜しいですねえ」

フラン

「まあ本来はこのネタを100分のアンケートにしたくはないけどね」

（  
一日CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え～！…』

フラン

「では、動かない大図書館、パチュリー・ノーレッジを呼びます」

タモリ

「お、やはりそうしますか」

ADさんがつながった電話をフランに渡す

フラン

「もしもし、私は

パチュリー

「もしもし？妹様？」

フラン

「どうもこんにちは。何してた？」

パチュリー

「魔法であなたの様子を見ていたわ。まったくもう、ヒヤヒヤさせ  
るんだから」

フラン

「まあまあ、未遂だしいいじゃない。じゃあタモリさんに代わるか  
ら」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

パチュリー

「もしもし、パチュリーです」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

パチュリー

「ええ大丈夫よ」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

パチュリー

「いいとも～！」

タモリ

「はい、お待ちしてま～す」

（

## 第三十二回・フランデール・スカーレット（後書き）

第三十二回、フランデール・スカーレット編いかがでしたか？子供っぽい性格と知的なセリフから1～13歳くらいをイメージして書いてみました。なんか私のフランへの思いを書いた感じですね…

ちなみに私は九州の佐賀生まれ、応援するのはもちろんホークスなんです。

でも東方ファンとして神戸選手には活躍してほしいですね。あんないい応援なんだから毎試合聞きたいものです。

さて…ここで一つ申し訳ない事が。実は明日から後期の授業が開始となり毎日更新はまず無理になりました。  
ですが毎回正午更新になりますので、よければ正午に確認してみてください。

次はパチュリーです。次回も見てくれるかな？

第三十四回・パチュリー・ノーレッジ

（

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは～』

タモリ

「今日は魔女ですねえ」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「図書館で研究してる魔女ですね」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「よく眼鏡かけずに過ごせるもんですねえ、作者なんて東方を1時  
間程度やつただけで目がおかしくなるのに」

タモリ  
「それでは登場していただきましょ～、昨日のフランドール・スカラ  
ーレットちゃんからの紹介で初登場、パチュリー・ノーレッジさん  
です～どうぞ～」

拍手と共にパチュリーが登場！

『可愛い～～～！』

『パチュリー～～～！』

パチュリー

「どうも。すごく明るい所ねえ…」

外の世界の照明がすこしほぼしい模様。ロウソクの火で本読んでる  
んだから仕方ないか？

タモリ

「お、それは？」

パチュリー

「毎年4月30日にドイツのハルツ地方の町々で行われる魔女祭り  
？ヴァルブルギスの夜？のポスターよ」

タモリ

「魔女祭り～～？」

パチュリー

「キリスト教の弾圧を受けたゲルマン信仰が、この地方に伝わる魔  
女伝説と結びついて祭りとしたのよ」

タモリ

「伝説？」

パチュリー

「4月30日の夜にドイツ中の魔女や悪魔がハルツ山地の最高峰ブロッケン山に集まつてどんちゃん騒ぎをするといふものよ」

タモリ

「行かれたんですか？」

パチュリー

「いえ、流石にそれはないわよ。私が行つたらほととんに弾圧されかねない」

タモリ

「そうですか…貼つとこつけひだいー」

タモリ

「お花も結構届いてますね～。ひとつさておこ上海アリス幻樂団、紅魔館、妖精メイド一同、霧雨魔法店からも…」

パチュリー

「珍しいわね！？魔理沙から？」

タモリ

「来ましたねえ…」

パチュリー

「異変かしら？」

タモリ

「ひどい言われ様ですねえー！？」

パチュリー

「普段の行動からして当然よ

タモリ

「そうですか…。最近はどうですか?」

パチュリー

「あいかわらず図書館で研究して弾幕ね」

タモリ

「仕事に弾幕あるんですか?」

パチュリー

「毎回本を盗む盗賊がいるんでね。全く、何冊もつていったか…」

タモリ

「さつくり貰つていかれたんですね」

パチュリー

「それ以外にも、奴はとんでもない物を盗んでいました」

タモリ

「何ですか?」

パチュリー

「私のスペカです!!」

タモリ

「いやせつですけどーもつ水に流しましょ!ノンティレクショナルレーザー盗作の話なんてもついいじゃないですか!」

パチュリー

「言つとくけど私は百合には走らないわよ？心は盗まれていなか  
らね」

タモリ

「誰に向かつて言つてるんです？」

パチュリー

「そりやもぢろん読者よ。名ゼリフ通りにはいかないわ

タモリ

「なんでカリオストロ知つてるんですか！？そして何故改造した！  
？」

パチュリー

「オリジナルを尊重し、そこにオリジナルを付加するのが魔女よ」

タモリ

「すごいですねえ、いきなりのネタですか？。なんかかなり健康体  
ですねえ」

パチュリー

「まあ喘息は大体治つたけどね」

タモリ

「そなんですか？」

パチュリー

「毎回弾幕勝負で呪文唱えていたら徐々に回復してきたわ。紅魔異  
変に比べればだいぶ健康になつたわね」

タモリ

「確かに、緋想天では積極的に自分で調査に行ってましたからねえ」

パチュリー

「あの紅魔異変から色々と弾幕勝負あつたからね。健康に気を付けてビタミン▲も摂るようにしたし」

タモリ

「良かつたじゃないですか、健康体になつて」

パチュリー

「だけど外の世界では苦労したわ……」

タモリ

「外の世界?」「で?」

パチュリー

「ここに来るまでが大変だったわ……。ほら私、幻想郷では移動するとき飛んでいるでしょ?」

タモリ

「ああ、確かに」

パチュリー

「だから歩かないのよ……」

タモリ

「でしううね」

パチュリー

「でも外の世界は飛んで移動するとマズイでしょ？だから久しぶりに歩いて移動したんだけど、体力不足を感じたわ」

タモリ

「それこそパチュリーさんの場合一日のほとんどを座って過ごしますからね」

パチュリー

「ここに来るまで大変だったわ…。渋谷のスクランブル交差点がすぐ遠く感じたわよ」

タモリ

「あの距離でバテないで下さい！」

パチュリー

「だから時々人にばれないよう足を数センチ程度浮かせてたのよね」

タモリ

「よかつたですねえ、人にはれなくて」

パチュリー

「でも流石に限界近くで、ふらふらしながら歩いてたら警笛に声かけられたわ」

タモリ

「どんだけ心配されてるんですか…！」

パチュリー

「それで肩貸してもらひながら交差点を歩きあつたのよね」

タモリ

「もうすこし頑張りましょうよ…」

パチュリー

「紫モヤシの名はまだ払拭できそうにないわね…」

タモリ

「美鈴さんに拳法を習つたらどうですか?」

パチュリー

「……まずはジョギングから始めさせて」

一曰CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持つていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

パチュリー

「さて…何にしようかしら?」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか?」

パチュリー

「それでは…“昔、喘息を患っていた人”にします」

タモリ

「では“昔、喘息を患っていた人”スイッヂオン！」

パチュリー

「あ…3人！」

タモリ

「ううん、惜しいですねえ」

パチュリー

「やはりいるんですねえ…」

一曰CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜〜〜』

パチュリー

「では、霧雨魔理沙を呼びます」

タモリ

「お、やはりそつきますか」

ADさんがつながった電話をパチュリーに渡す

パチュリー

「もしもし、私よ」

魔理沙

「もしも…し?パチュー、リー?ザザー」

パチュリー

「電波が悪いわねえ…どこにいるの?」

魔理沙

「ああ、今紅魔館の図書館」

パチュリー

「主が居ないのに何してんの!?.?だいたいあなたいつ家の電話を携帯にしたの!?.?」

魔理沙

「KDDHに頼んだ」

パチュリー

「KDDH?」

魔理沙

「“キュウリ大好きビニ”でもいいわ”の略な

パチュリー

「それ河城にとつでしょ!..!」

魔理沙

「お、御名答。それでお前のいなーこの絶好の機会は見逃せないと  
思つてねえ。さっくり頂いたぜ!..!」

パチュリー

「あとで覚えときなさい…じゃあタモリさんに代わるから  
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

魔理沙

「もしもし、魔理沙です」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

魔理沙

「ああ、大丈夫だぜ」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

魔理沙

「いいともー！」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

)

## 第三十四回・パチュリー・ノーレッジ（後書き）

第三十四回、パチュリー・ノーレッジ編いかがでしたか？  
パチエは、喘息は治つてそうだけど体力は無いだろ？という想像からこうなりました。

緋想天でもたしか浮いてたし… 実際全然歩いていないんじゃないかな？  
？という推理です。

次回は魔理沙です。明日も見てくれるかな？

第三十五回・霧雨魔理沙

（

タモリ

「はい、ころりちは」

『ころりちは～』

タモリ

「久しぶりですねえ」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「なんか書き方忘れかけましたよ」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「間違いあつたらすいません。私が“だぜ口調”になつてるかも？」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、前回のパチュリー・ノーレッジさんからの紹介で初登場、霧雨魔理沙さんです～ビワ～」

（

拍手と共に霧雨魔理沙が登場！

『かわいい～！～！』

『魔理沙～！～！』

魔理沙

「おお～！すごいねえ」

魔女帽をかぶつた魔理沙が登場～！～！

タモリ

「どうも～。お、それは？」

魔理沙

「毎年1月1～6日前後にスイスのヴァレー地方で行われるベルプ・ヘクセのポスターだぜ！」

タモリ

「何ですか？そのお祭り」

魔理沙

「幽霊や精霊の逸話が多く語られてきたこの地方で、それにならい魔女の格好をした約千人ものスキーヤーが一斉に山を下るというものです」

タモリ

「そりやまたユニークな……」

魔理沙

「でもやるのはきついと思つぜ。魔女の格好で12キロもスキーだからな」

タモリ

「うわあ…。魔理沙ちゃんはスキーやるの？」

魔理沙

「それが、やれないんだよなあ…。板は作れると思つが場所がない。妖怪の山も迷いの森も木々が生い茂つていて滑る所が全くない」

タモリ

「わうですか…貼つとこりゅうだいー！」

タモリ

「お花も結構届いてますね～。ニコニさん」上海アリス幻樂団、博麗神社、アリス・マーガトロイドちゃん、河城にとつさん、守矢神社、白玉楼からも…」

魔理沙

「おお～、凄いねえ…。まあお返しが出来んがな」

タモリ

「ちよつとちよつと…」

魔理沙

「まあ、何かしら考えとくぜ」

タモリ

「何かしらじとをましまつ…。それに、パチュリーさんからはあつませんね～」

魔理沙

「たぶん前回の」と根に持つているんだね」

タモリ

「何かやつとあましょい...。最近はどうですか?」

魔理沙

「そりだなあ...。まあ相変わらず異変解決してる訳なんだが」

タモリ

「そうですねえ。妖精大戦争ではEXボスも務めましたし」

魔理沙

「まあ、あんなの小手調べだがな。チルノ相手に本気は出せんよ」

タモリ

「でしょ'うねえ」

魔理沙

「だから最近はまた本業の魔術研究に時間を割いている訳なんだが」

タモリ

「ほりほり」

魔理沙

「聞いた話じやあ光速を超える物がこの世で発見されたらしいな?」

タモリ

「ああ~、ニユートリノですよね?」

魔理沙

「わうそう、そんなやつ……」

タモリ

「同時に飛ばして光より一億分の6秒速かつたらしいですねえ

魔理沙

「まさか光速を超えるとはなあ……！速度の限界は光速と信じて疑わず、レーザー系を駆使してきたのだが」

タモリ

「まあ、まだ仮説の段階ですがね

魔理沙

「私もそれに倣つてスペカ作ろうと考えてるんだ

タモリ

「ニユートリノのスペカですか！？」

魔理沙

「いいと思わないか？」

タモリ

「ニユートリノってかなり微量で扱えないと思しますよ？たしかニユートリノって原子が壊変することで起る質量ゼロに近い素粒子ですね」

魔理沙

「そこに田を付けたスペカなんてどうだらう？」「

タモリ

「どこにますヒ?」

魔理沙

「極小の粒が超高速で全体に散るスペカとかいんじやないか?」

タモリ

「うわ、見ただけで目が痛くなりそ!…」

魔理沙

「名づけるなら“星符”ニユートリティックスター・ダストってとか?ニコートリノつて星が爆発する時にも観測されるんだろう?」「

タモリ

「こりこり考えるんですね…」

魔理沙

「レーザーといえば私、その光速を超えたんだからな。気になるぜ。だからお空のいる地下の温泉ボイラーハ行つたりしてるんだ」

タモリ

「あの人周辺なら観測できるでしょうねえ」

魔理沙

「だがビツヤつて観測、採集するのか全く分からん…」

タモリ

「あ~、観測するのも大変ですかりねえ」

魔理沙

「質量モモゼロだからな。同じ質量モモゼロであらつ幽々子に比べ

ると存在感が無さすぎるぜ」

タモリ

「観測つて山に大穴を空け、その地下で観測するんですね?」

魔理沙

「あのスーパー・カミオカンデって奴な。だが流石に温泉ボイラー付近や妖怪の山に大穴空けたらマズイしなあ…」

タモリ

「間違いなく大勢の人を敵に回すでしょうね」

魔理沙

「外の文明は進んでいるからなあ… 今日もびっくりしたぜ」

タモリ

「今日ですか?」

魔理沙

「いや、今日ここに来ると同時に鉄でできた飛行機を見つけたんだが

タモリ

「戦闘機ですか! ? 大体あなた、飛んできたらマズイでしょう!」

魔理沙

「大丈夫さ。にとりの光学迷彩借りて来たから

タモリ

「“盗んだ”の間違いでしょ! ?」

魔理沙

「失敬な。私は一度も嘘をついたことはない！」

タモリ

「それ自体が嘘でしょう！」

魔理沙

「まあそれで戦闘機って奴を見て、速さ比べをした訳なんだが」

タモリ

「ほっき対戦闘機ですか？」

魔理沙

「いや惨敗だった、すごいスピードであ……。あの宝船とは訳が違つた」

タモリ

「そうでしょうねえ」

魔理沙

「大体ありやどうなつてんだ？あの中には八卦炉でもあるのか？」

タモリ

「あなたからしてみればジエットエンジンは八卦炉みたいなものでしうねえ」

魔理沙

「つーむ、私もほっきに八卦炉を内蔵してみるかな」

タモリ

「ジョットエンジンみたいに?」

魔理沙

「それなら戦闘機に勝てるんじゃないか?マスタースパークで一気に急発進して差を付けてやるぜ!」

タモリ

「……あの、魔理沙さん?」

魔理沙

「ん?何だ?」

タモリ

「飛行機でよく聞く“G”って知っています?」

魔理沙

「何だそりゃ?」

タモリ

「……あの、さつきのアイデアは止めといた方がいいです。いやほんとこ」

魔理沙

「あん?」

タモリ

「絶対に止めときましょ!うね!飛んでる最中に失神しても知りませんからね」

魔理沙

「…まあ、よくわからんが。やる前にパチュリーやにとりに相談してみるぜ」

理解はしていないが、とにかくヤバそうと感じた様子。

タモリ

「良かつたですねえ、やる前にアイデアを公表して」

(

一日CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持つてますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

魔理沙

「さて…何にしようか?」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか?」

魔理沙

「それじゃあ…“魔女のコスプレをしたことある人”にするかな

タモリ

「ハロウインでやったことあるかもしませんしね。では“魔女のコスプレをしたことある人”スイッチオン!」

(

魔理沙

「うーん、0人か！」

タモリ

「惜しいですねえ」

魔理沙

「さすがに日本でそこまで本格的にややつらかな

（）

一日CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『えへへ…』

魔理沙

「そんじゃあ、アリスを呼ばうかな

タモリ

「お、やはりいきますか

ADさんがあつた電話を魔理沙に渡す

魔理沙

「もしもし、私だ

アリス

「ああ、魔理沙」

魔理沙

「今なにしてた?」

アリス

「上海の整備中よ」

魔理沙

「おお、 そうかい…。 ジャあタモリさんに代わるから  
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

アリス

「もしもし、 アリスです」

タモリ

「どうも初めまして。 明日は大丈夫ですか?」

アリス

「ええ、 大丈夫よ」

タモリ

「じゃあ、 明日来てくれるかな?」

アリス

「いいとも~!」

タモリ

「はい、お待ちしてま～す」

（

## 第三十五回・霧雨魔理沙（後書き）

第三十五回、霧雨魔理沙編いかがでしたか？

光を超えたかもしないニユートリノは、おそらく魔理沙は注目するだろうと思つて書いたら：なんか理系的な話になりましたね。

ニユートリノの説明は本文の通りです。ニユートリノが、“質量を持つ物質は質量ゼロの光の速さ、光速を越えられない”という定理を覆すかもしません。

「ニユートリノにも」く微量の質量、つまり重さがあるのです」

ついでに補足：Gについて 間違いあつたらすいません

Gとは重力加速度のこと。重力によつて地球上の物は下に落ちます。この落ちる物体が、一秒間に落ちる速さの事。

1Gが普通、私達の日常での重力加速度です。1G = 約9.8 m / s<sup>2</sup>です。

そして進んだ距離 = 初速度 × 時間 + ( 加速度 × 時間の2乗 ) / 2となります。

例えばうつかり落としてしまつた皿とかは、初めの速度がゼロの場合1秒につき約4.9メートル下に落ちるということです。

では戦闘機とかはどうなるか？

フリーフォールとかで急上昇すると下向きの力を体感しますよね？エレベーターでも目的の階について停止するとき浮かぶような感覚があります。

加速した物に乗つてるので普段より大きい加速となります。

戦闘機はそれこそ猛烈なスピード、では戦闘機が急上昇するどどなるか？

普段より数倍の重力加速度「8～9G程度？」が体にかかります。

すると全身の血液も下に落ちていきます。普段の8倍近い重力ですからね。

これによりどうなるか？心臓より上、脳に向かう血液の量が少なくなり、結果的に脳が酸素不足となり機能が低下します。それにより視野が狭くなる、ひどい場合は失神します。前者をグレイアウト、後者をブラックアウトといいます。

魔理沙の場合、最初の加速でほうきから吹き飛ばされるでしょう。（そもそもほうきが耐えられないと思う）

酸素マスクもせずマッハの世界には行けないだらうという私なりの仮説です。

（もしかすると長年の弾幕戦で高速の世界に強く耐性があるかもしれないが）

ふう、なんか久々に理系っぽい事書いた気がする 現役大学生なのに次回はアリスです！次回も見てくれるかな？

第三十六回・アリス・マーガトロイド

（

タモリ

「はい、こんにちは～」

『こんにちは～』

タモリ

「今日は人形使いですねえ」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「あれって糸で操るんですよね？」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「どうして絡みつかないんだろう…そしてどうやって作った？」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、前回の霧雨魔理沙さんからの紹介で初登場、アリス・マーガトロイドさんです～ビーブゼ～」

拍手と共にアリスが登場！

（

『かわいい～！！』

『アリス～！！』

アリス

「どうも。聞いた通りの騒がしさね」

ちょっとといぶかしげにアリス登場。この空氣と自分がメインとなつた雰囲気が異様に感じるらしい。上海を連れての登場！！

タモリ

「どうも～。あ、それは？」

アリス

「群馬県高崎市で行われたチョコフェアのポスターよ」

タモリ

「群馬でチョコ？」

アリス

「チョコのブルゼニ市のピルスナー・ウルケル・ビール社と、高崎市のキリンビールが技術相互協力協定を結んだことをきっかけに始まったの」

タモリ

「ほう」

アリス

「これにより姉妹都市提携が調印された。2010年のチョコフェアは、高崎市の市制施行110周年も重なつたために大規模な記

念イベントとなつたのよ

タモリ

「へえ…」

アリス

「中でも田玉は人形劇よ。チエコは人形劇が盛んでね。伝統もあり、質も高いのよ。ぜひ見たいものね」

タモリ

「すごいですねえ…貼つといてちょうどい！」

タモリ

「お花も結構届いてますね～。ニニニさんに上海アリス幻樂団、博麗神社、霧雨魔法店、神綺様からも…」

アリス

「え？お母さんが…？全くもつ…何してんだか」

タモリ

「まあまあ、いいじゃないですか。母親から貰つても

アリス

「うう…」

少し恥ずかしげなアリス

タモリ

「最近はどうですか？」

アリス

「そうねえ……研究していたゴリアテ人形が完成した訳なんだけど」

タモリ

「おお〜、ついに…」

アリス

「まあ、これは通過点なんだけどね」

タモリ

「通過点?さらに力強い人形を作るつもりで?」

アリス

「私はブレイン。ビニゼの魔法使いみたくパワーがメインじゃないわよ」

タモリ

「それじゃあ一体?」

アリス

「あれはあくまでパワー重視の大型人形を作ることで一つの参考にしたまでのこと。本来の目的は人間よ」

タモリ

「人間?」

アリス

「私が持つ人形の多くは小型軽量の人形。魔法により器用なことや細かい事には向くけど、日常や弾幕戦で力仕事には向かない」

タモリ

「あ～、確かに」

アリス

「だから器用で細かい事も出来つつ、破壊力を持つ人形が理想ね。人間で靈力や魔力を持った者のような人形を作ると弾幕でも魔法でも幅が広がるわ」

タモリ

「成程ねえ…。人形が靈夢さんや魔理沙さんのような精密さと力強さを持つたら凄いでしょうね」

アリス

「いい研究テーマでしょ？」

タモリ

「確かに…。でも複数の人形操っていて、よく混乱しませんね？どの糸がどの人形とつながっているか迷いません？」

アリス

「そこはもう慣れよ。どの指がどの人形が決めてしまえば問題ないわ」

タモリ

「なんか指とピアノの鍵盤の関係みたいですねえ」

アリス

「そんなとこねえ。弾いたことないけど」

タモリ

「ないんですか？ありそつなのに」

アリス

「聞かせる相手いないでしょ？」

タモリ

「……やうつと悲しい事言いましたね」

アリス

「私にはそれがちょうどいいの」

平然と言ってのけたアリス。一人きりでも気にしていないうだ。

タモリ

「それで、人形は全部自作なんですよね？」

アリス

「そうね。全部私のお手製よ。一から全部作ったわ」

そういう寄り添う上海人形を見せる。

タモリ

「へえ…。それで、もしかして口から毒が塗られたナイフが飛び出すとか？」

アリス

「からくり人形じゃないわよ！…それ外の世界の忍者マンガね！？」

タモリ

「よくカン 口ウを！」存じで

アリス

「以前新聞で見たわ。私は操り人形。からくりなんか仕込んだら

可愛くないでしょ？」

タモリ

「まあ確かに。でも、例えばアリスさんそつくりの人形とか作つたら便利と思いません？」

アリス

「そうねえ…。でも音声はどうすればいいか？」

タモリ

「そこはやつぱり腹話術で

アリス

「いつへ堂ーー？」

タモリ

「あれ？ 声が…」

アリス

「やらないわよー！」

タモリ

「ははは…。他に気になるとすれば…人形がメインなのに本持ち歩いているんですね？」

アリス

「魔法に欠かせないアイテムの一つよ。魔理沙の八卦炉みたいなものね」

タモリ

「成程ねえ……。確かに小さい時から使つてゐるんですよね？」

アリス

「ええそりよ。初めて靈夢や魔理沙に会つた時からかしづらっ。」

タモリ

「へえ……。拝見しても？」

アリス

「構わないわ。どうぞ。でも読めないと思つわよ？」

アリス愛用の本がタモリさんに渡される。

タモリ

「うわあ……。至る所に見たことない文字と図が。これ魔方陣ですかね？」

アリス

「ええそりよ。魔術の基本ね」

タモリ

「うわあ……。こりゃ読むのすら大変だあ  
そういういつづペラペラと本をめくつていぐ。」

タモリ

「…………あ」

本の裏表紙付近で突然、固まるタモリさん。

アリス

「どうしたの？急に……」

タモリさんが見ているページを見た瞬間、急激に顔が真っ赤になる

アリス。

アリス  
「ちょ、返してストップー！」

タモリ  
「『……打倒、靈夢。打倒魔理沙。お母さんに負けない魔法使いになる！』ですか」

アリス  
「音読するの止めなさいーー！」

タモリ  
「いいじゃないですか。夢や目標に少しづつ近づいているんですから」

本の裏表紙。そこにはかすれた拙い文字で、幼いころに描いた夢が書かれていた……

（  
一田CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持つていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

アリス

「さて…何にしようかな？」

まだ少し赤い顔のままアンケートに参加するアリス。

タモリ

「頑張つてください。何いきますか?」

アリス

「それじゃあ…“人形劇をやつたことある人”にするかね」

タモリ

「では“人形劇をやつたことある人”スイッチオン!」

（

アリス

「0人かあ…」

タモリ

「惜しいですねえ」

アリス

「人形劇は外の世界で消えつつあるのかなあ」

一  
旦  
C  
M

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい!」

『え〜!..』

アリス

「じゃあ、旧作で戦つた風見幽香を呼びます

タモリ

「お、やはついりますか」

Aのさんがつながった電話をアリスに渡す

アリス

「もしもし、私よ」

幽香

「ああ、アリス」

アリス

「今なにしてました?」

幽香

「太陽の線を散歩中よ」

アリス

「やつ……。ではタモリさんに代わるから  
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

幽香

「もしもし、幽香よ」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか?」

幽香

「ええ、大丈夫よ」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな?」

幽香

「え…と、いいとも~!」

少し小声で呟きながら幽香。

タモリ

「はい、お待ちしてます」

)

## 第三十六回・アリス・マーガトロイド（後書き）

第三十六回、アリス・マーガトロイド編いかがでしたか？ 小さい頃の思い出ネタというものを初めてやってみました。いやなんか自分のことのようにこそばゆい感じでした。

こういったネタは魔理沙で書きたかったんですが、魔理沙編では書けなかつたのでアリスで出しました。

予想ですけど、小さい時にアリスが靈夢や魔理沙に倒されて、そこから精進して一人と違う人形使いとなつた考察があるんです。

それから、一つ断つておきますが旧作のみのキャラは出しません。流石に何話せばいいのか全然わかりませんからね。

次回は幽香です。幽香 メディスン 小町 映姫と花映塚キャラに移ります。

次回をお楽しみに！次回も見てくれるかな？

第三十七回・風見幽香

（

タモリ

「はい、こそこそ

『こんなにちま～ー』

タモリ

「今日はフランスマスターですねえ」

『そ～ですね！～！』

タモリ

「男はあまり花に縁がないんですねがね」

『そ～ですね！～！』

タモリ

「水やり忘れたりするんですよね～」

『そ～ですね！～！』

タモリ

「子供のころアサガオ枯らしたのはいい思い出です」

タモリ

「それでは登場していただきましょ、前回のアリス・マー・ガトロ  
イドさんからの紹介で初登場、風見幽香さんです！どうぞ～」

（拍手と共に幽香が登場！）

『綺麗～！！』

『幽香～！！』

歩きつつ幽香が傘を広げたその時！！

パーン！！パーン！！

破裂音と共に色とりどりの花吹雪が舞い散る！

『おお～！！』

タモリ

「すごいですねえ！」

幽香

「何、私らしく派手に行こうと思つてね」

傘を閉じて席に着く。

タモリ

「あ、それは？」

幽香

「長崎県は佐世保市のハウステンボスで4／19～6／12の期間  
に行われているバラ祭りのポスターよ」

タモリ

「やはり花の祭りですか～。どんな祭りですか？」

幽香

「見どひはバラが咲き乱れる庭や運河、宮殿が素晴らしいのよ。それにガーデニングのコンクール、バラのコンクールが行われるの」

タモリ

「へえ…。そりゃすばらしいな」

幽香

「中でも気になるのはローズヌーヴォーの解禁ね」

タモリ

「ローズヌーヴォー？」

幽香

「日本で未発表の新種のバラをお披露するのよ。毎年楽しみだわ

」

タモリ

「そうですか～。貼つとてちょうどいい！」

タモリ

「お花も結構届いてますね～。ニコニコさんに上海アリス幻樂団、博麗神社、霧雨魔法店、夢幻館の方々からも～！」

幽香

「あら、夢幻館ねえ…。懐かしい響きだわ」

タモリ

「確かに紅魔異変の前の、旧作の東方幻想郷の方々ですね」

幽香

「そうね。思つたけどパジャマ姿を見せたのは私一人じゃないか  
しら?」

タモリ

「あ、旧作で確かに披瀬しましたね。ピンクのパジャマ」

幽香

「寝てる時にいきなり靈夢と魔理沙が攻め込んで来たんだからじょ  
うがないじゃない…」

タモリ

「でも、レーリアの服もパジャマ風じゃないですか?よく似ていま  
す」

幽香

「あ…。また盗まれたか」

タモリ

「いや、レーリアの服は違うでしょ…。考えすぎですよー。」

幽香

「…そうね。魔理沙じゃあるまこし」

タモリ

「苦に思い出なんですねえ」

幽香

「元祖マスタースパーク使いは私なのになえ…」

タモリ

「まあまあ…」

幽香

「なら私もファイナルマスタースパーク真似ようかしら？あの子の倍以上のパワー見せつけてやるわよ？」

タモリ

「止めときなさいって！…パワーは魔理沙の代名詞…！」

幽香

「冗談よ。そしたらフラワーマスターの名が泣くわ」

タモリ

「ああ良かつた…。最近は何を？」

幽香

「最近？…そうねえ…そろそろ秋の花の最盛期だから、秋の花の観察と栽培をやつてるところ」

タモリ

「花を育てるプロですかね？」

幽香

「そりそろコスモスが咲き乱れるでしょ？ね」

タモリ

「あとは…彼岸花ですかね?」

幽香

「あれは管轄が違う…」

タモリ

「ああ確かに。あと幽香さんの特徴といえば、チェック柄の服ですかね?」

幽香

「そうねえ、私ぐらいのものかしら?」

タモリ

「あとは…またてさんですかね」

幽香

「……明日あたり天狗の羽を空に咲かせてみせようかしら?」

タモリ

「嫌ですよそんな黒い空!…!」

幽香

「でもまあ、外の世界ではチェック柄多いわよね?」

タモリ

「そうですねえ」

幽香

「私と同じ格好した人が、町を探せばいるかも」

タモリ

「あ～、もしかしたら…」

幽香

「見た時は知らせて頂戴。是が非でも会いに行くわ」

タモリ

「…何する気ですか？」

幽香

「そりやまあ…ネットに投稿して幽香ファンを広めて」

タモリ

「止めてください…！」

幽香

「なんか服屋のしまむらで妖夢の服に似た服が発売されたらしいから、ブーム出来たら私もいけるかなーと」

タモリ

「そのうち東方の服が一つの文化になつたりして」

幽香

「上手くいつたら私の服がどこの学校の制服になつたりして…！」

タモリ

「影響受けすぎでしょ…！」

(

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

幽香

「さて…何にしようかな?」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか?」

幽香

「それじゃあ…“ガーデニングをしている人”にするわね

タモリ

「では“ガーデニングをしている人”スイッチオン!」

)

幽香

「あ、1人…」

ADが幽香にストラップを渡す。

タモリ

「あ、あの人!」

手を上げる一人の女性を指す

幽香

「まだ花や土を愛でる習慣はあるみたいねえ」

一曰二月

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さー。」

『えーーー。』

幽香

「じゃあ、鈴蘭畠で会ったメディスンを呼ぶわ

タモリ

「お、の方ですか

ADさんがあながつた電話を幽香に渡す

幽香

「もしもしし、私よ

メディ

「ああ、幽香。どうしたの?」

幽香

「収録中。今なにしてた?」

メディ

「鈴蘭の花摘みよ」

幽香

「…。ではタモリさんに代わるから  
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

メディ

「もしもし、メディスンよ」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか?」

メディ

「はい、大丈夫よ」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな?」

メディ

「いいとも~!」

タモリ

「はい、お待ちしてま~す」

（

## 第三十七回・風見幽香（後書き）

第三十七回、風見幽香編いかがでしたか？

幽香はネタ多いのに書きづらかったなあ…。サドッぷりがあまり表現出来なかつたかも。

それにしても幽香がファイナルマスパをアレンジしたらどうなるんだろう？ 考えたくないなあ…。何もかも跡形も残らない気がする。

次回はメディスン・メランコリーです。次回も見てくれるかな？

第三十八回・メディスン・マランゴロー

（

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは～！』

タモリ

「今日は人形さんですねえ」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「毒を操る人形ですねえ」

『そ～ですね～！～』

タモリ  
「……彼女、地味に毒殺可能でしうねえ。幽々子より怖いかも」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、前回の風見幽香さんからの紹介で初登場、メディスン・マランゴローさんです～ビーヴィ～」

（  
拍手と共にメディスンが登場！

『かわいい～！～』

『メディ～！～』

「どうも～、初めまして！～！」

スーさんと共にメディスンが席に近づく。

タモリ

「お、それは？」

メディ

「はい、フランスで5月1日に行われるFete des Muguets 「フート・デ・ムゲ」のポスターよ」

タモリ

「それ何ですか？」

メディ

「幸せのシンボルとされるスズランのブーケを親しい人に贈りあう習慣よ。この日にスズランの花を贈るとその人に幸福が訪れると言われてるの」

タモリ

「へえ……」

メディ

「特に一本の茎に13輪の花がついたものは、最高の幸福を江えてくれると言われているわ」

タモリ

「あるんですかねえ？そんなスズラン」

メディ

「さー？でもそれだけ良く捉えられてるつてことよ。フランスでは  
「聖母の涙」（リヨン）って呼ばれてるくらいだし」

タモリ

「そうですか…。點つとてちょうどいい！」

タモリ

「お花も結構届いてますね～。ニコニコさん、上海アリス幻樂団、風  
見幽香さん、アリス・マーガトロイドさん、永遠亭からも～」

メディ

「結構スズランを出荷してるからねえ」

タモリ

「出荷してんだ！？」

メディ

「あのスズラン畠周辺は毒が舞い散ってるからねえ」

タモリ

「ああ～、確かに」

メディ

「鈴仙やてゐじやあ流石にまづこからねえ」

タモリ

「いつも輝夜さんで頼んだり…」

メディ

「まず無いでしょー。」

タモリ

「そりゃそうか」

メディ

「それで私がスズランを収穫して永遠亭に出荷してたんだけだね。  
他にも毒草や薬草とか」

タモリ

「永琳さん、スズランでなにやってるんですか?」

メディ

「確かに新しい強心剤の開発とか言つていたわね」

タモリ

「強心剤を…?」

メディ

「スズランに含まれるコンバラトキシンは強心作用があり、昔は強心利尿薬として使われていたの。でも副作用も大きくて使いづらいから今は使わないわ」

タモリ

「あ、そういうやスズランを入れた花瓶の水は飲んだらいけないんで  
したね」

メディ

「コンバラトキシンなどは水に溶けるからよ。といつわけでコンバラトキシンを化学変化させて安全かつ即効性のある薬を作ろうってわけ」

タモリ

「成程ねえ」

メディ

「あとは…部下の鈴仙がスズランを使った新しい香水を作成してい るやうよ」

タモリ

「鈴仙さんが？」

メディ

「薬を合成する前に修行の一環としてやらせてるやうね。スズラン のエキスを加工したり他の花の香りと配合しているやうよ」

タモリ

「スズランって香水になるんですねえ」

メディ

「フローラル系の香水として使われるやうよ。まあ私はそのへん全く分からんんだけどね」

タモリ

「でも幻想郷で香水付けてる人ってあまりいないんじゃないんです か？」

メディ

「どーだろ? 最近、あのメイドがスズランを探つていったからもしかすると…」

タモリ

「毒の紅茶を作るためじゃなくて?」

メディ

「わからんないけど、あいつなら作れるんじゃない? それに紅魔館にはパチュリーって魔女もいるし」

タモリ

「あ、確かに。それで紅魔館の人たちで使うかもしだせんねえ」

メディ

「ふふっ、でもあの吸血鬼に香水が似合つかしらね?」

タモリ

「レミリアさん、意外とやつてるかもしだせんよ? 鏡台の前でシヤネルの5番をふりかけてるかもしだせんし」

メディ

「あのレミリアがマーリン・モローの香水! ? ないない! 絶対ない! 千年早い!」

タモリ

「あつさり断言しましたねえ!」

メディ

「香水なら幽香とか紫とかでしょ、うー。」

タモリ

「大人の女性つてやつですか」

メディ

「まあ、いい香水が出来たらいいと思つわ。そしたらスズラン畠も注目されるしね」

タモリ

「それいいですねえ！」

メディ

「そしたら私が主に収穫するわけでしょう？人形に毒は効かないんだから。そうして毒に関わる仕事をすれば、少しは人形つてやつを見直すかと思つてね」

タモリ

「そういう考え方ですか！いいですねえ。人形でないと危険ですかうね」

メディ

「他にも永琳が薬を開発してくれれば最高なんだけど…それはもう少しかかりそうなのよね」

タモリ

「成程…。じゃあ主力は香水ですか」

メディ

「そうなのよね。もっと香水を使うやつが増えればいいんだけど。」

近い奴から順に香水の宣伝をしてみようかしら?」

タモリ

「近い奴って?」

メディ

「小町と映姫」

タモリ

「絶対無理でしょ!! 閻魔様が香水! ?」

メディ

「仕方ない、そのときは文々。新聞に頼むか…」

タモリ

「買い手が増えるといいですねえ」

（

一旦CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

メディ

「さて…何にしようかな?」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか?」

メディ

「それじゃあ…“ブーケトスを受け取ったことある人”にするわね」

タモリ

「え、何故？」

メディ

「スズランはブーケによく使われますから。まあ幻想郷は大半が神前結婚ですけどね」

タモリ

「では“ブーケトスを受け取ったことある人”スイッヂオン！」

（

メディ

「あ、2人…」

タモリ

「惜しいなあ～」

メディ

「なかなか取れないものだからねえ」

（旦CM）

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『えへーーー』

メディ

「じゃあ、彼岸で会った小野塚小町さんを呼ぶわ

タモリ

「お、の方ですか

ADさんがつながった電話をメディに渡す

メディ

「もしもし、メディです」

小町

「……」

メディ

「…全くもう。しょうがないなあ。電話とつてすべー一度寝したわね  
そつづぶやくと、咳払いを一つして受話器を握る。

メディ

「小町ーーあなたは少し自分に甘すぎるとーー」

小町

「きゃんーーーす、すいません四季様！」

慌てて飛び起きた小町。もはや条件反射並みの速度なのだろう。

メディ

「私だよ」

小町

「……あ、いつぞやの毒人形か。驚かせるなよ」

メディ

「なんか嫌な響きね。まあいいわ。タモリさんに代わるから受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

小町

「もしもし、小町つて奴です」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか?」

小町

「大丈夫です!行きます!」

メディ

「…仕事サボると思って飛びついたわね」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな?」

小町

「いいとも~!」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

}

## 第三十八回・メディスン・メランゴニー（後書き）

第三十八回・メディ編いががでしたか？

スズランから香水ネタになりましたねえ…。実際のところ幻想郷で香水つける人は少ないだろうなあ。

レミリアは香水つけるんだろうか？お嬢様のたしなみをそろそろ覚え始めるのもしれませんね。

次回は小町です。次回も見てくれるかな？

第三十九回・小野塚小町

(

タモリ

「はい、こんにちは～」

『こんにちは～！～』

タモリ

「今日は死神さんですねえ」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「人を見て死後が分かるそうですねえ」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「……なんか見られるのが怖いなあ。いや確かにまともな人生送つてる自信はあるんだけど」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、前回のメディスン・メランゴリーさんからの紹介で初登場、小野塚小町さんです～ビ～づぞ～」

拍手と共に小町が登場！

(

『小町～！～』

『可愛～～！～』

小町  
「おお、いいねえ」のひとたちは…鬱<sup>うつ</sup>が無<sup>な</sup>いんだ。いい靈<sup>れい</sup>になるよ」

タモリ

「なんか褒められてるのか馬鹿にされてるのかわかりませんねえ…」

小町

「褒めてるさあ、死神流の褒め言葉。死後が明ること思つてしまえば生きる気力も増すだろ?」

タモリ

「なるほど、逆転の発想ですか！」

小町

「物事は考えようによつては不吉にもなるし幸せにもなる」

タモリ

「確かに…」

小町

「あたいの舟だつてそつさ。出港するまで時間がかかるから、その分川を渡るとき幸せに感じん…」

タモリ

「それはサボるための口実でしょ……。」

小町

「あれ、この理屈は理にかなわないか」

タモリ

「まったくもつ……。あ、それは？」

小町

「いやー、祭りの知らせじゃないんだけど、群馬県は甘楽町にある三途川のほとりにある姥子堂のポスターだ」

タモリ

「あるんですねえ！ 三途の川なんて名前？」

小町

「群馬以外にも千葉・富城・青森にあるよ。昔の人はあの世を強く信じていたんだねえ」

「俗称かもしだせん。ウイキペディアにはあつたけどグーグルで検索しても出てきませんでした」

タモリ

「それで、姥子堂とは？」

小町

「奪衣婆だつえはを祀まつったお堂さ。奪衣婆だつえはつてのは六文銭を持たずもつたずにやつてきた死者の服をはぎ取り、その重さで生前の業を量るんだよ」

タモリ

「珍しいですねえ、地獄の方を祀るなんて」

小町

「民間信仰を受けてねえ…。それに、東京にもあるよ?世田谷区の宗円寺、新宿区の正受院なんかがそいつさ」

タモリ

「あ～、プラタモリで見たら調べてみます。點つといてちょうどいい！」

タモリ

「お花も結構届いてますね～。ZIINさんに上海アリス幻樂団、四季映姫様、白玉楼からも！」

小町

「白玉楼?冥界つながりってやつかい？」

タモリ

「おそらくそうでしょうな」

小町

「あの庭師は四季様に似て生真面目だからねえ…。あれでもう少し人としての深みが増せば大したもんなんだが」

タモリ

「あなた人のこと言えないでしょーーー？」

小町

「おおっと、それもそつか」

タモリ

「最近は…聞くまでもないか」

小町

「え～、聞いてくださいよ」

タモリ

「また仕事サボって寝てるんだじゅう！？」

小町

「いやいや、最近は監視の目が厳しくてねえ…。四季様の見回りの回数が増えた気がする」

タモリ

「その考えが間違ってるでじゅう！監視がなくとも仕事しまじゅうよー！」

小町

「あんた四季様みたいなこと言つんだねえ…。いや確かに厳しくなった！四季様の巡回パターンも日々変化しているし」

タモリ

「ついに四季様も厳重注意をするよになつたんですねえ」

小町

「いやそれが、この前の神靈騒ぎでね。無関係のあたいがまた仕事をサボつたと一部の妖怪に間違われてねえ」

タモリ

「無理もないだろ？　あ」

小町

「それで無縁塚にチルノとプリズムリバー三姉妹とミスティアが攻め込んできてるさあ」

タモリ

「日頃の行いが悪いからでしょ」

小町

「距離操って遠くから銭投げまくってなんとか倒したけどねえ。いきなり寝起きで5対1だよ?ひどいと思わないかい?」

タモリ

「まあ前科みたいなものがありますからねえ」

小町

「それでやつといじめ倒したと思ったたら、なんか背後に冷たい視線感じるな」と思つて振り返る…」

タモリ

「四季様が立っていた、と

小町

「まあそれで、弁明空しくお説教だよ。いつも通り正座して

タモリ

「なんか想像に容易いなあ

小町

「あたいが正座しないと四季様はあたいの頭叩けませんからねえ」

タモリ

「……なんか少し可愛いかも」

小町

「それ本人の前で言っちゃダメだよ？あの方は閻魔の威厳が無くなつていくのを人一倍気にしてんだから」

タモリ

「あ～、そうだろうなあ」

小町

「それに幽霊の数増えたからねえ」

タモリ

「そうでしょうねえ」

小町

「だからこそあたいはペースを遅くしてんだけどねえ」

タモリ

「え？何故？」

小町

「だつてそうだろ？いきなり死んで流れ作業のようにあつという間にあの世に行つたんじゃあ、この世の暮らしの意義は何だったのかわからないだろ？」

タモリ

「……」

小町

「だからあえて無縁塚の岸に少し留めるのさ。あの世に行く前にこの世を見つめ直してもいいんじやないのかい?不慮の事故ならなおさらや」

タモリ

「小町さん…あなた結構真面目な一面あるんですねえ」

小町

「この仕事やつてると自然にそんなこと考えるのさ。それに上司の性格が少し移っちゃったのかもしれないねえ」

一曰CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持つていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

小町

「さて…どうしようかねえ?」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか?」

小町

「それじゃあ…。昔の古銭、“寛永通宝を持っている人”にするかね」

タモリ

「寛永通宝を？江戸時代の小銭ですか」

小町

「あたいの投げ銭の大半はあれだからねえ」

タモリ

「では“寛永通宝を持っている人”スイッチオン！」

（

小町

「あ、一人…！」

ADが小町にストラップを渡す。

小町

「あたい愛用の舟に付けるかな？三途の川のタイタニックの船首がいいだろ？！」

タモリ

「止めときなさいって！あ、あの人だ！」

手を上げる一人の男性を指さす

小町

「へえ…。死後の六文銭にとつておきなよ？」

笑いつつ[冗談をかます小町。

タモリ

「これがあるなら三途の川をすいすい渡れるってことですか？」

小町

「ただし天寿は全うしなよ?でないと二途の川の中央で突き落とすからね?」

』

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい!」

『え~!~!』

小町

「じゃあ、あたいの上司、四季映姫様を呼びます」

タモリ

「お、あの方ですか」

ADさんがつながった電話を小町に渡す

小町

「もしもしし、小町です。何していました?」

四季

「昼休みに休憩室であなたの出演見ていましたよ。小町、ずいぶんと色々なことペラペラ喋ってくれたわね?私のことも結構に...」

小町

「いや~, だつてこれ喋る企画ですし...」

四季

「あなたはいつもお喋りです！だから仕事も遅い！そう、あなたは自分に甘すぎる…閻魔の存在をないがしろにする気ですか？」

小町

「きやん…し、四季様！今はお説教は止めときましょ…一番組の凡もありまーし…生放送ですよ？」

四季

「……仕方ありませんねえ」

小町

「ではタモリさんに代わりますから」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

四季

「もしもし、四季映姫・ヤマザナギウト申します」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

四季

「はい、空いてます」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

四季

「では…」ほん。いいとも~!」

小町

「四季様も会わせて貰れるんだー?」

タモリ

「はい、お待ちしてます

」

## 第三十九回・小野塚小町（後書き）

第三十九回、小野塚小町編いかがでしたか？

小町はかなり書きやすかつた！魔理沙とか小町とか、こういう一見すると曲がっているけど根は真っ直ぐなキャラ好きなんですね。小町はサボってはいるけどしつかり死神としての意義を考えている、という想像のもとこんな話になりました。

でもまあ、まだまだ四季映姫と対等に話せるには早いでしょうねえ。小町は今頃、悔悟の棒でぺしぺしと頭叩かれつつ説教されているんでしょう。

さて、次回はなんと閻魔様！私に書けるかな…。次回も見てくれるかな？

第四十回・四季映姫・ヤマザナドウ

（

タモリ

「はい、ほんにむかへ」

『ほんにむかへ……』

タモリ

「今日は何と閻魔様ですねえ……」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「死んだら裁判されますねえ」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「今のうちお布施でも渡しておこうかな？いやあの人受け取らないか！」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、前回の小野塚小町さんからの紹介で初登場、四季映姫・ヤマザナドウ様です！どうぞ～」

（

拍手と共に四季映姫が登場！

『四季様～！～』

『可愛い～！～』

映姫

「どうも。もう一度外の世界の地を踏むとは思いませんでした。四季映姫と申します」

いつも通り悔悟の棒を構えた四季映姫が丁寧に礼をする。

タモリ

「ああ、これはどうも。どうぞお掛け下さい閻魔様」

映姫

「ありがとうございます」

タモリ

「お、それは？」

映姫

「愛媛県宇和島市の西江寺せいこうじで毎年旧暦1月16日のやぶ入りの日に行われている“えんま祭り”のポスターです」

タモリ

「やはりあるんですねえ…。閻魔祭りー？」

映姫

「はい、宇和島市出身の村上天心さんが描かれた閻魔大王図がが公開され、多くの露店が立ち並びます。ちなみに今年は2月18日に行

われる予定です」

タモリ

「閻魔大王の絵ですか…。なんか想像していた人と明らかに違いますねえ」

映姫

「ああ、あれは同じ部署の方なのです。閻魔の中で一番の古株で、同じ閻魔の中でも中心的な方なのです」

タモリ

「そうなんですか！？」

映姫

「昔は今よりも凶悪な事件が多発していましたからね。それであの方が閻魔に推薦されたのです。それで人間の閻魔のイメージがある人になります…」

タモリ

「そうですか…貼つといてちょつだい！…」

タモリ

「お花も結構届いてますね～。ＺＵＺさんに上海アリス幻樂団、小野塚小町さん、八雲家一同、白玉楼からも！」

映姫

「ありがたいです。でも紫から？少し臭うわね…」

タモリ

「そうですか？」

映姫

「田黒はつわりつけましょ」

タモリ

「うーんでー?」

映姫

「大丈夫です。お時間はとらせません。この淨瑠璃の鏡で彼女の行いを暴いて見せましょう」

そういう、懐から手鏡程の大きさの鏡を取り出すと、なにやら力を込める。すると…

タモリ

「あ、なにか映り始めた!これは…?」

映姫

「昨日のお昼の八雲亭の様子です」

（昨日午後3時16分、八雲亭にて）

紫

「藍。邪魔するわよ」

藍

「あ、びつしたのですか紫様?」

紫

「ちょっと面倒な頼み」とあるんだけど…」

藍

「どんな話ですか？」

紫

「明日あの闇魔がいいともに出来るらしいのよー。」

藍

「それがどうしたのですか？」

紫

「わかつてないわね…。出演者は親しい人から花を送られるのよ?だから送るのよ」

藍

「だから謎なんですよ。大したつながり無いじゃないですか。幽々子様は幽霊扱うからつながりありますけど、家は何も…」

紫

「いや、彼女も相当長いのよ?私が幻想郷を創設した初期から何回か親交あるのよ。結界のことで何回かもめたこともあったし」

藍

「そんなことが?」

紫

「たまに博麗大結界を越えてくる人いるでしょ?そんな奴がなんかしでかすと私にとばっちり来るのよ…。“結界甘いのではないか?”って

藍

「そうなんですか？」

紫

「まあ立場的にぼほ拮抗しているから口頭で注意してくるだけなんだけど、これが長いのよねえ…。まったく、ああいつた性格は私と合わないわ」

藍

「それで、一応花を贈りたいと…？」

紫

「やつよ。それで花を適当に見繕つて頂戴。あとは私が送るから」

藍

「承知しました」

紫

「まつたく、面倒な話ね…」

～再生終～

映姫

「……なるほど、やつこつ魂胆でしたか

タモリ

「やつちつ全部まるわかりなんですねえ…」

映姫

「ふう。まあいいでしょ。誰しも仕事上の付き合にはあるもので

す。それを重視しているのは一つの善行といえるでしょう  
といいつつ、少し苦い顔をする映姫。

タモリ

「それにしても、紫さんとはあまりウマが合わないんですね？」

映姫

「彼女は混沌としたものを好みますからね。よく話を煙に巻くでし  
ょ？」「…」

タモリ

「ああ、確かに…」

映姫

「だから白黒はつきりつける私と真逆なのですよ」

タモリ

「幻想郷でも特筆の賢者と閻魔様の会合ですか…。なんかとても辛<sup>しづ</sup>  
辣な話し合いになりそうですね？」

映姫

「いえいえ、彼女も私も幻想郷の平穏を願う者同士。考えは違えど  
基本的な想いはほぼ同じですから、けつこう普通に話し合いますよ」

タモリ

「しかし…人間の前で淨瑠璃の鏡なんて披露して良かつたのですか  
？」

映姫

「構いません。私はあえて見せたのですから」

タモリ

「どうこいりとですか？」

映姫

「あの世の世界觀は年月と共に薄れていき、閻魔の存在すら危うくなり始めた。だからこゝを見せよつと思つたのです。罪は必ず暴かれることを」

タモリ

「おお…」

映姫

「閻魔の役目は死者の裁きと、裁きの恐れから生者の行いを正す」と。それが薄れてしまつては閻魔として成り立たない」

タモリ

「確かに…」

映姫

「そうでなければ生者の多くは地獄に行くことになる。その前に行いを正した方がよっぽどこの世は良くなるのです」

タモリ

「法で縛るにも限界がありますからねえ」

映姫

「本来は法ではなく倫理で人を縛るべきなのです。倫理を破つたとしても罰は無い。だが倫理は柔軟に、どんな過ちでも罪の意識を持たせられる」

タモリ

「そうですねえ…。倫理やモラルが無くなれば、法で裁けない罪を悔いたりしませんからねえ」

映姫

「倫理が無くなつていいのは非常に嘆かわしいです…。特に中国で急速に起つてこらえうですね」

タモリ

「そうみたいですねえ。官僚と政治の腐敗が激しいようですし

映姫

「日本はそつならないよう、私も時と場合によつては、人が想像する閻魔の姿をとる必要がありそうですね」

タモリ

「うわあ…。裁きの時はお手柔らかにお願いします」

映姫

「いいえ。公明正大に裁かせてもらいますよ?地獄の沙汰は金じゃ逃れられません!」

タモリ

「うひやあ…。最初の台詞覚えていたんですねえ」

（  
—旦CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

映姫

「さて…どうしましょうか?」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか?」

映姫

「それじゃあ…。絵画の、“地獄絵図を見たことがある人”にします」

タモリ

「そうきますか…。では“地獄絵図を見たことがある人”スイッチオン!」

（

映姫

「ふむ、3人ですか」

タモリ

「残念でしたねえ~」

映姫

「いえ、多ければいいのです。それが倫理の形成に繋がるのですから」

タモリ

「映姫様……」の「一トナーワカツ」であります？」

映姫

「あ……失礼、ついにいつもの調子で」

（  
一  
旦  
C  
M  
）

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さー！」

『えーーーー』

映姫

「では、同じく靈を管理する西行寺幽々子を呼びます」

タモリ

「お、あの方ですか」

ADちゃんがつながった電話を映姫に渡す

映姫

「どうもここにちは。四季映姫・ヤマザナダウです」

幽々子

「あら意外ね。次は私？」

映姫

「ええ。それで、今何をされていましたか？」

幽々子

「ちよつて、飯を食べるといひよ。すべて代わって頂けるかしら？」

？」

映姫

「わかりました。ではタモリさんに代わりますね」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもし、タモリです」

幽々子

「もしもし、西行寺幽々子です」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

幽々子

「ええ、空いてるわ」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

幽々子

「いいともーーー！」

タモリ

「はー、お待たしてまーす」

}

## 第四十回・四季映姫・ヤマザナドウ（後書き）

第四十回、四季映姫・ヤマザナドウ編いかがでしたか？  
映姫様はどこまでも真っ直ぐ、直角な方なんだろうな～と思つて書  
いたらこんな風になりました。

今日のニュースで、中国でひき逃げされた女の子を、通行人が誰も  
助けなかつたというのを見ました。

通行人は「通報人が加害者と間違えられる場合が多いから知らせな  
かつた」ということです。

四季映姫様はそんな倫理やモラルの欠如というのを誰よりも嘆いて  
いるのだろうと思い、こんな話となつたのです。

私としては似合わない話でしたけどね。四季映姫の感じが出せたら  
いいと思いました。

でも映姫様は知り合い少ないだろうな…。まともに話せる人いる  
のかなあ？

白蓮なら話せるかなあ？一般人ではついていけないレベルの深い  
話を繰り広げるのかも？

次回は亡靈姫です。次回も見てくれるかな？

第四十一回・西行寺幽々子

（

タモリ

「はい、ひそひそ

『ひんにひま～！～』

タモリ

「今日は幽靈のお姫様ですねえ」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「幽靈なのに大食いなんですよねえ」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「あれ？じゃあ食べた物はどうやって消えて行つたんだ！？  
どこで消化すればいいんだ！？」

タモリ  
「それでは登場していただきましょ～、前回の四季映姫さんからの  
紹介で初登場、西行寺幽々子さんです～びつ～」

（

拍手と共に幽々子が登場！

『 ゆゆ様～！～.』

『 綺麗～！～.』

幽々子

「あら、ありがと。では皆さんの用を少し和ませましょうかしらね」

タモリ

「？？」

幽々子

「 “ 桜符 ” 西行桜吹雪！！」

薄桃色の桜がスタジオに舞い散る！！」

『 おお～！～.』

タモリ

「 桜吹雪で登場ですか！？」

幽々子

「 寒さ近づく今の世に花咲かせようと想ってましたね」

タモリ

「 まさか十月に花見するとは、どうもありがとうございます。どうぞお掛けください」

幽々子

「 では失礼いたしますね」

幽々子が席に着席する。

タモリ

「あ、それは？」

幽々子

「神奈川県は大磯町の鷗立庵しづたつあんで3月25日に行われる西行祭のバス

ターよ」

タモリ

「西行祭？どんな祭りですか？」

幽々子

「3月末に最期を迎えた西行の遺徳を偲び、また俳諧道の振興を目的として事前に献詠された俳句・短歌の表彰と当日投句された俳句・短歌の表彰を行うの」

タモリ

「俳句や短歌を詠むコンテストみたいなものですか…。西行法師の前で詠むのは相当緊張しそうですねえ」

幽々子

「あら、そんな事はなくてよ？自然に読めば直すと浮かんでくるものよ」

タモリ

「でも作者が詠むと川柳になるんですよねえ。まず季語が何だか浮かばない…」

幽々子

「まあ、それは慣れですかね」

タモリ

「季語に穂子と静葉の二人は入るんですかね?」

幽々子

「いや、流石に無理あるでしょ…。まあ知名度が

タモリ

「ザックリ言いましたね! ?貼つといつづだいーーー」

タモリ

「お花も結構届いてますね~。ニコニコさんと上海アリス幻樂団、八  
雲家一同、四季映姫様、魂魄妖夢さんからもー。」

幽々子

「あら、閻魔様から?」

タモリ

「そのようですねえ。前回のお禮でしょうか?」

幽々子

「そのようね。顔合わせたのはいつぶりだったかしら…?」

タモリ

「そんな頭悩ませるほどなんですか?」

幽々子

「確か妖忌が子供だったころかしらね?」

タモリ

「だいぶ昔なんですねえーーー？」

幽々子

「そんなもんよ。説法を聞く者は数あれど、説教を聞きに行くほど殊勝な人はいないでしょーし」

タモリ

「いや、中にはあえて閻魔に寄つてくる人が…」

幽々子

「いなーいなー。いたとしたら人ではないわ。悟りを開いた聖人よ」

タモリ

「なるほど、確かにそんな“人”はいないでしょーねえ」

幽々子

「常人にそんな心持ちのある人がいたら見てみたいわ」

タモリ

「それにしても…妖夢さんの登場からずいぶん間が空きましたねえ」

幽々子

「そうねー。まったく妖夢つたら、後でどうしてあげようかしらーーー？」

タモリ

「うわあ…。なんかまざい一言言つたのかも」

幽々子

「まあ一番の原因是作者だけどね。大して考えもせぬノリで藍を選

んだんだから

タモリ

「思えば思ひでしたねえ……」

幽々子

「全く……ギャストリームで今晩にでも摘んで」よつつかしりん。夜限りの円錐草の花、散らせてみるのも悪くないわね」

タモリ

「やめてください……」の小説も散らせてどうするんですか?」

幽々子

「だれか代筆してくれるんじゃない?」

タモリ

「まざいないでしょ……」

幽々子

「相当聞かれてるからねえ……」の番組

タモリ

「やうですねえ……最近はどうですか?」

幽々子

「やうねえ……久しぶりに弾幕」ひつけたわねえ」

タモリ

「あへ、神靈廟の時ですね」

幽々子

「久しぶりに靈夢たちと戦つたと思つたが、妖夢とも戦つたからねえ」

タモリ

「主人と従者が戦つてアリなんですかねー?」

幽々子

「いやいや、あれはただのやうとした手合わせ。本氣でやつたりはしないわよ」

タモリ

「はたから見てるとそれでもないんですがねえ。妖夢さん斬撃飛ばしてきまーし」

幽々子

「うーん、前よりは良くなつたけどまだまだね。妖忌の域には達していないわ」

タモリ

「そりなんですかー?..?」

幽々子

「そりゃまだまだ…。あの子真つ直ぐな性格だから攻撃が少し单调なのよね。料理とか、庭師の腕とかは一級品なんだけど」

タモリ

「いやまあ、幽々子様が言つなんつうひどしつが…」

幽々子

「もう少し…思慮深くなつたら面白くなるんでしょうけど、あの子に“策略”とか“裏から手を回す”といつ言葉は向こうそつないのよねえ」

タモリ

「うーん、無理がありそうだなあ。あと十年はかかるかも？」

幽々子

「その頃には立派な従者になつてくれるト嬉しいんだけどねえ。まあ、気長に待つわよ」

タモリ

「なんか母と娘の関係みたいですねえ」

幽々子

「年の差からすると自然にそつなるものよ」

タモリ

「幾千年も過[.]してきた方の従者は大変そうだなあ…。剣術を妖夢さんから教わつたりしないんですか？」

幽々子

「今その必要はないでしょ？運動しなくても太らないし、敵はないし。刀つて重いのよねえ…」

タモリ

「うわ…まあ確かに幽々子様と一緒に戦える人はまずいないでしょが」

幽々子

「そうねえ… 妖夢が、ルナティックの私にラストスペルカードを使わせるほど強くなつたら少し考えてみましょつかね？」

タモリ

「妖夢さんが実質的な右腕となるのは長そうだなあ…」

（  
一  
旦  
C  
M  
）

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持つていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

幽々子

「さて… どうしましょうか？」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか？」

幽々子

「それじゃあ… “家に桜の木がある人” にします」

タモリ

「そうきますか…。では“家に桜の木がある人” スイッチオン！」

幽々子

「うん、2人ですか」

（

タモリ

「残念でしたねえ~」

幽々子

「でもいいわねえ、家でお花見できるんですか?」

（

一田CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下せー!」

『えーーーー』

幽々子

「では、私の親友、紫の式の式、橙を呼びます」

タモリ

「お、あの方ですかー!交流あるんですね」

幽々子

「宴会でちゅくちゅく顔合わせるほどだけどね

A/Dさんがあつがつた電話を幽々子に渡す

幽々子

「じゃあひま。幽々子よ

橙

「どうもこさんちねー!意外ですねえ……?」

幽々子

「ふふつ。確かにそうかもね。今何してた?」

橙

「マリヒガでちゅうどく飯を食べていたりました」

幽々子

「やう。ではタモリさん代わるわね」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです!」

橙

「もしもし、橙です!」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか?」

橙

「はー、空いてます!」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな?」

橙

「いこともー。」

タモリ  
「はい、お待ちしてます」

)

## 第四十一回・西行寺幽々子（後書き）

第四十一回、西行寺幽々子編いかがでしたか？

いや～、あのふわふわしたかんじとか、それでいて優雅な感じとか書くのは難しい！！紫や幽々子は難しいですよ！

優雅さを学ぶために大学で茶道をもう少し頑張ればよかつたかなあ…。面倒な作業が多くて単位とつたらOKみたいな感じでやつてたんですね。

昔の人の“わびさび”とか“雅”といった考え方の域に達するのは難しいですよ。妖夢は当分幽々子に振り回されるだろうな…。それに幽々子は剣を振つたりしないだろうな。庭で妖夢と一緒に素振りする幽々子はどうやっても想像できない…。

また、夜光沙羽さんの文々。コースに一昨日番組予告を受けたんですけどねえ…。奇跡のアポなし番組繋ぎは無理でしたねえ。夜光さんは毎日更新しているのをごいとします。私も見習わないとなあ…。

さて、次回の橙ですが、橙の次は誰に回そつか？妖々夢繋がりでプリズムリバーが第一候補なんだけど、三人をうまく書き分けられるかなあ？

問題がここにきて多く挙がつてきました…。計画としては神靈廟キヤラを最後に持つていきたいなーと思っていますが、どう回すかが難しいです。

今更ながら思つたけど小悪魔と親交がある人つて紅魔メンバー以外にいるのかなあ？ヤマメとキスメにはどう繋げようか？だんだんお友達紹介が無理やりになるかもしません。

次回は橙です！明日も見てくれるかな？

## 第四十一回・橙

（

タモリ

「はい、ここのまほ～」

『ほんわかまほ～』

タモリ

「今日は猫ちゃんですねえ」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「もうすぐ猫はこたつで丸くなる季節ですねえ」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「あ、迷信だったか。忘れてた…」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、前回の西行寺幽々子さんのお紹介で初登場、橙ちゃんですね～♪ひづれ～」

（

拍手と共に橙が登場！

『ちええええん～！！』

『可愛い～！！』

『可愛い～！！』

「どうもありがと～！～」

元気いっぱいに橙が登場！！

タモリ

「元気ですねえ～。あ、それは？」

橙

「東京は武蔵野市吉祥寺で、10月1日～30日に行われる吉祥寺ねこ祭りのポスターです！～」

タモリ

「あるんだそんな祭り！？」

橙

「はい。猫をモチーフにしたグッズや作品、イラストを販売する「ねこだらけ展」、三つ編みのかつらをした猫の写真展“3つ編みプロジェクト”を開催します」

タモリ

「へえ……」

橙

「他にも“吉祥寺ねこ祭り”“ねこだらけフェア”を行います。16日には、“飼い主のいない猫の譲渡会”が井の頭公園野外ステージ

で開かれます

タモリ

「そうなんですか……點つとこでちょうどいい……」

タモリ

「お花も結構届いてますね～。ニコニコさんに上海アリス幻樂団、八雲家一同、白玉楼、マヨヒガの猫一同からも……」

橙

「わあ～。ありがとうございます～！～！」

タモリ

「良かつたですねえ～！マヨヒガの猫ちゃん達からも……」

橙

「……」

タモリ

「慕つてくれているんですねえ」

橙

「……」

タモリ

「あの、橙ちゃん？」

橙

「は、はい～？」

タモリ

「花束にあるマタタビで夢中になつてたの?」

タモリ 橙

「あはは…すいません」

タモリ

「本能つけてやつですか…最近はどうですか?」

橙

「そうですねえ…。相変わらずマコヒガで猫たちと楽しく過ごして  
いるんですけど」

タモリ

「そうですか~」

橙

「なかなか言いつこと聞いてくれないんですね…」

タモリ

「ははは…」

橙

「とはいえる私も元は猫。流石に猫に向けてスペカ撃つのは気が引け  
るんですよねえ」

タモリ

「同族に向けて攻撃するのは何か後ろめたいですからねえ」

橙

「だけれどそのままにするわけにもいかないから……私も心を鬼にしましたよ」

タモリ

「おー何したんですか！？」

橙

「両手を広げつつ、こんな風に“フシャーー！”ってやつてみました」

『可愛い～！～』

タモリ

「……っははは、ダメだ、全然怖くない」

橙

「そんなんあ……」

タモリ

「まあまあ、気長にこきあしょつ

橙

「うーん。藍様みたいに早く大きくなりたいです

タモリ

「そう焦らないでいいですよ。将来は藍様みたいになりたいですか？」

橙

「そうですね！私も強くなりたいです」

タモリ

「ああ、やせつやつめますか」

橙

「そして紫様のサポート要員になりたいですね」

タモリ

「橙ちゃんがー..」

橙

「藍様と共に異変解決したいですねーー」

タモリ

「藍様は納得しないんじゃないですか?」

橙

「え? いいアイデアと思いませんか? 藍様と私でぐるぐる回りつつシヨウトを決めていつたらかっこいと思いますよ?」

タモリ

「橙ちゃんにシヨウト当たつたら藍様相撲怒るんだろうなあ…」

橙

「あはは…」

タモリ

「四面楚歌チャーミング全力でやつやつな気がする」

橙

「いえいえ、藍様もスペカで私を使いましたよ?」

タモリ

「へ?あ、そうでしたね!妖々夢で…」

橙

「それで、私と藍様と紫様で合体スペカ作ったらカッコいいでしょ!」</p

タモリ

「三人合体スペカ!?」

橙

「名前は何にしようかな~」

タモリ

「なんか避けれそうもないなあ…紫様一人でも相当つらいのに。あれ?ってことは…」

橙

「?」

タモリ

「紫様も回るんですか?」

橙

「いやそれは無いですよー?」

(`)

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

橙

「さて…どうしようかなあ?」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか?」

橙

「じゃあ…“芸ができる猫を飼っている人”にします」

タモリ

「では“芸ができる猫を飼っている人”スイッチオン!」

(

橙

「うーん、0人ですか」

タモリ

「残念でしたねえ~」

橙

「流石に難しいのかなあ…」

(

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『えへーーー』

橙

「では、東方妖々夢で共演したルナサ・プリズムリバーさんを呼びます」

タモリ

「お、あの方ですかー！というか、まとめて呼んだりしないんですねえ」

橙

「昨日三人に聞いたら『絶対に一緒にしないでーーー』と念押しされましてね」

ADちゃんがつながった電話を橙に渡す

橙

「ここにちはーーー！」

ルナサ

「どうもここにちはーーー！」

橙

「ひやつて話すのも久しぶりですねえ…今何してました？」

ルナサ

「いつも通り三人で音合わせ中」

橙

「そうですか～。ではタモリさんに代わります！！」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

ルナサ

「もしもし、ルナサです！」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

ルナサ

「はい、空いています」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

ルナサ

「いいとも～！」

タモリ

「はい、お待ちしてま～す」

（

## 第四十一回・橙（後書き）

第四十一回、橙編いかがでしたか？

橙は結構書きやすかつたかな？でも本来のイメージから少し変化させたような、意外なことが書けなかつたのが残念…。少しキレイがなくなつてきましたね。

次回からはルナサ メルラン リリカの順でいきます。次回も見てくれるかな？

## 第四十二回・ルナサ・プリズムリバー

（

タモリ

「はい、こんにちは～」

『こんにちは～』

タモリ

「もう10月も終わりですねえ」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「もう11月ですねえ。文化祭はもう終わったかな？」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「今更ながら思つたけど、穂子さん早く出さないとネガティブになつちゃいますねえ」

タモリ

「それでは登場していただきましょ～。前回の橙ちゃんの紹介で初登場、ルナサ・プリズムリバーさんです～ど～ぞ～」

（

拍手と共にルナサが登場！

『ルナサ～！～』

『可愛い～！～』

ルナサ

「どうも。初めましてルナサです」

タモリ

「初めまして。あ、それは？」

ルナサ

「兵庫県淡路島の南あわじ市、古民家charaby sheep  
-cherryで11月29日に行われるヴァイオリン・チロのティ  
ュオコンサートのポスターです」

タモリ

「淡路島！？あそこ兵庫になるんですねえ！？」

ルナサ

「そこに食いつくんですか！？」

タモリ

「ははは…。バイオリンのコンサートですか。貼つとこひょうつ  
だい！～」

タモリ

「お花も結構届いてますね～。NICOさんご上海アリス幻樂団、白  
玉楼、メルランさん、リリカさんからも！」

ルナサ

「身内だけだ…。白玉楼つてお得意様一つだけだ…」

タモリ

「そんな露骨にへこまないでくだれこーーー！」

ルナサ

「私のせいかなあ…。鬱<sup>うつ</sup>にさせらる音が駄目だったのかなあ。テンションが…下がる」

タモリ

「いやいやーそんなへこまないでー。」

ルナサ

「だからねえ…最近いろいろ変えていいつかと」

タモリ

「お、何ですか？」

ルナサ

「いつそギターに変えよつかと」

タモリ

「絶対だめでしょーー！存在意義はーー？」

ルナサ

「時代に合つてゐるしこんなあと思つて…。人気あるんでしょーー！」

タモリ

「確かにありますけど…」

ルナサ

「影響力大きいですからね～」

タモリ

「幻想郷にまで広まってきたんだ…」

ルナサ

「だからいいかな～と思って…。それにミスティアならたぶんボーカルいけますよ。これで人気は上がるはず！」

タモリ

「どれだけ変える気ですか！？バンド結成？」

ルナサ

「何せけいおんの東方パロディに、音楽と関わる私たちが使われなかつたんですから…。じゃあ私達自ら作ってやるうかと」

タモリ

「でもキーボード以外に軽音楽と関わる人いないでしょ～？ギターがルナサさんでもドラムとベースはどうするんですか？」

ルナサ

「ドラムは四季様に頼んで…」

タモリ

「悔悟の棒でドラム！？」

ルナサ

「品を慣れてこらでしょ！」

タモリ

「小町さんの頭だけです！最もバンドに合ってない人にでしょー！」

ルナサ

「ベースはキャラ的にアリスさんかなあ？」

タモリ

「サポート役つて」と一々なにサラシと毒吐いてるんですか！」

ルナサ

「流石に無理あるか……。早苗さんは？女子高生ですよー。女子高生ー。軽音楽いけるんじやないですか？」

タモリ

「……奇跡起にして無理やつやつてのけそつだなあ

ルナサ

「それが無理なら……せめてバイオリンを畳に使つてほしいですね」

タモリ

「あー、でもどう考えても難しそうですしね……」

ルナサ

「だからバイオリンを使った歌でヒット曲出ないかなーと思つているんですね。したら興味を持つかも……」

タモリ

「バイオリンで？」

ルナサ

「バイオリンで」・POPで

タモリ

「ハードル高いなあ…。バイオリンのどこにもポップな感じしませんよ?」

ルナサ

「秋元さんでも無理かなあ?」

タモリ

「流石にきついでしょ!」

ルナサ

「やつぱりなあ…。いつなつたら自分で作詞作曲するしかないかなあ?」

タモリ

「プリズムリバー三姉妹で曲作りですか?」

ルナサ

「それで、ボーカルはミスティア…いや、あのヤマビコもこいいかも」

タモリ

「響子ちゃんを…?」

ルナサ

「肺活量ありそつでじょ!」

タモリ

「確かに大声のプロといえばプロですか？」

ルナサ

「彼女ならマイクいらないと困ります」

タモリ

「マイクなくても幻想郷のビームでも響きあうんですね？」

ルナサ

「ピアノ曲相当出せると思こますよ～」

タモリ

「名前からして演歌向きと思つたですがねえ」

ルナサ

「K y o k o K a s o d a ニット変換したらアーティストみたいになるかな？」

タモリ

「エグザイルみたいですねえ…」

ルナサ

「なら私もLuna s a s a P r i s m Riverと名乗るつかない？」

タモリ

「止めてください。読みづらいやじゅう？」

ルナサ

「あとは曲のジャンルだな。バイオリンなら感動するような歌がい

いかな？」

タモリ

「いろいろ考えるんですねえ」

（  
一日CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

ルナサ

「さて…どうしようかな？」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか？」

ルナサ

「じゃあ…“バイオリンが家にある人”にします」

タモリ

「では“バイオリンが家にある人”スイッチオン！」

ルナサ

「…0人か」

タモリ

「残念でしたねえ」「

ルナサ

「うう…。日本でバイオリンは合わないのかなあ…」

一曰CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい!」

『えへへ…』

ルナサ

「では、妹のメルラン・プリズムリバーを呼びます」

タモリ

「お、やはりそうきますか!」

ADさんがつながった電話をルナサに渡す

ルナサ

「もしもし、やあメルラン」

メルラン

「ああ、姉さん」

ルナサ

「別々に行動するのは久しぶりだな…今何してた?」

メルラン

「ん~。合奏練習できないうから軽いソロライブしてた」

ルナサ

「えー? ソロライブ? 何それ! 私も行く! タモリさんに代わるから! !」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしシタモリです」

メルラン

「もしもしシ、メルランです!」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか?」

メルラン

「はい、空いています」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな?」

メルラン

「いいとも~!」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

}

## 第四十三回・ルナサ・プリズムリバー（後書き）

第四十三回・ルナサ・プリズムリバー編いかがでしたか？

会話が少ないので、口調とか、いまいち分かりづらいわ、何回もムラサと打ちそうになるので大変でした。

なんか思いつきり一発！って感じにいじりましたね。もはやルナサの話から外れていなか？と思いましたが書いちやいました。

バイオリンを使う歌謡曲…はあるのでしょうか？何かバツと思いつきませんね。もしかしたらギターに変える日が…来たらマズイなあ。Youtubeで「けいおん 東方」って検索したらプリズムリバーは全く出演してなかつたので軽音楽の話書いちやいました。

次回はメルランです。次回も見てくれるかな？

第四十四回・メルラン・プリズムリバー

（

タモリ

「はい、こんにちは～」

『こんにちは～！～』

タモリ

「今日はトランペッターですねえ」

『そ～ですね！～』

タモリ

「気分は少しハイな方ですねえ」

『そ～ですね！～』

タモリ

「最高に“ハイ！”ってやつ…いえ、止めときましょ～」

タモリ

「それでは登場していただきましょう。前回のルナサ・プリズムリバーさんの紹介で初登場、メルラン・プリズムリバーさんです！どうぞ～」

（

拍手と共にルナサが登場！

『メルラン～！！』

『可愛い〜〜〜！』

「ありがとう……ではお礼……」

そういう、愛用のトランペットを吹いた！

3  
!

『俺らの姫様メルランちゃん！ハイハイハイハイ！』

タモリ

ーおお、みんなハイになれてきてる!!!」

メルラン

卷之三

タモリ

「…………」瞳でお尋ねの声持た溌しくなり

メルラン

「少しハイにしちゃったかな?」

タモリ

「こんな盛り上がった声援は初めてかも…。あ、それは?」

メルラン

「11月17日に大阪府大阪市のザ・シンフォニーホールで行われるトランペッタ協奏曲の演奏会、オーレ・エドワルド・アントンセンのポスターです!」

タモリ

「おお…。じりやまたずいぶん凄そうな」

メルラン

「す、」いと思いますよ~。日本トランペッタ協会(HTTA)のサイトにありましたから」

タモリ

「そんな協会あるんだ…。貼つといてちょうどい!」

タモリ

「お花も結構届いてますね~。ニコニさんに上海アリス幻樂団、白玉樓、ルナサさん、リリカさんからも…」

メルラン

「あちや~。ま、じんなもんかな?」

タモリ

「ははは…。最近はどうですか?」

メルラン

「最近は…トランペッタが使われる機会が増えて嬉しいです!」

タモリ

「といいますと?」

メルラン

「始まつたじゃないですかー! クライマックシリーズが!…」

タモリ

「あ〜、野球は今からが盛り上がりますからねえ!」

メルラン

「試合あるたびにトランペッタ大活躍よ! 嬉しいわね~」

タモリ

「応援には欠かせないですからねえ」

メルラン

「こつそ阪神のトランペッターにならつかしら?」

タモリ

「ダメでしょーー! ランペッターーー!」

メルラン

「私ながらよつー層盛り上がるわよ?」

タモリ

「ハイになりすぎてテッドボール一回で乱闘が起こつたらどうするんですか…」

メルラン

「いいじゃない。それも一つの醍醐味よ?」

タモリ

「野球じゃなくなっちゃうでしょ…。昔は多かつたみたいだけど」

メルラン

「私もあんな風にトランペッタで応援してみたいわ~」

タモリ

「応援ですか?」

メルラン

「幻想郷じゃあスポーツはないからねえ…」

タモリ

「とはいって、妖怪と人間が一緒になつてできるスポーツは弾幕以外無いんじゃない?」

メルラン

「卓球は?あれは力入れすぎたらアウトになるでしょ?」

タモリ

「ピンポン球が耐えられないと思いますよ…」

メルラン

「う~ん…。面と向かい合いつスポーツ道具使わないとなると難しいわね」

タモリ

「力の差が激しいですからねえ」

メルラン

「運動会は？」

タモリ

「運動会！？」

メルラン

「“幻想郷一帯借り物レース”とか“弾幕障害除け競争”、玉入れならぬ“弾当て”ならいけるんじやないかしら？」

タモリ

「あ～、確かにそれなら…」

メルラン

「妖怪チームと妖怪以外のチームで紅白に分けてやつたらいと思うわ～。その時はぜひとも盛り上げて見せるわよ！」

タモリ

「それいいかもしけませんねえ」

メルラン

「ただ誰も乗らないんだよね…」

タモリ

「道は遠いようですねえ」

メルラン

「あとは…マーチングなんてどうかしら?」

タモリ

「あ、それいいですねえ!」

メルラン

「ただメンバーがねえ…。私たちプリズムリバー三姉妹に、ミスティアに響子。これだと音色のバリエーションが少なく感じてねえ。少人数だし」

タモリ

「難しいものですねえ」

メルラン

「他にもメンバーになりそうな人探してみよつかしら?地底のアイドルヤマメさん、ダンサーの衣玖さん…」

タモリ

「くくりが少しおかしい気がするけど…」

メルラン

「トライアングル担当の一輪さん」

タモリ

「あれ腕輪でしょー!いい音鳴りそうだけどー!」

メルラン

「人集め担当の小町さん」

タモリ

「錢投げて集める訳！？」

メルラン

「騒ぐのが好きそつな鬼一人も呼んでみようかしら？」

タモリ

「もはや百鬼夜行でしょう！」

一曰CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

メルラン

「うへん…どうしようかな？」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか？」

メルラン

「じゃあ…“トランペッタで一曲吹ける人”にします」

タモリ

「では“トランペッタで一曲吹ける人”スイッチオンー！」

（

メルラン

）

「2人か」

タモリ

「残念でしたねえ」

メルラン

「でも嬉しいわねえ！来てよかつた」

（

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え～～！～』

メルラン

「では、妹のリリカ・プリズムリバーを呼びます」

タモリ

「お、やはりそうきますか！」

ADさんがつながった電話をメルランに渡す

メルラン

「もしもしリリカ？」

リリカ

「ああ、姉さん」

メルラン

「今終つたわ。何してた?」

リリカ

「白玉楼での//ライブが今終つたとこ」

メルラン

「そう。じゃあタモリさんに代わるから

電話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

リリカ

「もしもし、リリカです！」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

リリカ

「はい、空いてるわ

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

リリカ

「いいとも～！」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

)

## 第四十四回・メルラン・プリズムリバー（後書き）

東方いいとも第四十四回、メルラン・プリズムリバー編いかがでしたか？

初っ端からハイにさせちゃいましたね。その空気が伝わればいいのですが…。

トランペット 応援 運動会といった話となりましたが、これは前に書こうと思い途中で断念したもののアレンジです。

妖怪と神とか、妖怪と幽霊ならまだしも人間は太刀打ちできるのか？そもそも短編ほどの長さに繋げられそうになくて止めたんですがね。

書きたいと思われる方がいたらどうぞ持つていって頂いて構いません。

次回はリリカです。次回も見てくれるかな？

第四十五回・リリカ・プリズムリバー

（

タモリ

「はい、こんにちは～」

『こんにちは～！』

タモリ

「今日はキーボード奏者ですねえ」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「作者ももつてるんですよ。キーボード」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「何が弾けるかって？今はホコリ被つてます」

タモリ

「それでは登場していただきましょう。前回のメルラン・プリズム  
リバーさんの紹介で初登場、リリカ・プリズムリバーさんです！ど  
うぞ～」

（

拍手と共にリリカが登場！

『リリカ～！～』

『可愛い～！～』

リリカ  
「ど～も～！」

愛用のキーボードと共にリリカ登場！～

タモリ  
「どうも～。あ、それは？」

リリカ

「北海道札幌市の札幌スクールオブミュージック専門学校（SSM）と札幌放送芸術専門学校（SBA）で12／18に行われるパークエクト・アニソン教室 V.O.I.・1のポスターです！」

タモリ

「へえ…そんなイベントが？」

リリカ

「札幌の同人音楽サークルIOSYSが贈る、アニソン・メインのライブ・イベントです！」

タモリ

「そうですか～。貼つといてちょうどいい！」

タモリ  
「お花も結構届いてますね～。ニコニコさんに上海アリス幻樂団、白

玉楼、ルナサさん、メルランさんからも…」

リリカ

「え〜。花映塚で共演した人達からないの?」

タモリ

「あのときはじっぱい出演しましたからねえ」

タモリ

「ん〜。ま、そんなものかな」

タモリ

「ははは…。最近はどうですか?」

リリカ

「やうねえ…。あいかわらずライブやつたりしてるんだけど…」

タモリ

「あ、そつなんですか〜」

リリカ

「でも知名度がね〜。テーマ曲も人気少ないし」

タモリ

「成程ねえ」

リリカ

「だからひロヂビローしたいな〜と思いましてね」

タモリ

「アーティストの仲間入りですか！？」

リリカ

「音楽ランキング100位以内に入りたいなあ……」

タモリ

「大きく出たねえ！」

リリカ

「でも今のままじゃねえ……」

タモリ

「あ～」

リリカ

「だからCDと一緒にPVを作つてはどつかと思つてね」

タモリ

「プロモーションビデオを…じゃあ文さんが撮影？」

リリカ

「いや、あのブンヤは…。無駄にセクシーショット要求しそうでね

タモリ

「信用ないなあ…」

リリカ

「だから現代文明をよく知る早苗さん」「プロコースを任せました」

タモリ

「そのほうがダメでしょー?」

リリカ

「カメラマンがはたてさんです」

タモリ

「携帯で撮る気ですか!/?動画撮影機能あつたつけ?」

リリカ

「シンセサイザーは鈴仙です」

タモリ

「出来るのー?」

リリカ

「でもライブスタジオがね。防音材になる建物が無いんですよ。音漏れするし騒音で周りが嫌がるし」

タモリ

「それは確かに……」

リリカ

「あのスキマ空間で収録させてくれないかなあ

タモリ

「紫さんに頼むのー?」

リリカ

「もつアイデアは出来るそつなんですよ~」

タモリ

「PVの？」

リリカ  
「なんでも早苗が幻想入りする少し前に流行っていた曲を元にする  
そうで」

タモリ

「そなんですか？」

リリカ  
「早苗いわく、ホントは永琳に登場して欲しかったそなんですが  
ダメでした」

タモリ

「永琳さんを？」

リリカ  
「宇宙にかかる人だからそうです。あと霖之助にも出演依頼をし  
たそうで」

タモリ

「へえ……」

リリカ

「男性キャラが欲しかったそうです。まあ断られたんですがね。仕  
方ないから3人でダンスして収録することになりそうです。5人の  
予定だったそうですが」

タモリ

「へえ…」

リリカ

「衣装も少し変えるそうですよ。ルナサ姉さんが黄色のリボンつけたり私がメガネかけたり」

タモリ

「いろいろ変えるんですねえ」

リリカ

「でも一番驚いたのがルナサ姉さんにつけられた腕章だつたなあ」

タモリ

「腕章？」

リリカ

「なぜか知らないけど“団長”って書かれていたわ」

タモリ

「何させる気ですかあの女子高生！！ハルヒは無理が有り過ぎる…！」

（旦CM）

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持つていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

リリカ

「うへん…どうじょうかな?」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか?」

リリカ

「じゃあ…“キーボードで一曲、東方の曲が弾ける人”にします。  
ピアノ弾ける人は多いですからね」

タモリ

「では“キーボードで一曲、東方の曲が弾ける人”スイッチオン!」

（

リリカ

「あ、一人!!」

ADさんからストラップが渡される

タモリ

「あ、あの人だ!!  
手を擧げる女性を指です。」

リリカ

「ありがとうございますー来てよかったですー」

タモリ

「ちなみに何が弾けますか?」

『シンデレラゲージ』

リリカ

「やっぱり私のじゃ無かつたか？」

（

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え～！～！』

リリカ

「では、音楽つながりでミステイア・ローレライを呼びます」

タモリ

「お、夜雀さんですか！」

ADさんがつながった電話をリリカに渡す

リリカ

「もしもしし～」

ミステイア

「はい、もしもしし～」

ジユ～！ジユ～！

リリカ

「相変わらず繁盛してるよしみ」

ミステイア

「ちょうどピーチだからね。うなぎ焼きながら見てたわ」

？？

「ちょっとーー次あなたなのーー？」

リリカ

「えーー？誰？」

穂子

「穂子よーー秋が終わると鬱になるから早く出たいのよーー」

ミステイア

「お、落ち着いてください！いやごめん。いつまでたつても作者が穂子さん出さないからウチでやけ酒飲んでるのよ」

穂子

「余計な事を言つなーー！」

リリカ

「そ、そ。じゃあタモリさんに代わるから」

電話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

ミステイア

「もしもし、ミステイアですーー」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか?」

ミスティア

「はい。明日は夕方から開店致します」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな?」

ミスティア

「いいとも~!」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

)

## 第四十五回・リリカ・プリズムリバー（後書き）

お久しぶりです。第四十五回・リリカ・プリズムリバー編いかがでしたか？

またリリカと関係が少ない話になつたなあ…。幻想郷初のPVは上手くいくのでしょうか？「う」期待（誰に…）

早苗をネタに出そうとして風神録を調べたら、風神録発売が2007年。ハルヒ一期放送が2006年だから早苗は知ってるかも？と思いつきました。

でもイメージしにくいな…。帽子外すとプリズムリバーと気づかれなくなるかも？

穢子は11月中には書きたいなあ。でも鬱の穢子ネタもいいかも？

次回はミステイアです。次回も見てくれるかな？

第四十六回・ミステイア・ローレライ

（

タモリ

「はい、ころにちま～」

『こんにちま～』

タモリ

「お久しごりですねえ」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「今日は夜雀さんですねえ」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「ウナギ屋やつてゐやつですねえ」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「ウナギ…作者も少年時代に釣りに行きましたよ」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「投げ釣りなんですよ。サオを二つ… ヒゴと投げて」

『そ～ですね…』

タモリ

「力強すぎてサオが真つ一つに折れました。何やつてんだか…」

タモリ

「それでは登場していただきましょう。前回のリリカ・プリズムリバーさんの紹介で初登場、ミステイア・ローレライさんです！どうぞ～」

（

拍手と共にミステイアが登場！

『みすち～！～』

『可愛い～！～』

ミステイア

「ど～も～！はじめまして～」

陽気に歌いつつミステイア登場～！～

ミステイア

「テレフォンテレフォンショッキング～ 今日のゲストは誰でしょね～？」

タモリ

「ちゅうとー・ミスティアさんストップ！－みんな鳥田になつひやつから！」

ミスティア

「その黒いメガネのせいじゃなくて？」

タモリ

「これは強い光を遮るだけです！－あ、それは？」

ミスティア

「毎年7月頃に宮城県仙台駅東口宮城野通りで行われる、夏祭り仙台すずめ踊りのポスターです！」

タモリ

「仙台すずめ踊りですか？」

ミスティア

「踊りがえさを食べるすすめに似ていて、藩主の伊達政宗さんの家紋も“竹に雀”なのですすめ踊りだそうです」

タモリ

「そりなんですか～。貼つとこつけよつだい！」

タモリ

「お花も結構届いてますね～。ZICOさんに上海アリス幻樂団、文々。新聞、伊吹萃香さん、博靈神社、霧雨魔法店からも！」

ミスティア

「よく店にきますからね～。ありがとうございます。でも靈夢と魔理沙はツケが溜まってるんですけどね」

タモリ

「あの一人ですかね~。しかし…ずいぶん繁盛しているようですね」

ミスティア

「ありがたいですねえ」

タモリ

「でもヤツメウナギって結構見た目グロテスクですよね…」

ミスティア

「そうですね~。あの口がね~。丸い口に歯がびっしり生えているんですね」

タモリ

「調べてみてびっくりしましたよ…。噛まれたら痛そうですねえ」

ミスティア

「でもホントにビタミンAが豊富で、夜盲症やもうじょうにいいんですよ?」

タモリ

「夜盲症?」

ミスティア

「ビタミンA不足で起こる病気で、明るい所から暗い所に移動すると目が慣れるのに長く時間がかかる病気です」

タモリ

「へえ~」

ミスティア

「だから疲れ目の人にはいいんですよ。弾幕ゲーマーのかた、ヤツメウナギの干物なんていががですか？おやつ感覚で食べられますよ？」

タモリ

「ヤツメウナギ食べながら東方ですか！？風流といつか凝つてると  
いうか…。『永夜抄』なら雰囲気出るかな？」

ミスティア

「あの図書館の魔女も食べたらどうかしら？」

タモリ

「パチュリーさんが？無理あるだろ？」

ミスティア

「いやいや、西洋でも食べられていますよ。ヤツメウナギ」

タモリ

「え！？ そりなんですか？」

ミスティア

「フランスでは“ヤツメウナギのボルドー風”なんてあるみたいで  
すし。赤ワインで煮込んだ名物料理らしいです。紅魔館のメイドに  
聞いたんですがね」

タモリ

「意外だったなあ…。全く想像できない」

ミスティア

「でも幻想郷じゃ和風の料理がメインなんですけどね」

タモリ

「そうですねえ」

ミスティア

「それで、新しくお客を増やすために新メニューを考案中なんですけど」

タモリ

「新メニューを?」

ミスティア

「幻想郷にも人が増えたじゃないですか。女子高生に神、寺の尼さんに神靈…。その人たちにも受け入れられるヤツメウナギの料理を考案中なんです」

タモリ

「難しい話だなあ…」

ミスティア

「やはり食べづらい面があるみたいですね。それ克服すれば、さらにお客さん増えると思うんですけど…」

タモリ

「うーん。藍さんや咲夜さんに相談するとか?」

ミスティア

「どうちもなかなか会えないからなあ…。あ、タモリさん。この世

界で料理に詳しい人に聞いといてくださいよー。」

タモリ

「え？ でも誰がいいかなあ？」

ミスティア

「あの番組なんてどうですか？」

タモリ

「何です？」

ミスティア

「キューピー3分クッキング」

タモリ

「ヤツメウナギのいい調理法なんて知らないでしょーーー！」

ミスティア

「取り上げてくれないかなあ？」

タモリ

「誰が参考にするんですか！ 見てもヤツメウナギ調理しようつと思わないでしょーーー！」

ミスティア

「あとは歌を披露したいわね～。のぞ血饅山出てみたいわ

タモリ  
「のぞ血饅ですか～」

ミステイア

「幻想郷でやつてくれないかしら？」

タモリ

「そこまで口ケに行けませんよ…。大体、幻想郷の方々って何歌う  
んですか？」

ミステイア

「うーん、妖精なら童謡。古参妖怪は昔から伝わる歌や演歌みたい  
なものが多いかな？」

タモリ

「なるほどなあ…」

ミステイア

「あ、でも早苗はなんか違う感じの歌を口ずさんでいたわ」

タモリ

「お、どんな歌です？」

ミステイア

「カン リーロード」

タモリ

「似合ひすぎでしょ…」

（  
一  
旦  
C  
M

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

ミステイア

「う~ん…どうしようかな?」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか?」

ミステイア

「じゃあ…。歌が好きなんで“カラオケで95点以上出したことがある人”になります」

タモリ

「では“カラオケで95点以上出したことがある人”スイッチオン!」

♪

ミステイア

「あ、1人!!」

ADさんからストラップが渡される

タモリ

「あ、あの人だ!!」

手を挙げる女性を指さす。

ミステイア

「ありがとうございます!」

タモリ

「95点…?すゞ」こねえ~」

ミスティア

「うちの屋台で共演しませんか?」

タモリ

「いやいや、それはダメでしょ…」

一田CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい!」

『え~!~』

ミスティア

「では、前回約束した秋穂子さんを呼びます」

タモリ

「お、なんとか11月に登場しますか!」

ADさんがつながった電話をミスティアに渡す

穂子

ミスティア

「もしもし?」

「はい、もしもし〜」

ミスティア

「お久しぶりです。何してました?」

穂子

「秋の収穫も終わつた、田園風景を眺めていたわ

ミスティア

「少しづづーになつていますねえ…。じゃあタモリさんに代わるか  
ら

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

穂子

「もしもし、穂子です!」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか?」

穂子

「はい!絶対行きます!何が何でも!」

タモリ

「ははは…。じゃあ、明日来てくれるかな?」

穂子

「いいとも～！」

タモリ

「はい、お待ちしてま～す」

）

## 第四十六回・ミステイア・ローレライ（後書き）

第四十六回、ミステイア・ローレライ編いかがでしたか？  
ヤツメウナギをウイキペディアで見てびっくりしました。あれも  
うエイリアンに近いんじゃないかな？と驚きまくりです。

でも眼にはいいですよ？もしかすると鈴仙も目を良くするために  
食べていたりして…

しかし、幻想郷ではどんな歌が歌われているんだろう？全く想像つか  
ませんねえ。

次回はこの時を待ちに待つてた（と思つ）穢子です！次回も見てく  
れるかな？

第四十七回・秋穂子

(

タモリ

「はい、こんにちは～」

『こんにちは～！』

タモリ

「今日は秋の神様ですねえ」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「もう秋も終わりかけてるんですけどね」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「鬱になつていなければいいんだけど…」

タモリ

「それでは登場していただきましょう。前回のミスティア・ローレライさんの紹介で初登場、秋穂子さんです～！どうぞ～」

(

拍手と共に穂子が登場！

『秋神様～！！』

『可愛い～～～！』

穂子

「どうも～！初めまして～」

甘い香りとともに穂子登場！！

タモリ

「どうも初めまして～。あ、それは？」

穂子

「はい、兵庫県高砂市の高砂神社で毎年10月10日と11日に行われている例大祭のポスターです！」

タモリ

「へえ…。高砂神社？」

穂子

「はい。そこで天禄の頃、疫病がはやったためスサノオノミコトとクシナダヒメを祀ったのが始まりです。年ごとの報恩感謝のお祭りです」

タモリ

「クシナダヒメ？」

穂子

「稻田姫様のことですね」

タモリ

「そ、うなんですか～。貼つといてけりやうだい～」

タモリ

「お花も結構届いてますね～。エリザさん、上海アリス幻樂団、守谷神社、秋静葉さん、鍵山雛さん、人里の方々からも！」

穂子

「おお～！ ありがとうござります… つて～！ 花と一緒に農作物やお神酒が～？」

タモリ

「秋の神様だからお供え物が必要と考えたんでしょうな～」

穂子

「何か祭壇みたいね…。でも本当にありがとうございます」

タモリ

「最近はどうですか？」

穂子

「いや～。最近冷えてきて…。少しブルーになつつありました」

タモリ

「冬になると鬱になりますからねえ」

穂子

「稻刈りの終わった田んぼ見ると物哀しくなるのよねえ」

タモリ

「まあ確かにそうですね」

穡子

「あと一週間出演が遅かったら大変だっただわよ。トーケンシードなんてもどとも…」

タモリ

危ながたですねえ

「ニードハ 最近なじめナガ」

タモリ  
「はい」

穡子

「静葉が秋の紅葉キャンペーン始めたんですねよ」

タモリ

穉子

「もうすぐ終わりだけどね。最適な紅葉スポットに静葉自身が連れて行ってくれるツアーナんですよ。人里のカップルに人気なんですよ」

タモリ  
「へえ」

穉子

「それで、私も負けてられないな」と思いました。もつと農業が広

まるみつのお店を始めたんですよ」

タモリ

「何のお店ですか?」

穂子

「秋の物産展です。秋限定で経営している、秋の味覚をまとめた店ですよ」

タモリ

「かなり身近な神様だなあ。神様自らお店開くんですね?」一押しの商品はなんですか?」

穂子

「おススメは“穂子手作りスイートポテト”ですね」

タモリ

「作れるんだ!?」

穂子

「早苗さんに畠つて作ってみました。豊穂を司る能力で一番旬なさつまごもを贅沢に使い、一つ一つ丁寧に作り上げた一品です。おつどりですか?」

そういう、ハンドバックからスイートポテトを取り出す。

タモリ

「あ、どうもありがとうございます。いい香りですねえ~。うん、ほんのり甘くて食べたくなります」

穂子

「ありがとうございます。これが人気なんですよ～お土産に人気でして」

タモリ

「いいですねえ。子供からお年寄りまで好かれる味でしょう」

穂子

「他には…“収穫したてのぶどうパン”、“妖怪の山のじいたけの甘露煮”、“河童が釣ったアユの塩漬け”などなど…」

タモリ

「にとりが釣ったの!？」

穂子

「穴場を知っているそうです。数量限定なのでお早めに!..」

タモリ

「いろいろ考えるねえ」

穂子

「ゆくゆくは飲食「一ナードしたいな」と思っています」

タモリ

「なんですか?」

穂子

「旬のものをその場で調理してお出しするんです」

タモリ

「いいですねえ。ぜひ行ってみたいですね」

穂子

「ただ、海がないからメニューが少し偏りがちなんですよね。魚が無いのがつらい…」

タモリ

「あ～なるほど」

穂子

「うーん飯ものや野菜なら結構いけるんですけどね。栗ご飯にキノコご飯、炒り銀杏に里芋の煮つ転がし、松茸の土瓶蒸し…」

タモリ

「松茸あるんだ！？」

穂子

「妖怪の山秘密伝のスポットがあるんですよ。神や一部の妖怪しか知らない場所にあるんです」

タモリ

「すごいな。でも一人で出来ないでしょう？」

穂子

「妖怪や人里のいろんなお店に協力してもらつて、みんなで秋を盛り上げようというわけです。農産物の直売所コーナーもありますよ？」

タモリ

「直売所あるんだ！？」

穂子

「ありがたいことに寅丸星さんが『』の御ひいきになつて頂いて。話題が広まつてくれたんですよ」

タモリ

「招き猫ならぬ招き虎ですか…。縁起いいですねえ。よつと多くお金が入つてきやう」

穂子

「そう思つてアリスさんに“開運！招き虎ぬいぐるみ”を発注しました。近日私の店で販売します！」

タモリ

「商魂たくましいな！？」

一曰CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持つていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

穂子

「うへん…どうかしら？」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか？」

穂子

「じゃあ… “干し柿を家で作っている人” にします」「

タモリ

「では“干し柿を家で作っている人”スイッチオン!」

（

穂子

「あ、一人! !」

ADさんからストラップが渡される

タモリ

「あ、あの人だ! !」

手を挙げる女性を指す。

穂子

「ありがとうございます! やつた! お姉ちゃん取れなかつたから良かつた~」

タモリ

「良かつたですねえ~」

（  
一曰CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい!」

『え~! !』

穂子

「では、同じく神様の洩矢諭訪子さんを呼びます」

『おむ～ー。』

タモリ

「お、神様つながりですか！」

ADちゃんがつながった電話を穂子に渡す

穂子

「もしもし？」

諭訪子

「はい、もしもし～」

穂子

「（）無沙汰しています。今、何されていました？」

諭訪子

「祈祷が終わって、いま一度お昼（）飯。いや美味しいわ～このしげたけの甘露煮。この前もらったスイートポテトも美味しかったよ」

穂子

「どうもありがとうございますーではタモリさんに代わります」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

諏訪子

「もしもし、諏訪子です！」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

諏訪子

「はい。大丈夫だよ」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

諏訪子

「いいとも～！」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

（

## 第四十七回・秋穂子（後書き）

第四十七回、秋穂子編いかがでしたか？

TPPの話は書いててボロが出そなんで、穂子様が店を開くという話にしました。なんか無性にスイートポテト食べたくなつてきた…。でも店がない。

妖怪の山は自然の宝庫だろうから、秋の味覚が満載なんだろなー。文とかにとりはこつそり良いものいっぱい食べてたりして。

いつそ文はグルメ雑誌書いたほうがいいんじゃないかなあ？“特集！藍さん直伝、旬の山菜稻荷寿司”とかのほうが興味がわくと思うのは私だけ？

招き猫ならぬ招き虎とかあつたら即買いしますね。“ご利益ありそうで衝動買いしそう…。橙やお燐の招き猫もいいけどね。実際に星が出入りする店があつたら、買つ気なくとも店に入るでしょうね。”何買つているんだろ～”ってこつそり後からつけると思います。

次回は洩矢諷訪子です。祟り神様は何を語るのか？次回をお楽しみに！

第四十八回・洩矢諭訪子

（

タモリ

「はい、こんにちは～」

『こんにちは～』

タモリ

「今日も神様ですねえ」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「しかも祟り神ですねえ」

『そ～ですね～！～』

タモリ

「コメント氣をつけないとな～。鉄の輪飛んできたりして」

タモリ

「それでは登場していただきましょう。前回の秋穂子さんの紹介で  
初登場、洩矢諭訪子さんです～。どうぞ～」

（

拍手と共に諭訪子が登場！

『ケロちやーん~!~』

『可愛い~!~』

諏訪子

「どうも初めまして……って、神がこんな登場でいいの~?~」

慣れない事態に困惑しながら諏訪子が席に着く。

タモリ

「どうも初めまして。あ、それは?~」

諏訪子

「ふつふつふ。よくぞ聞いてくれました。神奈子登場の時からずつ  
と言いたかったお祭り、長野県は諏訪郡、諏訪大社の御柱祭のポス  
ターです!!~」

タモリ

「やはりそうりますか~。たしか神社に立てている柱を新しい木に  
変えるんですね?~」

諏訪子

「そうそう。信州・諏訪大社では七年に一度、寅年と申年に一度宝  
殿を新築し、社殿の四隅にあるモミの大木を建て替える祭りのこと  
よ~」

タモリ

「え?~じゃあ次の御柱祭はいつ?~」

諏訪子

「去年やつたから…次は平成29年ね」

タモリ

「へえ～。その頃には早苗さん成人してますね」

諭訪子

「それは言っちゃダメだよ～。晴れ着姿の早苗見たいけどあ

タモリ

「おつと。もうでしたねえ」

諭訪子

「祭りでは、重さ10トンを超える巨木を山から切り出し、人力のみで各神社までの道中を曳いて、最後に社殿を囲むように四隅に建てます」

タモリ

「す～いな～」

諭訪子

「柱を山から里へ引く「山出し」が4月に、神社まで運び御柱を各社殿四隅に建てる「里曳き」が5月に、上社・下社それぞれで行われます」

タモリ

「ちょっと待った、そんな柱運べるの…？道の曲がり角とかでつつかえるんじゃ…」

諭訪子

「運ぶの…それが祭り。御柱祭のある年の秋には、諭訪地方の各地

区にある神社（小宮）でも御柱祭が行われるから一年中盛り上がるよ！」

タモリ

「すごいですね～。東方いいともで一番長いイベント解説だったと思いません。貼つといてちょうどいい！！」

タモリ

「お花も結構届いてますね～。ZUNさんに上海アリス幻樂団、守矢神社、秋姉妹、妖怪の山一同、鍵山離さんからも！」

諏訪子

「へえ～。結構来たもんだねえ～。いやいや、結構信仰出来てきたね～」

タモリ

「信仰できましたねえ」

諏訪子

「ただねえ、神奈子の信仰の方が多いんだよなあ。全く

タモリ

「まあまあ…。根に持つのはわかりますが

諏訪子

「いやねえ、見た目からして私を神様と思っていない人が多くてさあ～

タモリ

「ははは…。知らない人からすればそうでしょうねえ」

諏訪子

「どうしたものか。村人の目の前で大ガマでも口寄せしてみようかなあ？」

タモリ

「神様というより忍者みたいですねえ！？」

諏訪子

「でも悲想天則のおかげで私も神と認識されたようね。少しずつ献上品やお賽銭も増えてきたみたいだし」

タモリ

「よかつたですねえ」

諏訪子

「だんだん昔の力を取り戻してきてるね。いやほんと移り住んで良かった」

タモリ

「え？ 昔の力？」

諏訪子

「だつて神様は人々の信仰心が力の源なんだよ？ 信仰心が高まれば出せる神徳も上がるでしょ？」

タモリ

「となると昔は相当すごかつたんでしょうねえ」

諏訪子

「そりやあもう…。東日本のほとんどが私のものと並んでも過ぐる  
やないんだからー。」

タモリ

「そうなんですかー?」

諏訪子

「そりやあやうやくミシャグジ様率いてくるんだから

タモリ

「なら太古の昔にあつた諏訪大戦は壮絶だつたでしょ? なあ

諏訪子

「すうかつたなあ…。あの時は神奈子も全盛期の力を持つていたからねえ」

タモリ

「神同士の戦い…。もはや悟空対ベジータのレベルですかね?」

諏訪子

「どんな例え! ? もういたこ合ひへんかも」

タモリ

「ええ! ?」

諏訪子

「神奈子が歩けば風が巻き起しつ、海に行けば水面に道ができる…」

タモリ

「すごいな神奈子様! ?」

諏訪子

「私がうなれば大地が割れ、周りの木々は枯れ果て…」

タモリ

「おお～！」

諏訪子

「三日三晩にも及ぶ歴史的な戦いだつたわね。流れ弾が日本中に飛んで被害が出たわ」

タモリ

「うわあ…。大きな被害だつたでしょうねえ」

諏訪子

「神奈子の御柱で大地がえぐれ、私の鉄の輪で山一つが斬られて平地になり…。いや大きな被害だつたわ。地形が相当変わったし」

タモリ

「考えただけでも恐ろしいな！」

諏訪子

「それで静岡と愛知の海岸線がぐにゃぐにゃに曲がっちゃつたし」

タモリ

「いや嘘でしょ…。それは無い…！」

諏訪子

「岩手と富城の海岸線もギザギザにしちやつたし」

タモリ

「あれはリアス式海岸！谷が沈んで出来たんでしょう。」

諏訪子

「滋賀県にも流れ弾が飛んで大穴があいたのよねえ。今は湖になつてるそりだけど」

タモリ

「なんで琵琶湖自分が作ったみたこないと呟つてゐるのー脚色じゅうせきでしょー。」

諏訪子

「新潟の佐渡島も“S”みたいな形に変えやつたし

タモリ

「マリージュさんご謝つてきなさい。」

諏訪子

「四国と北海道も本州から離れちやつたし

タモリ

「嘘にも程があるのでしょー。」

諏訪子

「あら？ ばれた？ 神話だし多少の脚色は有りかなあと思つて

タモリ

「めうせくせうやな神様だなあ……」

（

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

諏訪子

「あーうー。どうしようかな?」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか?」

諏訪子

「じゃあ…“長野の御柱祭を実際に見たことがある人”にします」

タモリ

「え?」

諏訪子

「?」

タモリ

「それ…神奈子様がもう言っちゃいましたよ?」

諏訪子

「何つ!…くう。ならば“御柱祭で御柱を曳いたことある人”でお願い!」

タモリ

「あの柱を引っ張ったことある人ってことですね?では“御柱祭で

御柱を曳いたことある人”スイッチオン！”

(

諏訪子

「あ、1人！！」

ADさんからストラップが渡される

タモリ

「あ、あの人だ！！」「手を挙げる男性を指さす。

諏訪子

「やつた！神奈子が取れなかつたストラップ取つた！ありがとうございます！」

タモリ

「良かつたですね！」

諏訪子

「良し良しーお前さんにゃあ極上の神徳を『えよーー』

タモリ

「ずいぶんな大盤振る舞いですねえ」

（  
一日CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『えへーー.』

諏訪子

「それじゃあ、いつの東風谷早苗を呼びます」

タモリ

「お、人間最後のキャラが登場しますか！」

ADちゃんがつながった電話を諏訪子に渡す

諏訪子

「もしもしし？」

早苗

「はー、もしもしし」

諏訪子

「おお早苗。見てた？」

早苗

「見てましたよ…。はあ、全く何を言つてこらんですか！テレビの前で大嘘つかないでくださいー.」

諏訪子

「まあまあ、神話にはインパクトも必要だよ？じゃあタモリさんご代わるから

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

早苗

「もしもし、早苗です！」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

早苗

「はい。大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

早苗

「いいとも～！」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

)

## 第四十八回・洩矢諏訪子（後書き）

第四十八回、洩矢諏訪子編いかがでしたか？  
神話をオーバーに話すというネタでした。實際そなうなら神様は永遠  
に廻れなかつただろうなあ‥。

神様キヤラには毎回苦戦しております。信心がないとネタに困ります。  
初詣以外に神社行かないからなあ。  
ちなみに私は佐賀の祐徳稻荷神社に毎年行っています。

さて、次回は早苗さんです。次回も見てくれるかな？

告知！

いいとも第50回の次の回に「50回記念いいとも増刊号」と称し  
た話を書きます。

内容はその時のお楽しみということで。気長にお待ちください。年  
内には投稿したいと思います。

第四十九回・東風谷早苗

（

タモリ

「はい、こんにちは～」

『こんにちは～』

タモリ

「今日は現人神さんですねえ」

『そ～ですね！～』

タモリ

「人間なのに神様なんですね」

『そ～ですね！～』

タモリ

「お供え物とかいるかなあ？でも生きてる人にお供え物つていの  
かなあ？悩むな～」

タモリ

「それでは登場していただきましょう。前回の洩矢諭訪子さんの紹  
介で初登場、東風谷早苗さんです～どうぞ～」

（

拍手と共に早苗が登場！

『早苗やあけへん~！』

『可愛い~！』

早苗

「いつもありがとうございますー！わー！すーーいーーことまだ  
ーーー！」

テレビ出演にテンションが最高潮になつてこの早苗。

タモリ

「相当盛つ上がるますねえー！」

早苗

「いやだつていいともですよー？こことも田代演ですよーすーこな  
ー。高校のみんな見てるかなー」

タモリ

「見てるところですねえ。あ、それは？」

早苗

「はー。長野県は諏訪郡、諏訪大社の上社で4月1~5日に行われる  
御頭祭のポスターです！！」

タモリ

「前回と同じく諏訪大社のお祭りですか。御頭祭とは？」

早苗

「豊穣祈願として前宮へ神輿行列が練り歩くお祭りです。鹿肉や鳥

獣魚が奉納されます

タモリ

「へえ～」

早苗

「今ははく製ですが、古くは鹿の頭も奉納していたそですよ？」

タモリ

「ワイルドなもの好むんだなあ～」

早苗

「その鹿の頭の中には必ず耳の裂けた鹿がいて、諏訪大社七不思議のひとつに数えられています」

タモリ

「諏訪大社七不思議！？なんか神々しいような話だなあ～」

早苗

「いやいや。科学的に実証された話もありますよ？御神渡りとか

タモリ

「それ言っちゃっていいんですか？現代的な巫女さんだなあ。貼つ  
といてちょうだい！」

タモリ

「お花も結構届いてますね～。ZICOさんに上海アリス幻樂団、守  
矢神社、秋姉妹、妖怪の山一同、鍵山雛さん、博靈神社、霧雨魔法  
店、白玉楼からも～」

早苗

「うわ～！ありがとハジマスー！」んなにたくせん…」

タモリ

「す、いですねえ」

早苗

「持つて帰つて神社に飾りましょ。私たちの威光を示すのこちゅうどこいし」

タモリ

「そういうおえですか！？いやす、いな～。最近はどうですか？」

早苗

「いや私もだいぶ妖怪退治に慣れましたね。マジウムも倒しました」

タモリ

「だいぶ板に付きましたねえ。風神録、地靈殿、星輦船、非想天則、神靈廟に出演しましたし」

早苗

「でも幻想教に来た時は色々困惑しましたね～」

タモリ

「そうでしょうねえ。女子高生が江戸時代にタイムスリップしたようなものですし」

早苗

「だから料理にも苦労しましたよ。かまどなんて初めて見ましたし」

タモリ

「社会科見学とかで見る以外に、かまどと関わる」ことないからなあ

早苗

「神奈子様や諭訪子様に習つたんですが、一人とも料理するの久し  
ぶりだったからつい覚えで……」

タモリ

「成程なあ」

早苗

「現代文明つていいな」とつづく思い出しましたよ。まあ慣れてしま  
えばそんなに苦に思わないのですが」

タモリ

「じゃあ今はかまどや七輪とかを使いこなせているんだ?」

早苗

「まあ人並みですけどね。さすがに幻想郷の人にはかないませんよ。  
でもご飯つかまどで炊くと美味しいんですね!驚きました」

タモリ

「そのとき初めて釜で炊いたご飯食べたんだ? そりだらうな~。今  
はどこも電気ジャーだしなあ」

早苗

「お焦げも幻想郷で初めて食べましたし。あれ食べたらいつも  
おにぎりには戻れないなあ~」

タモリ

「その点では良かつたですねえ。妖怪退治も順調だし、波に乗つてますねえ」

早苗

「ええー！そのうち鬼でも倒してやりますよー！」

タモリ

「ちょっとー！エライ」と言つちやつたよー！止めときなさいって！萃香さんや勇儀さんが守矢神社に攻め込んできたらどうすんのー！？」

早苗

「勇儀さん？」

タモリ

「地獄の旧都に住んでる鬼ですよ。通称“力の勇儀”好戦的だからあおるのは止めときましょー」「う

早苗

「大丈夫！勝てぬものなどあんまりない！」

タモリ

「ストップ！それ妖夢さんの名セリフ！“斬れぬものなどあんまりない”でしょ！」

早苗

「え、そなんですか？」

タモリ

「知らなかつたのー！？奇跡の妖夢アレンジ出来ちやつたんだ？」

早苗

「現人神ですからねえ」

タモリ

「いや絶対偶然でしょー。ドヤ顔しないでトセー」

早苗

「まあ悪さしないなら戦つ名田がないんですけどね」

タモリ

「あなたの場合大した名田もなく戦つてませんか！？尼さんとか毘沙門天の代理とか、拳句の果てに伝説の僧侶まで倒しちゃったし」

早苗

「いやだって靈夢さんや魔理沙さんも倒しているでしょう？私も妖怪退治してもいいでしょーつにー！」

タモリ

「いやまあそうですが…」

早苗

「それに…楽しいし」

タモリ

「ちょっと早苗さん！？幻想入りしてから常識失いすぎでしょー。」

早苗

「向こうは常識にとらわれない世界ですよ？常識失っているのは靈夢さんや魔理沙さんの方が上ですって」

タモリ

「……確かにそうだな。妖怪がたむろする神社の巫女と、泥棒の魔法使いだからなあ。こんないいかげんな主人公まづいないでしょうね」

早苗

「でも少しありすぎたようだ、白蓮さんと戦った後に色々と説法受けましたね」

タモリ

「白蓮さんから…それはすごいな…」

早苗

「流石に魯钝なだけありますからねえ。話しがうまいんですよ。それになんというか…オーラといいますか、そんなのがあるんですよねえ」

タモリ

「そつでしうねえ」

早苗

「あのオーラ出すのはまだまだ時間かかりそうですねえ」

タモリ

「そりやあそうでしょ。芸能人でもなかなか出せませんよ?」

早苗

「今度登場するときは、バックに何か背負おつかしら?白蓮さんの背中にあつた、黄金のアレつけたらオーラ出るかな?」

タモリ

「いや痛すぎるでしょー。それこそみんなから“南無ニ”とか言われますよ！」

一曰CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

早苗

「う～ん。どうじょうかな？」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか？」

早苗

「じゃあ…“巫女服を着たことがある人”にします

タモリ

「コスプレは有りですか？」

早苗

「それ入れるとまざいかなあ？コスプレは無しでお願いします

タモリ

「では“巫女服を着たことがある人”スイッチオンー！」

（

早苗 「あ～、0人か…」

タモリ

「あ～、残念でしたねえ！」

早苗

「コスプレ有りだつたら？」

タモリ

「やつてみます？ではコスプレ有りでスイッチオンー！」

早苗

「あ！一人！アリにしつけば良かつた～」

タモリ

「残念でしたねえ…」

（  
一曰CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え～！…』

早苗

「それじゃあ、命蓮寺の聖白蓮さんを呼びます

タモリ

「おおー、金蓮寺メンバーじゃありますか！」

アロちゃんがつながった電話を早苗に渡す

早苗

「もしもし〜？」

白蓮

「はー、もしもー」

早苗

「えいも。今何されてしましました？」

白蓮

「ちよつといじ説法が終わつたといひです。あなたもまたいかがかしら  
わつまですね？」

早苗

「そりでね、近いうちにまた聞きたいくです。ではタモリさんには

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもし〜、聖白蓮と申します」

白蓮

「もしもし〜、聖白蓮と申します」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

白蓮

「明日のお昼ですか？はい、大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

白蓮

「いいとも～！」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

（

## 第四十九回・東風谷早苗（後書き）

第四十九回、東風谷早苗編いかがでしたか？

イベント紹介に苦戦しましたが、書き始めるだけこうすんなり書けましたね。

早苗はぶつとんだ発言しているけど、よくよく考えるとみんな常識にとらわれていないんじゃないかなあ？常識の外に幻想郷はあるんだし。

元から早苗はおかしいのか？幻想郷で毒されてしまったのか？

私が初めてプレイした東方シリーズが星輦船なので、白蓮さんには強い思い入れがあります。あのときは何もわからないままプレイしてたな～

星輦船の時に、白蓮さんがスペカ2枚目か3枚目の後に背中に、黄金のアレを背負いますよね？あれ嫌だったなあ…  
後ろから飛んでくる弾を上手く避けられないんです。いつもマスパで押し切つてました。

次回は記念すべき50回田一節田を飾るのは白蓮さんです。次回も見てくれるかな？

第五十回・聖白蓮

（

タモリ

「はい、こんにちは～」

『こんばんわ～』

タモリ

「今日はクリスマスイブですねえ」

『そ～ですね～～』

タモリ

「この辺に五十回戻を迎えました。嬉しいですねえ」

『そ～ですね～～』

タモリ

「……服からして、今日は白蓮さんよつフランデールさんを呼ぶべきだったかなあ～？」

タモリ

「それでは登場していただきましょう。前回の東風谷田苗さんの紹介で初登場、聖白蓮さんですか～？」

（

拍手と共に白蓮が登場！

『白蓮様～！～』

『ひじり～ん～！～』

白蓮

「どうもはじめまして。聖白蓮と申します」  
丁寧にお辞儀をして白蓮登場！～

タモリ

「どうも初めまして！あ、それは？」

白蓮

「はい。鳥取県三朝町にある、三徳山三仏寺の除夜の鐘のポスター  
です」

タモリ

「あと一週間で大晦日ですからねえ。大人も子供も鐘を突くんじ  
ょう」

白蓮

「いえいえ、ここには子供は行けませんよ。日本一危険な除夜の鐘  
といわれるほどですから」

タモリ

「えー？そつなんですか？」

白蓮

「はい。本堂には鐘がなく、標高約490メートルの山腹にある鐘

「 横堂まで一時間かけて登つていくんです」

タモリ

「 そりゃ 大変だらうなあ…。雪も降るだらうし、暗闇の中登山するのか～」

白蓮

「 ですからー8歳以上でないとダメなんです。夏場には滑落死亡事故もありますし。除夜の鐘では事故は無いぞうですが」

タモリ

「 でもそれだけ苦労して鐘突いたら、一年の厄も払い落せそうだなあ…。貼つといてちょうどだい！」

タモリ

「 お花も結構届いてますね～。NICONさんに上海アリス幻樂団、命蓮寺、守矢神社、人里一同、博靈神社からもー」

白蓮

「 うわーー！ ありがと＼＼れこますーーこんなにたくさん…」

タモリ

「 す」こですねえ」

白蓮

「 お堂に飾りましょ。新年を迎えるのに丁度いいわ

タモリ

「 はつはつは。最近はどうですか？」

白蓮

「そうですね～。封印から解放されて、今はみんなと楽しくやつております。昔と違つて妖怪と人間にも隔たりがなくなりましたし」

タモリ

「博靈の巫女さんが全部解決してくれましたしねえ」

白蓮

「今はこの時代に馴染むことの方が大変ですね」

タモリ

「時代の差がありますか？」

白蓮

「そうですね～。文明の発達を感じます。特にあの新聞記者さんが持つてるカメラには驚きましたよ」

タモリ

「見たことない人には衝撃だつたでしょうね～」

白蓮

「あれどいつも紙に絵を描いてるんじょ～。中に絵のうまい妖精が何人もいるのかしら?」

タモリ

「それはちょっと違いますね…。あ～、ちょっと難しい説明になりますねえ…。どうやって説明すればいいんだか」

白蓮

「人に聞いても教えてくれないんですよね。寺のみんなもわからな

いし、この前魔理沙に聞いたら何故か笑われましたし

タモリ

「聞いたんですか！？大口開けて笑つたでしょうねえ」

白蓮

「私何かおかしなこと言つたかしら？」

タモリ

「うーん、うまい説明が思いつかない…」

白蓮

「まあ写すのは構いませんが、でも隠れて撮るのは止めてほしいですね。取材でしたら受けますが、隠れていると少し怖いです」

タモリ

「突然現れてきますからねえ」

白蓮

「ただ最近、その文さんから“文々。新聞に聖さんのコーナーを作りたい”と言われたんですね」

タモリ

「え？ そつなんですか？」

白蓮

「聖白蓮の今日の法話、というタイトルで毎号連載したいと頼まれまして」

タモリ

「それ面白やうですねー。」

白蓮

「ですがお断りしました。法話はやはり直に話してこそ意味のあるものかと感じまして」

タモリ

「それもそうですねえ……」

白蓮

「気の荒い妖怪でも、話せばわかる方もいらっしゃいますし。話すつて大切ですよ」

タモリ

「そうですね～。でも、風見幽香さん」説法は通用するでしょうかね?」

白蓮

「通じますよ。花を愛でる方に悪い人はいません」

タモリ

「あの人は花以外に愛でないんだけどなあ」

白蓮

「あとはそうですね…新年の準備に追われていますね。大掃除とか、しめ縄や門松作りとか。お屠蘇や鏡餅も買わないといけないし」

タモリ

「本格的ですね!?」

白蓮

「今からやつておかないと大変なんですよ。私に星にムリサに一輪、雲山に小傘ちゃんにナズーリンに響子ちゃんの8人ですから」

タモリ

「小傘ちゃん手伝ってくれるんですか?」

白蓮

「お雑煮とおせち料理出すところしたら喜んで引き受けたれました」

タモリ

「それなら引き受けるでしょうな~。あれ? ぬえさん手伝わないんですか!?」

白蓮

「それがどこにもこないんですよ。どうも紅魔館のほうで宴会やるようだから、こっそり遊びに行つむやつたみたいで」

タモリ

「成程なあ、紅魔館は今頃クリスマスパーティーの準備に追われているでしょ?」

白蓮

「正月までは帰つてきてしまいこんですけどねえ」

タモリ

「ぬえさんにしか頼めない仕事でもあるんですか?」

白蓮

「だつて、能力からして上手そうでしょう?」

タモリ

「何がですか？正体不明の能力で？」

白蓮

「絶対上手よ！獅子舞（しじま）の役」

タモリ

「それは関係ないと思いますよーー？」

一曰CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

白蓮

「うーん。どうしようかしら？」

タモリ

「頑張つてください。何いきますか？」

白蓮

「じゃあ…“今年除夜の鐘を突きに行く人”にします」

タモリ

「では“今年除夜の鐘を突きに行く人”スイッチオン！」

(

白蓮

「あ、3人ですか~」

タモリ

「結構いらっしゃいますね~」

白蓮

「故郷のお寺で突くんでしょうかね~。よいお年を~」

一田(シ)ミ

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい~!」

『え~!~』

早苗

「それじゃあ、命蓮寺の村沙水蜜を呼びます

タモリ

「おお、船長ですか!~」

Aのさんがつながった電話を白蓮に渡す

白蓮

「もしもし~?~

ムラサ

「あ、もしもし?」

白蓮

「今なにしてました?」

ムラサ

「みんなで放送見てました。いや新鮮な気分でしたよ。聖がＴＶ出  
演だなんて…」

白蓮

「ふふつ、意外だったかしら?ではタモリさんに代わるわね」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

ムラサ

「もしもし、村沙水蜜です!」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか?」

ムラサ

「はい、大丈夫です!」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな?」

ムラサ

「いいとも～！」

タモリ

「はい、お待ちしてま～す」

）

## 第五十回・聖白蓮（後書き）

第五十回、聖白蓮編いかがでしたか？

年末ネタ放り込んだらすんなり書けましたね。寺を8人で掃除するんだから大変だらうなあ…。

ふと白蓮や星が割烹着かっぽうきで掃除するシーン想像したらにやけてきました。あの雰囲氣で割烹着なら似合似合いすぎでしょうね。

皆さんはクリスマスイブ、いかがお過ごしでしょうか？私は忘年会でもうすでに燃え尽きました。

今はこたつでまつたりと小説を書いたり勉強しております。

年明けからはテストで更新が難しいです。亀更新となりますがご容赦ください。

しばらくは命蓮寺メンバーで行きたいと思います。ムラサが出演するのはまだ先になるでしょう。

さて、以前から申していた“いいとも増刊号”ですが、明日の正午に更新いたします。

どうぞ期待ください。次回も見てくれるかな？

## 第五十回 特別記念・いいとも増刊号

（

文

「はい！メリークリスマス！清く正しい伝統のブン屋、射命丸文です！今日の、東方いいとも50回を記念した増刊号のリポーターをさせていただきます！」

この増刊号では、これまでのいいともでストラップを獲得した方が、その後ストラップをどう使っているのか取材します！初めてのリポーターで少し緊張しますねえ。リポーターだからカメラ撮影いらないし。逆にカメラ向けられているんですよ。ねえ桜？」「ど？」

桜

「どうも。今回は番組形式ということでカメラマン任された犬走桜です。ろくな映らないで、声のみ出演の私よりもしだと思いますけど？」

文

「いやいや。私も普段と違つことだらけで大変ですよ？マイク握られてるし、さつきからずっとカメラ向けられて変な気分なんですよ」

桜

「じゃあ文さんもすこし取材を控えたらどうですか？“人のふり見てわがふり直せ”でしょう？」

文

「いやいや、私はカメラ撮影のみ。一瞬を切り取るだけですよ。動

「画は取つていませんし」

柾

「調子のいい」と言ひながらつて…

文  
「それでは早速行つてみましょつー。」

（白玉樓）

文  
「ほんとうは～」

妖夢

「あれ？ 天狗が冥界に何の用？」の間の神靈騒ぎに幽々子様は関わつていなかつよ？」

文  
「あややや。そりぢやありません。あの、ストラップどひつされました？」

妖夢

「ああ、あのタモリさんのストラップのことね。あれなら…」

文

「剣の柄に付けてあるとか？」

妖夢

「しませんよー似合づわけないじやないですか！ 財布の根付けとして使つてこるのです」

文

「根付けに?」

妖夢

「落とさないよつ付けているのです。一度よくて助かります」

文

「へえ~。見せてもらひます?」

妖夢

「いいですよ。ほり」

文

「深縁の長財布ですか~。ストラップがつくと和風の財布も急に現代的になりますねえ」

妖夢

「でも中身は空に近いんですけどね~」

文

「あやややや。頑張つてください。それでは~」

桜

「幽々子様からお年玉が出るといですね。よいお年を~」

（紅魔館）

桜

（

「クリスマスマード全開ですねえ。全部真っ赤」

文

「いやこつでも真っ赤ですよー。では、早速潜入したいと思こまや」

レ//コア

「わすでに見つかってはいるのなら、それは潜入と呼べなくてよ~。」

文

「うわあー。びっくりしたんですか?」

レ//コア

「私を誰だと思って?運命を操るレ//コア・スカーレットよ~。」

文

「こきなりカリスマあふれ出しききましたねえ…。それでは早速、ストラップビッグされました?」

レ//コア

「ああ、あれね。日傘に付けてはいるわ」

文

「日傘?..」

レ//コア

「ええ。妹の日傘と間違わないように付けてはいるわ。似た傘だからやせじこへて…」

文

「とか言ひやつて、せつげなく血腫してません?」

レミコア

「そんなことないわよ。それに少し邪魔だしね」

文

「なら外せばいいじゃないですか」

レミリア

「それは…その、あれよ。今更外すと、かえつて違和感があるじゃない? それだから仕方なくはめているよ」  
しつこい質問攻めに少しだじろぐレミコア。

文

「本当ですかねえ? 目線が少し泳いでいますよ?」

咲夜

「失礼いたします。お嬢様、紅茶が入りましたわ」

レミリア

「丁度いいわ。咲夜、この口づるさいカラス片づけて頂戴」

咲夜

「かしこまりました」

文

「丁度良かつた! 咲夜さん。あなたもストラップもらいましたよね  
? 何を使っていますか?」

咲夜

「私? そうねえ…。愛用の懐中時計に付けているわ

文

「え？ 懐中時計に？」

咲夜

「人から聞いたんだけど、ストラップつてものはよく使う物につける飾りなんでしょう？だから懐中時計に付けたのよ」

文

「懐中時計ですか～。うーん、少しイメージと違いますねえ？瀟洒なメイドが時計にストラップ？」

咲夜

「何だつていいじゃない。じゃ、私は仕事をさせてもらひつわ

文

「ええ、頑張ってください

咲夜

「それでは遠慮なく。“奇術”エターナルミーク！！

桜

「仕事つてそれ！？わああああー！」

文

「あややや。これにて失敬しましょう」

（霧の湖）

桜

（霧の湖）

「はあ…はあ…。ひどい目にあいましたねえ。どうやつてあんなた  
くさんのナイフ投げているんだか。時を止めても普通に無理でしょ  
う」「…」

文  
「シツ！…ましたよ…」

文  
「え？」

文  
「どうも～。お久しぶりです」

レティ

「あら？天狗が一人で何の用？」

文  
「唐突ですが、ストラップビットされました？」

レティ

「あ～、あれね。ほら、胸の飾りに付けているわよ」

文

「え？ああ本当ですね。先ほどまで服に隠れていましたが」

レティ

「…このつのもアリかなあと思つてね」

文

「新しい発想ですねえ。服につけるとは」

レティ

「気分一新、今年も寒波を巻き起しすわよー。ホワイトクリスマスにしてあげるわー。」

桺

「ほびほびにしてやつてください...。コタツから出れなくなるんですから」

レティ

「あら? 犬は喜び庭駆け回るんじょ?」

桺

「童謡の中だけですって...」

（人間の里、寺子屋）

文

「失礼します」

慧音

「お。文に桺か。まあ上がりなよ」

文

「いえ、時間は取らせません。あの、ストラップどうせれました?」

慧音

「ああ、あれか。しおり代わりに付けてくるよ」

文  
「しおりにー?」

慧音

「いやあ…付けようと思つたんだが、教師として田立つところには付けられないし。それで、歴史書を読むときにしおりが無かつたのでな」

文

「歴史書のしおりがストラップですか~」

慧音

「初めは違和感があつたが、慣れてくると読書に欠かせないものになつたよ。小さなことだが、これも一つの歴史の幕開けなのかもな

文

「寺子屋でブームになるかもしませんねえ。しおりにストラップ」

桙

「それはないと思こますけど…」

（永遠亭）

文

「失礼します。どうもこんにちは」

鈴仙

「あり?ブン屋が薬師に何の用?風邪かしら?」

文

「風は私が操るものですよ。それに今日はあなたに用があるのです。ストラップビッグされました?」

鈴仙

「ああ、あれね。ほらここに」

文

「へえ~。ネクタイピンに付けているんですか?」

鈴仙

「ええ。なかなかシャレでいるでしょ!」

文

「斬新ですねえ」

てゐ

「おーい。鈴仙~?ん?何してんのさ?」

文

「丁度良かつた。あなたにも聞きたいのですが

てゐ

「え?私?」

文

「ストラップビッグされました?」

てゐ

「ここだ。人参の首飾りと一緒に付けているよ

文

「飾りと一緒に付けるのが流行っているんですかねえ？」

鈴仙

「それよりてゐ？頼んでおいた倉庫の片づけはどうなつたの？そろそろ片づけておかないと、お正月の時餅つきに困るんだから」

てゐ

「それが大変なんだよ。餅つきの臼が少し割れていってもあ

鈴仙

「えー？どんな風に？」

驚きつつ、てゐに駆け寄った次の瞬間！

ベタッ！

床に塗られたノリに足を取られて前のめりにすっ転んだ！

鈴仙

「あやあああ……！」

文

「おお～！シャツターチャーンス～！今日は白か？シマシマか？それともレースか？」

桜

「ちよつと文をふ…止めとかもしちよつよ…」

文

「何いつてんの…ジャーナリストとしてこのチャンスは逃せな…つ

「あれ？」

鈴仙

「ふつふつふ…残念でしたーちゃんとスパツツ履いていたのよー。」

てゐ

「な、なんだつてーーー?」

桺

「兎の知恵比べも日々進歩しているんだなあ」

（永遠亭の帰り道）

文

「さて、たしかここいらこ…。あ、あつた!すいませーん!」

ミスティア

「あら、記者さんが何の用?」

文

「忙しいお毎時にすいません。ストラップひとつされました?」

ミスティア

「ストラップ?ああ、あれならこここ…」

文

「あやややや。額縁に入れて飾っているんですか!?」

桺

「店にやつてきた有名人のサインみたいな扱いですね」

ミスティア

「あのときタモリさんのサインも貰つておけばよかつたなあ。あ、それに対抗してか、店に来る人がサインを書いていくんですよ」

文

「あ、本当ですねえ。妹紅さんには萃香さん、紫さんとのサインもありますよ！撮影しましょう！」

ミスティア

「あー！ストップ！店に来た時のお楽しみひとつにして…これ見たさに来るお客様さんもいるんだから…」

桺

「商魂たくましいなあ…」

（太陽の煙）

文

「さて、幻想郷危険人物ぶつちぎりワースト1位に輝く、風見幽香さんのいる太陽の煙にやつてしまひました」（超小声で）

桺

「うわあ…。すげく緊張しますねえ」

文

「今は冬、ひまわりは既に枯れています。冬の花がちらほらと咲いております。流石に恐ろしいので遠くから望遠で撮影しております

す

桜

「あー、いましたよー！」

文

「いました！風見幽香さんです！日傘を回しつつ花畠を歩いております！桜、限界までアップに！ストラップはどうあるべき？」

桜

「え～と…。あ、ありました！手に持っているカゴに付けてます！」

文

「あ、カゴから何か…。球根です！球根を取り出しました…楽しそうに笑いつつ、球根を植えてあります」

桜

「どうやら種やシャベルといった園芸用具を入れているカゴみたいですね」

文

「微笑んであります！珍しい！幽香の笑顔！どんな異変より珍しい！」

桜

「ひつしていると穂やかそな女性なんですけどねえ」

文

「桜、それは花の前だけですよ。人や妖怪には情け容赦なく戦い、妖怪が集まる幻想郷でも特筆して好戦的なんですから。近づいたら

駄目です

桺

「そんなにー?」

文

「ええもう…。サディストな妖怪ゾ・ーで閻魔様でも狂ふことなく鬪う、それはそれは恐ろしい人なんですから」

桺

「あ、立ち上がりました」

文

「球根を植え終えたんですかね? 立ち上がって…傘を閉じて? 桺! 飛んで!」

幽香

「ずいぶんなこと言つてくれるわね…マスタースパーク!-!-」

桺

「うわああああ!-!-」

（彼岸）

桺

「はーつ、はーつ…。危なかつた、あと一瞬飛ぶのが遅かつたら… 文さんありがとござります。幽香さんに聞こえていたんですね?」

文

「おや？逃げ回っていたら彼岸に着きました。あ、あれは…小町さんです！」

桺

「やはり…寝てますねえ。ずいぶん見事にいびきをしています」

文

「人が働いてるのにのんきですねえ。まあいいです。寝顔を一枚

カシャッ！

小町

「ん…んん？なんだい、ブン屋もついに息絶えたのかい？」

文

「起きましたか。まだまだ健在、そう簡単に死にませんよ。ストラップをどうされたか聞きたんです」

小町

「ああそりゃ。だつたらほら、あそこへわ」

文

「あ、船の船首に付けているんですか？」

桺

「木造船にストラップですか…。これでの世に送りられるつていいのかなあ？」

小町

「いじやない。浮世の思ひ出の一つか。さて、あたいはまたひ

と眠りするかね

文

「ちょっとひょっと、いいかげん働いてくださいよー。」

小町

「いいじゃないか。今日はクリスマス。昼寝のプレゼントがあつてもいいだろ?」

映姫

「死神に祝日も正月もありませんー!」

小町

「きやんーし、四季様!/?」

映姫

「まったくもう…。私たちの仕事にクリスマス休暇がないことは分かつているでしょ!そんな事だと大晦日に仕事入れますよー。」

小町

「え!?それは流石にかんべんしてください…」

文

「面白くなつてきましたが、四季様にからまれると面倒です。退散しましょ!」

桜

「身から出たサビとはいえ、クリスマスに説教ですか…」

文 「妖怪の山へ

文 「ふう、一息つかましょ。おや?」

桺

「あ、にとりだ! お~い!」

にとり

「ん? ああ、桺に文! もう取材終わつたのかい?」

文 「いや、ちょっと一息つけようかと。それにカメラのバッテリーも補充したかったですし」

にとり

「ああそつか。はいバッテリー。カメラの調子はどうだい?」

桺

「ばっちらりです。たすがにとり!」

にとり

「いや~、そう言わると照れるなあ

文

「ところで、あなたはストラップなどひつられました?」

にとり

「ひゅい!? 私? ストラップならいい...」

文

「ああ、背中のココックに付けていましたか」

柾

「それにしても、いつたい何入れているんです?」

にとり

「そりゃあ、工具一式全部入れてるよ。材料さえあれば大抵のものは作れるさ」

文

「見せてくれます?」

にとり

「いいよ。ほいり」

文

「うわあ…きちんと整理されてますねえ。さすがエンジニア

にとり

「ふつふつふ

柾

「いつそ服をカツパからツナギに変えたら?」

にとり

「それは流石に河童の意地が許さないといふか何といふか

文

「では、次は守矢神社に行つてみましょー!」

（守矢神社）

文

「ここにちま～！」

神奈子

「おや、いらっしゃい」

諏訪子

「あれ？ 天狗が何の用？」

文

「ちよつと良かつたです。諏訪子様。ストラッパビツされました？」

諏訪子

「ああそれなら、ほらこじこじ」

文

「鉄の輪に付けているんですか！？」

諏訪子

「わうだよ～」

神奈子

「鉄の輪に付けて、わざと私に見えるといひで鉄の輪投げて見せびらかしてくるんだ」

文

「そんなことを…」

諏訪子

「何?持つてないから悔しいの?」

神奈子

「いーや全然!そんなの全くいやましくないね!」

諏訪子

「欲しい?欲しい~?」

文  
(ずいぶん子供じみたことするなあ…)

桺

(諏訪大戦もこんな感じだったのかなあ?)

文  
「じゃ、じゃあ私はここでおことましますね」

（地底、旧地獄街道）

文

「うーん、ここは苦手なんですがねえ…。あ、いました

勇儀

「お、ここ天狗とは珍しい」

文

「どうも初めまして。記者の射命丸文と申します」

桺

「白楼天狗の犬走桺です」

勇儀

「あー、いつぞやの天狗か！巫女と共にやつてきたー！」

文

「覚えていただいて光栄です」

勇儀

「どうしたい？呑みにきたのか？」

文

「あ、いや取材でして。お酒はまたの機会に…。ストラップひとつされました？」

勇儀

「あれか。ほれ、ここに」

文

「あ、ハカマの腰ひもにつけているんですねー？」

勇儀

「ああ。ちょうど粋な見せ方だろ？」

文

「あなたらしいですねえ…」

勇儀

「あなたらしいですねえ…」

「最初は手錠の鎖に付けてたんだが邪魔でなあ、ここのに落ち着いた  
といふわけさ」

文 「お酒飲むとき邪魔になりますからねえ」

勇儀

「あ、そういう。同じストラップ付けた奴とさつきすれちがつたよ

柾

「え？ その方ってどこに行かれたかわかりますか？」

勇儀

「たしか地靈温泉に向かっていったなあ。金髪で、赤い帽子だった  
な」

文

「情報ありがとうございます。では早速行ってみますね」

勇儀

「ああ、達者でな～」

（地靈温泉）

文

「さて、田撃証言をもとに探してみましょ～。でも人が多いです  
ねえ」

柾

「探してみましょつか?」

文 「お願こします」

文 「お願こします」

文 「十里眼ー。」

文 桃

文 「その掛け声要つます?。」

文 桃

文 「こましたーあそ」で「一ヒー牛乳飲んでいますー。」

文 「あ、穂子さんー。」

穂子

文 「あれ? なんで天狗がここに?。」

文

文 「穂子さん! 何を? 物産展はどうしたんです?。」

穂子

文 「営業はしてるんだけど、営業時間を短くしたのさ。今の時期はさつきつくなえ。今日は2時から開店だよ」

文

文 「だから湯治?。」

穂子

「ええ。今からまた忙しくなるでしょうけど。しめ縄に干し柿、焼き芋が売れるのよ」

桜

「いいですねえ。繁盛してるとつで」

文

「とにかく、ストラップどうされました?」

穂子

「ああ、ここにあるわ」

文

「あやや、帽子に付けていましたか。でもなんで帽子に?邪魔じゃありませんか?」

穂子

「……だって、こうしないとどちらが姉でどちらが妹かわからない人のために印になると……」

文

「……すいません。つかぬ」とを聞きました。そんな深刻な顔しないで下さい」

穂子

「ぐすつ、いいのよ。私たち姉妹に人気がないのは薄々わかってるわ。二人とも似ていて区別しにくくて双子みたいだつて知ってるわよ!」

文

「いややけで言つてませんよー。」

桺

「鬱になるとヒカルでネガティブになるんだなあ……」

穢子

「だいたいほかの姉妹が似なさすぎなのよーなんで吸血鬼やれとつ妖怪は姉妹で髪の色が違うのよー。」

文

「いや私に聞かれましても…。でも確かに疑問ですね」

桺

「『お』苦労様です。では文さん…」

文

「行きましょうか」

桺

「さて、最後の一人、リリカ・プリズムリバーはどう?」

文

「たぶんあそこでしよう。つこときなさい」

（紅魔館）

桺

「え、ここですか?」

文

「ええ。気づかれるとまずいから、今度こそ潜入するわよ。おそらく彼女たちは紅魔館大ホール近くの部屋にいるはず」

桺

「紅魔館でライブってことですか。それにしても、よく部屋の構造を知つてますね？」

文

「そりゃあ何度も忍び込んで…。あ、ありました！プリズムリバー楽団様控室です！早速行つてみましょ～、こんにちは～」

ルナサ

「お、ブン屋か？」

メルラン

「どうしたの？よくここになるとわかつたわね」

文

「やはり紅魔館だと思いましたよ。クリスマスパーティやりそなところはココがらしいですからねえ」

リリカ

「さつすが～。それで、何の用？」

文

「あの、リリカさん。ストラップビットされました？」

リリカ

「ああ、あれならもちろんキーボードに付けているわ

文

「やはりそれでしたか！ストラップが付いてると、心なしか新しいものに見えますね」

ガチャツ！

咲夜

「用意はいいかしら？派手に…って、またあなたたち？」

文

「あら、これは失敬。リリカさんに用がありまして」

咲夜

「……はあ、まあいいわ。パーティの最中にナイフ投げる訳にもいかないし。見逃してやるわ」

文

「そりゃどうも」

リリカ

「よーしー！それじゃあ円陣組もつか！クリスマスソング特別ライブ、氣合いで入れてくれー！」

メルラン

「ええー！最高のライブにしまじょー！今夜は燃え尽きるわよー！」

ルナサ

「聖なる！」の日に感動を！3・2・1、レディ、ゴー！…」

文

「うわあ、普段見れない舞台裏のプリズムリバー三姉妹ですね！気合入ってます」

桜

「ホントですね。あ、そろそろ時間ですよ！」

文

「皆さんにも、聖夜に幸せが来ることを祈っています。第50回特別記念いいとも増刊号、レポーターは射命丸文をお送りしました！」

文&amp; 桜

「それでは皆さん、Merry X'mas!!」

## 第五十回特別記念・いいとも増刊号（後書き）

第50回特別記念・いいとも増刊号、いかがでしたか？

なんとか形にできました。ネタに苦労し氣づけば12／25の夜明けを迎えました。

クリスマスなのに徹夜してしまった月見草です。誤字とかあつたらすいません。

ストラップのその後を文が取材というネタは以前からできていましたが、偶然にもリリカがストラップ取得していたのでラストをリリカにしました。

紅魔館ではクリスマスパーティでしょうね。文はそのままカメラマンとして記念写真でも撮るのでしょうか？

振り返つてみると、今までに15人がストラップを取得しました。全員が出演したら、またこの企画やりたいですね。

今度やるときは裏話も入れようかなあと密かに思う月見草でした。（大半の話を忘れているから書けるかどうか未定）

ではみなさん、メリークリスマス！そしてよいお年を！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9799v/>

もしも笑っていいともの“テレフォンショッキング”に東方キャラが出演した

2011年12月25日12時56分発行